

金沢市藤江C遺跡Ⅱ

金沢西部地区土地区画整理事業にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書3

1997

石川県立埋蔵文化財センター

金沢市藤江C遺跡Ⅱ

金沢西部地区土地区画整理事業にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書3

1997

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本書は、石川県金沢市藤江北1～3丁目に所在する藤江C遺跡の第2次発掘調査の報告書である。
- 2 藤江C遺跡第2次発掘調査は、金沢西部地区土地区画整理事業に伴うもので、現地調査は平成3年5月～12月にかけて実施され、街路建設予定地4,400m²を調査の対象とした。
- 3 本発掘調査は、石川県土木部都市計画課（金沢西部開発事務所）の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。調査は調査第一課課長平田天秋の指導のもと、同課の中屋克彦が担当し、柿田祐司がこれを補助した。また、調査補助員として大藤雅男、福田弘光、田畠弘、中村繁和の協力を得た。さらに、石川県立埋蔵文化財センター長期研修の実地研修として竹中義博（志雄町）、田中健一（津幡町）も調査に参加した。
- 4 平成3年に石川県立歴史博物館が、同年1月に姉妹館協約を結んだ韓国国立全州博物館側から、交流の一環として韓国側学芸員の受け入れを行った。その研修の一環として、8月19～22日に韓国国立中央博物館の鄭聖喜先生が、10月21～24日に韓国国立全州博物館の俞炳夏先生が発掘調査に参加された。
- 5 発掘調査と報告書の刊行にあたっては、以下の機関と個人に協力・助言をいただいた。

石川県土木部都市計画課、金沢西部開発事務所、石川県立歴史博物館、金沢市教育委員会、中島町教育委員会、マイアミ大学地質音響研究所中島研究室、(社)石川県埋蔵文化財保存協会、セントラル航業株式会社、柄木英道、北野博司、安 英樹、滝川重徳、林 大智、戸潤幹夫、出越茂和、楠 正勝、増山 仁、ディーン・グッドマン、飛田耕児、細口喜則（故人）、横山貴広
- 6 発掘調査出土遺物の整理作業は、主に(社)石川県埋蔵文化財保存協会に委託し、平成7年度に記名・分類・接合・実測を、平成8年度にトレース・復元を実施した。

(平成7年度) 河村裕子、小林直子、小屋玲子、竹内弘美、耕西由美子、松田智恵子、川崎由紀子、小田左真理
(平成8年度) 松田智恵子、小林直子、馬場正子、尾崎昌美、横田真佐子、北 康子、前田すみ子、中村真弓
- 7 本報告書の執筆・編集は野村祥子の協力を得て、中屋が行った。
- 8 本報告書の挿図等の扱いは下記のとおりである。
 - (1) 挿図中の方位は原則として磁北である。
 - (2) 挿図中の水平基準の数値は海拔高(m)である。
 - (3) 挿図中の縮尺については、原則としてスケールを付し、表題末にも明示した。
 - (4) 写真図版中の遺物番号は、挿図中の番号と同じである。
 - (5) 写真図版中の遺物の縮尺は、特に統一はしていない。
- 9 本調査の出土遺物・記録資料等は、一括して石川県立埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
1 金沢西部地区土地区画整理事業に伴う発掘調査	1
2 藤江C遺跡第1次調査	1
3 藤江C遺跡第2次調査	1
4 出土品整理事業	3
第2節 調査の経過	3
第2章 遺構	5
第1節 グリッドの設定	5
第2節 地形	5
第3節 遺構の配置	5
第4節 遺構	7
第3章 T区調査区	16
第4章 遺物	19
第1節 出出土器	19
第2節 河跡の土器	25
土器観察表	49
図版	63
報告書抄録	94

挿 図 目 次

第1図	金沢西部地区土地区画整理事業区域と遺跡 (S=1/7,500)	2
第2図	藤江C遺跡グリッドの設定 (S=1/2,500)	6
第3図	調査区全体図 (S=1/500)	9・10
第4図	1号(上)・2号(下)掘立柱建物跡 (S=1/60)	12
第5図	遺構平面図・断面図(1) (S=1/60)	13
第6図	遺構平面図・断面図(2) (S=1/60)	14
第7図	河跡断面図 (S=1/60)	15
第8図	T区調査区平面図 (S=1/200)	17
第9図	T区調査区遺構平面図・断面図 (S=1/60)	18
第10図	個別の土器観察表	19
第11図	土器の容量算出	20
第12図	河跡西部土器取り上げ地区図 (S=1/200)	21
第13図	河跡土器出土状況図1 (P-7~13) (S=1/30)	22
第14図	河跡土器出土状況図2 (P-14~25・41・42) (S=1/30)	23
第15図	河跡土器出土状況図3 (P-26・27・33~40・51~54) (S=1/30)	24
第16図	河跡土器出土状況図4 (P-32・55・56) (S=1/30)	25
第17図	河跡土器出土状況図5 (P-30・31・43・44) (S=1/30)	26
第18図	河跡土器出土状況図6 (P-45~50) (S=1/30)	27
第19図	出土土器1(井戸) (S=1/3)	28
第20図	出土土器2(溝) (S=1/3)	29
第21図	出土土器3(河跡) (S=1/3)	30
第22図	出土土器4(河跡) (S=1/3)	31
第23図	出土土器5(河跡) (S=1/3)	32
第24図	出土土器6(河跡) (S=1/3)	33
第25図	出土土器7(河跡) (S=1/3)	34
第26図	出土土器8(河跡) (S=1/3)	35
第27図	出土土器9(河跡) (S=1/3)	36
第28図	出土土器10(河跡) (S=1/3)	37
第29図	出土土器11(河跡) (S=1/3)	38
第30図	出土土器12(河跡) (S=1/3)	39
第31図	出土土器13(河跡) (S=1/3)	40
第32図	出土土器14(河跡) (S=1/3)	41
第33図	出土土器15(河跡) (S=1/3)	42
第34図	出土土器16(河跡) (S=1/3)	43
第35図	出土土器17(河跡) (S=1/3)	44
第36図	出土土器18(河跡) (S=1/3)	45
第37図	出土土器19(河跡) (S=1/3)	46

第38図 出土土器20（包含層）（S=1/3）	47
第39図 出土土器21（T区調査区）（S=1/3）	48

図 版 目 次

- 図版1 藤江C遺跡第2次調査遠景（北から）・台風19号による被害
- 図版2 藤江C遺跡航空写真「上層」
- 図版3 藤江C遺跡航空写真「下層」
- 図版4 藤江C遺跡航空写真北西部
- 図版5 藤江C遺跡航空写真北部
- 図版6 藤江C遺跡航空写真西部
- 図版7 藤江C遺跡航空写真中央部
- 図版8 藤江C遺跡航空写真東部
- 図版9 藤江C遺跡航空写真南部
- 図版10 1号井戸断面・1号井戸完掘状況
- 図版11 1号井戸布留式甕出土状況・1号井戸出土甕頸部の有機質
- 図版12 3号井戸・3号井戸土器出土状況
- 図版13 古墳周溝検出状況（北から）・古墳状遺構検出状況（西から）
- 図版14 3号・4号溝検出状況（東から）・14号溝（北から）
- 図版15 14号・3号・4号溝完掘状況（南から）・14号溝分岐点付近検出状況（南から）
- 図版16 2号井戸・16号・18号溝検出状況（西から）・河跡検出状況（東から）
- 図版17 河跡作業風景（南東から）・河跡第1層の掘り下げ（F-31区付近）
- 図版18 河跡サブトレーンチ・河跡土器出土状況（P-49・50）
- 図版19 河跡土器出土状況（P-33~40）・河跡土器出土状況（P-42）
- 河跡土器出土状況（P-26・27・51・52ほか）
- 図版20 河跡土器出土状況（F-32区付近）・河跡出土木製柄
- 図版21 T区調査区調査前（北東から）・T区調査区完掘状況（東から）
- 図版22 T区調査区完掘状況（西から）・T-8区付近完掘状況（北東から）
- 図版23 掘立柱建物跡（T-8区）（北から）・34号・35号・36号溝完掘状況（北から）
- 図版24 出土土器1
- 図版25 出土土器2
- 図版26 出土土器3
- 図版27 出土土器4
- 図版28 出土土器5
- 図版29 出土土器6
- 図版30 出土土器7
- 図版31 出土土器8

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

1 金沢西部地区土地区画整理事業に伴う発掘調査

今回の藤江C遺跡発掘調査は、昭和61年度に認可された金沢西部地区土地区画整理事業に係るものである。同事業は県土木部都市計画課所管のもと、金沢西部開発事務所（元金沢西部開発室）が事業を担当している。

そもそも金沢西部地区土地区画整理事業に係る埋蔵文化財の取り扱いの協議は、昭和61年3月の「昭和61年度事業に係る埋蔵文化財の取り扱い協議会」（於石川県立埋蔵文化財センター）に始まる。同協議会において埋蔵文化財センターは、事業認可を受けた本事業の概要説明を受けた。この協議会の結果を受け、昭和61年8月1日付け金高架発第162号にて金沢西部開発室より事業区域100.9haについて分布調査の依頼があった。埋蔵文化財センターでは、同年10月から11月にかけて分布調査を実施、周知の埋蔵文化財包蔵地の戸水B遺跡・藤江B遺跡・藤江C遺跡・南新保A遺跡の大まかな範囲を確認したほか、3ヶ所の再分布調査必要箇所の特定をし、昭和61年12月4日付け埋文収第242号にて同分布調査の結果を回答している。その後発掘調査対象区域・調査体制・換地後の取り扱いなどについて協議を重ねたが、調査は街路等の公共用地に限定するとの金沢西部開発室側の方針に沿い、発掘調査を進めることとなった。これにより、金沢西部地区土地区画整理事業に係る発掘調査が、平成元年度の戸水B遺跡から始まった。

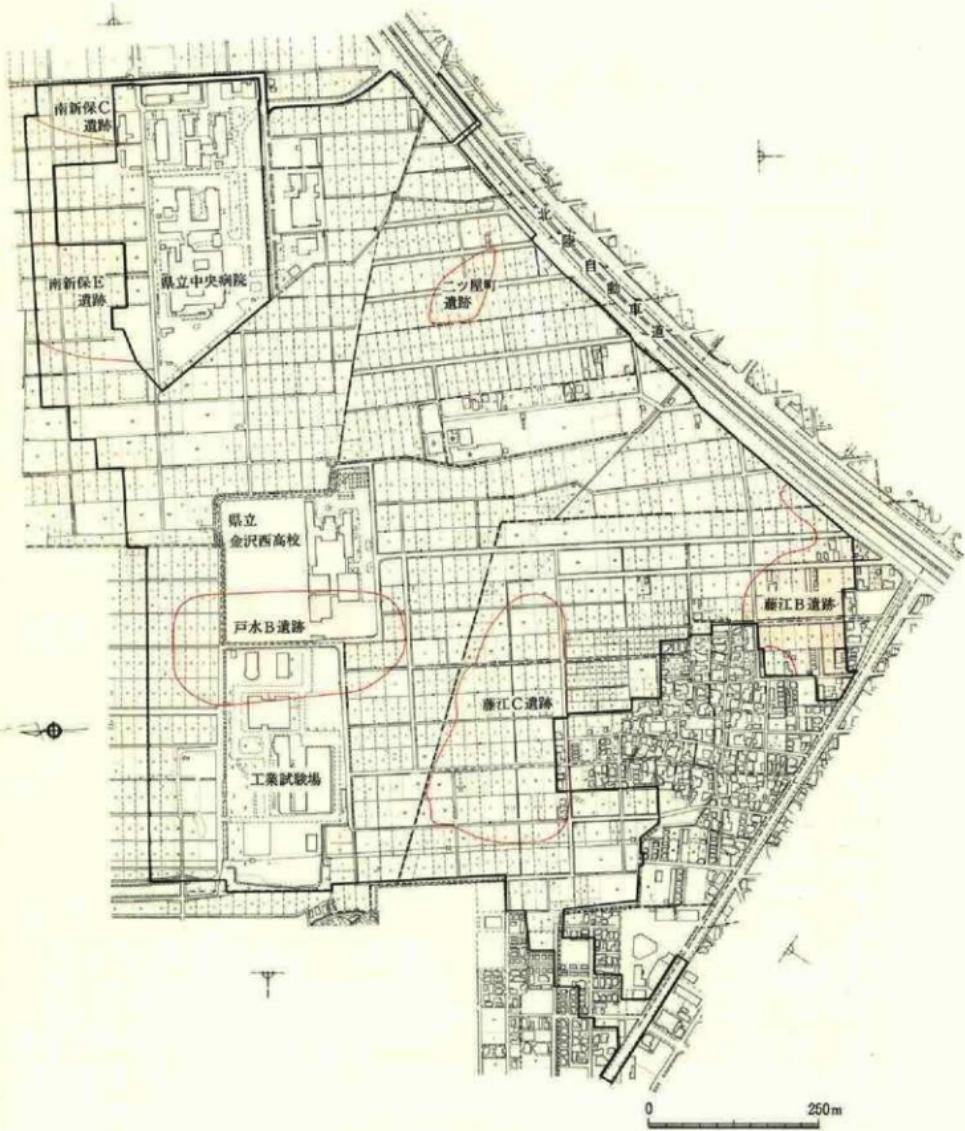
2 藤江C遺跡第1次調査

発掘調査の対象区域を当面は公共用地のみとする方針に沿い、金沢西部開発室は藤江C遺跡地内の街路建設予定地約5,000m²について、平成2年5月2日付け金高架発第82号にて文化庁長官あてに埋蔵文化財発掘の通知を、同日付け金高架発第81号で埋蔵文化財センターに発掘調査の依頼をそれぞれ行った。これを受けて埋蔵文化財センターでは、平成2年5月10日付け埋文収第79号にて文化庁長官あて埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、5月15日から11月30日にかけて現地での調査を実施した。同調査は遺跡の西への広がりを確認するために800m²を拡張したため、最終的に調査の対象となった面積は5,800m²となった。

この調査の結果、藤江C遺跡は弥生時代中期から中世にかけての複合遺跡であることが明らかになった。特に古代の遺構群は、目隠し塀が付随した廂付掘立柱建物跡や大型総柱建物跡などが検出され、公的機関の存在をうかがわせるものであった。なお、同年は本遺跡発掘調査の前に、同事業にともなう戸水B遺跡発掘調査（第8次）を実施している。

3 藤江C遺跡第2次調査

第2次調査は第1次調査調査区の東側の街路予定地（交差点部分）約4,400m²について、金沢西部開発事務所（金沢西部開発室より改組）から平成3年5月17日付け金高架発第91号にて文化庁長官あて埋蔵文化財発掘の通知がなされた。また、同日付け金高架発第90号で、埋蔵文化財センターあて発掘調査の依頼がなされた。これを受け、埋蔵文化財センターは、平成3年5月18日付け埋文収第89号にて文化庁長官あて埋蔵文化財発掘調査の通知をおこない、5月21日から12月12日にかけて現地調査を実施した。なお、同年は4月11日から5月29日にかけて実施された、同事業にともなう戸水B遺跡発掘調査（第9次）と一部並行して調査を実施している。



第1図 金沢西部地区土地区画整理事業区域と遺跡 (S = 1/7,500)

4 出土品等整理事業

第1次調査終了時及び第2次調査終了時に、埋蔵文化財センターは金沢西部開発事務所に対し、それぞれの調査で出土した遺物等についての出土品整理事業に関する協議を行った（平成3年1月4日付け埋文収第79号、平成4年1月14日付け埋文収第89号）。基本的に遺物整理作業は、(社)石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施する計画であったが、諸般の事情により委託事業が開始されたのはそれから数年の後であった。平成8年度に委託事業はようやく完了し、報告書の刊行にいたった。しかし、第1次調査の遺物量・遺構密度は、ともに第2次調査を上回っており、それらの整理にはさらに時間を要することとなった。このため、第2次調査の報告書を先行して刊行することになった。

その後金沢西部地区土地区画整理事業に伴う発掘調査は、街路等の公共用地に限らず、使用権を停止している民地にまでその対象区域を含めるという方針に変更された。これにより本遺跡の発掘調査は、平成8年度の段階で第4次調査にまで及んでおり、その総発掘面積は22,050m²に達している。

第2節 調査の経過

第2次調査の現地発掘調査の期間は、平成3年5月21日から12月12日までの実働129日に及んだ。調査担当者は中屋克彦、平田天秋、柿田祐司がこれを補佐し、大藤雅男・福田弘光・田畠弘・中村繁和（埋蔵文化財センター調査補助員）の協力を得ている。この他、埋蔵文化財センターの市町村埋蔵文化財専門職員長期研修の実地研修で、志雄町教育委員会の竹中義博と津幡町教育委員会の田中健一が参加した。

本調査は、同じく金沢西部地区土地区画整理事業に係る戸水B遺跡発掘調査（第9次調査）に引き続いて実施された。分布調査及び第1次調査により、遺構面は現田面から非常に浅い位置にあることが判明していた。調査区の一部が梨畑であったため、この抜根にも細心の注意を払い、埋蔵文化財センター職員が立ち会って実施している。また、調査区が3ヶ所に分かれていたため、後半はあっちへ行ったりこっちへきたりと、かなり手戻りがあったように思う。調査期間中には、日本各地に大きな被害をもたらした台風19号が来襲し、この調査でも事務所の倒壊といった被害を受けた。

第1次調査の出土遺物量は比較的多く、削平を受けた割には遺構密度も高かったことから、第2次調査においてもそれに近い状態であることを予想して調査に着手した。遺跡は遺構面が東へ行くにつれ次第に下がり、遺構もほとんど見られなくなる。第1次調査で検出された河跡は、蛇行しながら今回の調査区にも続いており、南東方向で調査区外へ続いている。この河の調査の結果、西側では多くの遺物を出土したが、東ではその量は大きく減少した。今回の調査で藤江C遺跡の中心は、第1次調査の調査区中央付近の北側あたりであることがほぼ確実となった。

こうした成果を上げた発掘調査の経過を振り返っておきたい。

5月	22・23日	重機による梨の木抜根	(I・J-33・34区、K-29~34区)
27~6月6日	重機による表土除去	17~24日 遺構検出・遺構掘り下げ	
29・30日	マイアミ大学地質音響研究所中島研究室による地中レーダー探査デモンストレーション	(E・F・G-36~39区)	
6月	7~17日	遺構検出・遺構掘り下げ	26~7月15日 遺構検出・遺構掘り下げ (A-31~34区、B・C-33・34区、D-32~34区) 7月17~8月9日 河跡検出・掘り下げ

8月	8日 初任者研修体験発掘（新任教員）	21日 重機による調査区の拡張
10~18日	(盛休み)	《農道部分、14号溝》
19~21日	14・15号溝検出・掘り下げ、河跡上面 包含層掘り下げ	遺構検出(E・F・G-37~40)
22~30日	河跡上面包含層掘り下げ、遺物出土状 況実測	22~25日 拡張区の掘り下げ(14号溝、河跡)
9月	2日 遺構検出・遺構掘り下げ (F-29~31、G-32区)	28日 重機によりT区調査区表土除去
	3日 河跡土器出土状況写真、土器取り上げ	29~11月8日 河跡掘り下げ、遺物出土状況実測
4~12日	河跡第1層掘り下げ、遺物出土状況実測	T区調査区遺構検出
12~17日	写真測量に向け清掃作業	12日 写真測量に向け清掃作業
18日	第1回目の写真測量	13日 第2回目の写真測量、完掘写真
19~24日	遺構掘り下げ (1・2号井戸、15・16号構)	15日 T区調査区遺構検出
25~27日	河跡第2層掘り下げ	重機により現道部分(E・F-13-14区) 表土除去
27日夜	台風19号来襲し現場事務所倒壊	18~19日 T調査区遺構検出
28・30日	台風被害の復旧作業	E・F-13・14区遺構検出
	(事務所は10月4日に再建)	21~27日 T区調査区遺構掘り下げ
10月	2~15日 河跡第2層掘り下げ	E・F-13・14区遺構掘り下げ、平面 実測、完掘写真
	16日 河跡第3層掘り下げ	28~12月2日 T区調査区平面実測、完掘写真
		3~6日 補足調査
		9~12日 重機による調査区埋め戻し

現地調査参加作業員

浅岡哲彦、加藤直枝、上村外志雄、川口未男、川口栄子、川村春枝、北川裕彦、北村清二、木村和雄、
藏 勝子、小島清高、斎木一幸、坂井和子、坂井澄江、坂田進午、坂本憲弘、佐野そと子、仕道義松、
新野芳夫、新保清作、千田清一、田内郁枝、高崎春子、高柳美代子、竹山くに子、寺田倫子、戸水利夫、
永井静子、西川重治、西川 緑、西村みどり、西本与三作、丹羽住子、橋場盛嗣、比良恵之助、
広瀬教士、広瀬信子、福田節子、藤沢勇一、藤元 哲、堀越三郎、本田和子、孫田喜作、孫田文子、
増田幸哉、松田正三、松水 健、道岸史子、南野佐市、宮上正吉、宮島豊和、村上勝次、村田保子、
諸江洋一、最里健太郎、山口政男、山辺 繁、山辺 芳、横山洋子、吉田麗子、渡辺栄吉、渡辺惠美

屋内整理作業参加作業員

多田由子、中島恵理子、野村祥子、村田保子、山本有子、吉田麗子



出土品整理作業

第2章 遺構

第1節 グリッドの設定(第2図)

藤江C遺跡は、東西約400m、南北約200mに及ぶ比較的大きな遺跡である。本遺跡では、第1次調査に先立ち、ほぼ遺跡全域をカバーするような任意の10mグリッドの設定を行った。基準にしたのは区画整理事業で建設される街路で、第1次調査及び本発掘調査の調査区である3・4・52松村中央病院線である。この松村中央病院線の第1次調査調査区の直線部分で、街路のセンターと平行な東西ラインを東西軸(アルファベットで表示)とし、それに直交する南北ラインを南北軸(数字で表示)とした。遺跡の南端がグリッドの南端に収まるようにすると、街路センターがちょうどFラインとなる。東西は遺跡西端の水路を1として、東へ数字が増えるようにした。各グリッドの名称は南北の杭によって表し、例えばE-14区というように。東西ラインを先に、南北ラインを後に表示している。結果的に第1次・第2次とも空中写真測量を実施しているため、このグリッドは主に遺物の取り上げ用に使われることとなった。

第2節 地形

調査前の遺跡周辺は、若干の起伏はあるもののほぼ平坦な土地に農地が広がっていた。明治期に当地で行われた耕地整理事業は全国に先駆けて実施されたもので、大阪からトロッコを借り受け、かなり大規模な土地の改変がなされたようである。本遺跡も河跡など元の地形があん部となっていた部分以外では包含層も削り取られ、耕土直下で確認される遺構検出面は、その削平が遺構面にまで及んだことを物語っている。特に調査区西側の遺構はおしなべて浅いものであった。検出された遺構面の高さは、おおむね海拔4.3m前後である。これが調査区北側のK-29~32区付近では4.2mとなり、東側の8号溝以東では4.1mに下がる。周辺の試掘調査の結果を見ても、周囲の現在の地山面の高さにはそれほど大きな差なく、耕地整理の土地改変がかなり広範囲に及んだことが推察される。

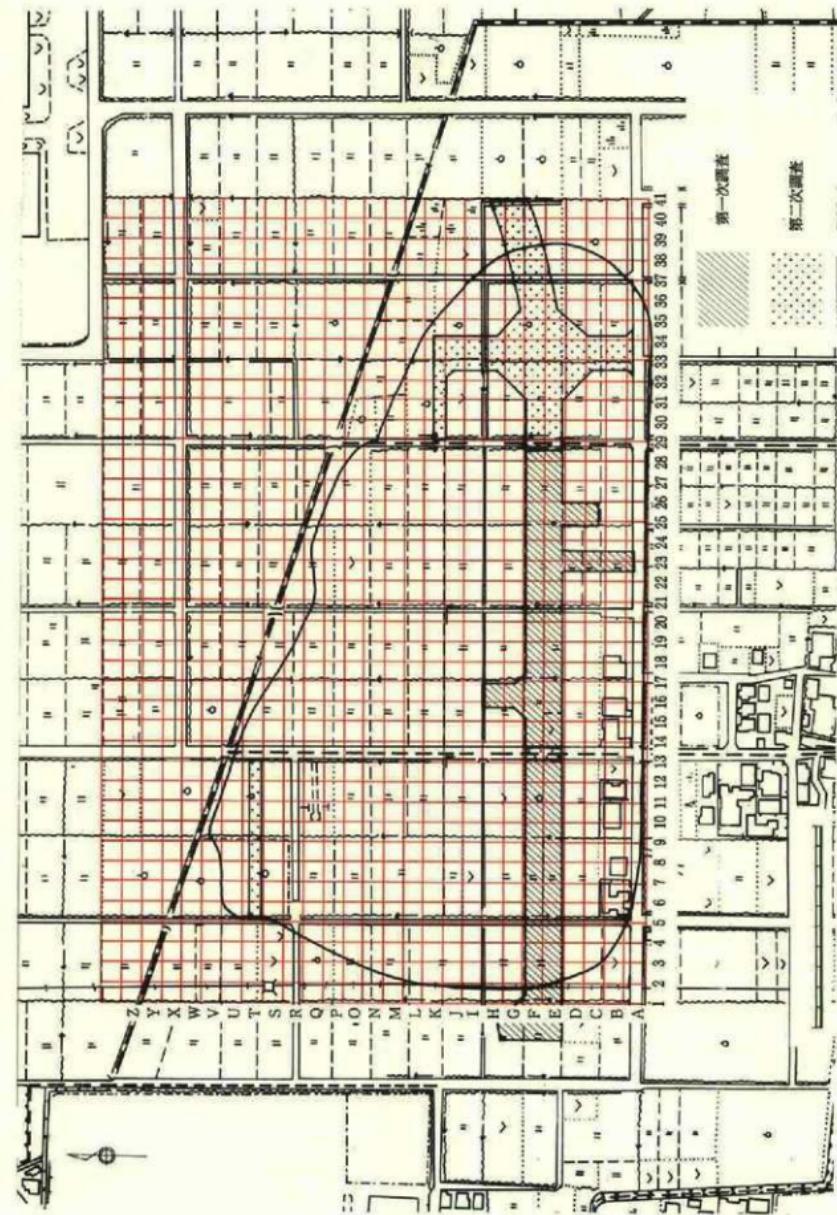
耕地整理以前の古図を見ると、現在ではまっすぐに改修された遺跡の西を流れる大徳川は、川幅も狭く蛇行しており、そこに流れ込む小河川も多く見られる。また同じように遺跡の北を流れる現在の大野庄用水も、遺跡の端に沿うように蛇行している。これら以外の場所にも小さな川か堀に見られ、遺跡がこうした小河川に挟まれた微高地に立地していることがよくわかる。

第3節 遺構の配置(第3図)

今回の調査区は街路交差点部分にあたり、約45m四方の交差点部分から東西南北に街路が伸びている形をしている。前述のように調査区は西から東、南から北(現大野庄用水方向)へと緩やかに傾斜していたものと見られる。主要な遺構は主に西側に集中しており、調査区を蛇行しながら東西に横切る河跡の出土遺物量も、西半部が圧倒的である。概して遺構密度は低く、中央を東西に横切る河跡が遺構のメインである。

便宜的に調査区を中央から見て、東西南北にのびる街路の部分をそれぞれ東部・西部・南部・北部とし、中央付近を中央部として概説し、個別遺構の詳細は次項に譲ることにする。

調査区中央部に南から現われた河跡は、調査区のまさに中央で西に向を変え、第1次調査の調査区へと続いている。この河跡の東側に、墳丘が削平を受けた古墳の周溝が確認されている。この古墳と河跡の間を北流しているV字溝(14号溝)は、蛇行しながらH-35杭付近で二股に分かれれる。分か



第2図 藤江C諺語グリッドの設定 (S = 1/2,500)

れた溝の西側が3号溝、東側が4号溝である。2本の溝はほぼ平行して北西方向へ流れ、K-33杭を挟んで調査区外へと続いている。河跡より南部の地区には、近世もしくは近代の溝跡が検出されているほか、調査区最南では古墳の周溝状の溝が検出されている。河跡の北岸には、F-33区にある井戸状遺構を含め4基の井戸が並ぶ。調査区北部のK-29~32区では、南北方向の深さ10cm前後の歓溝状遺構が検出されている。出土する土器は少ない上、図化不可能な摩滅した細片しかなく、時期の確定は困難である。

第4節 遺構

前項で概説した遺構を、時期・出土土器などを関連させながら、ほぼ遺物の掲載順に沿って説明を加える。

建物跡は2棟検出されている。いずれもほぼ東西を主軸とする掘立柱建物跡で、1棟は調査区北部のK-30区付近に(1号建物)、もう1棟も北部のJ-34杭付近である(2号建物)。

幅6mの調査区で検出された1号建物は、柱間1×3間のように見えるが、柱筋が通らない、柱穴の大きさに違いがあるなどの問題があり、建物であるかどうかかもあやふやである。建物と考えた場合の規模は、梁架4.7m、桁行き5.8mとなる。歓溝状遺構と切り合い関係にあり、歓溝状遺構が先行している。

2号建物は柱間1×2間の建物に見えるが、これも柱の間隔が合わないなどの問題がある。建物と見れば梁架4.2m、桁行き4.6~5.3mということになる。4号溝と切り合い関係にあり、4号溝が先行している。

井戸は河跡の北岸に4基確認されている。東から井戸状遺構、1号井戸、2号井戸、3号井戸である。1号井戸は東西約1.7m、南北約1.5mの楕円形で、深さは約1.1mを測る。16号溝と切り合い関係にあり、1号井戸が先行する。最下層の堆積土層上面に、完形の布留式甕が横たわって出土した。頸部には植物質のものが巻き付いており、水を汲みに来た際に落としたものであろうか。土層中位付近からも布留式甕が出土しており、1号井戸の時期はほぼこの時期に確定できよう。

2号井戸は直径約1m、深さ約1.1mである。上面で南にのびる溝が約1m接続している。16号溝と18号溝と切り合い関係にあり、16号溝より先行するが18号溝より後の掘削である。遺物は2点の須恵器の壺を図示できた。

3号井戸は調査区西端に位置し、直径約1.8m、深さ約1mを測る。2号井戸と同じく18号溝と切り合い関係にあり、18号溝より先行している。遺物は須恵器を含む3点を図示した。

井戸状遺構は直徑約2mの隅丸方形の遺構で、深さは約70cmを測る。他の井戸に比べ壁の立ち上がりが緩く、お椀状の掘り上がりとなつたため井戸と確定することをためらっているが、一応ここで扱うこととする。出土した遺物は2点を図示した。

土坑は9号土坑まで遺構番号をふった。このうち1号土坑としたものは、調査区最北部で確認されたが、その後近・現代の擾乱上に掘られた新しいものであることが判明し、欠番とした。いずれの土坑も図示できるような遺物の出土はなく、時期の限定はできない。

I-33区にある2号土坑は、直径約1m、深さ約10cmを測る。西側を現代の水路が切っており、完全な形ではない。

3号土坑はJ-33区にあり、後述する3号溝と4号溝の間に位置している。直径は約80cm、深さは約20cmである。

4号土坑はE-35区にあり、直径約90cm、深さ約50cmを測る。15号溝と切り合い関係にあり、15号

溝が先行している。

5号土坑はG-31区にあり、長径約1.2m、短径約90cmの楕円形を呈する深さ約20cmの土坑である。

6号土坑と7号土坑はF-32区の北東端に位置する土坑である。河跡の北岸に並んでおり、土層もよく似ている。切り合い関係はなく、同時存在の可能性がある。6号土坑は直径約1m、深さ約60cmを測る。7号土坑は直径約1m、深さ約45cmを測る。河跡の埋土を若干掘り下げた位置で検出されており、河跡がある程度埋まった段階のあん部状の地形になっている頃に、掘削されたものと見られる。

8号土坑はE-31区東部にあり、長径約3m、短径約1.6m、深さ約10cmの楕円形を呈する。土坑底からはさらに長径約2.5m、短径約1m、深さ約10cmの不整形な掘り込みがあり、2段掘りになっている。

9号土坑はE-37区にあり、古墳周溝の9号溝の東外側に位置している。直径は約1m、深さ約45cmを測る。

溝状遺構は18号溝まで遺構番号を付けた。この他に、調査区南部に近世の溝、そして河跡がある。

1号溝は調査区の北西端K-29区で検出されている。南東から北西へ抜ける溝で、畠溝状遺構より先行して掘削されている。幅は約70cmで、深さは約20cmである。

2号溝は1号溝のすぐ東に位置する溝で、幅約40cm、深さ約20cmである。1号溝よりやや北よりに延びている。1号溝と2号溝は切り合い関係にあり、1号溝が先行する。

3号溝と4号溝は14号溝が分岐して北流する溝である。14号溝はE-36杭あたりで調査区へ南から入ってくる。左右に蛇行しながら北へ延び、G-34区の東端で分岐して西から3号溝・4号溝となり、やや北東方向に向きを変えて調査区北へ抜けてゆく。ちょうど分岐している箇所は、現用水路によつて断ち切られ確認できなかつたが、それより少し南の位置で溝の両肩がいびつに掘り広げられていることから、実際にその痕跡は確認できなかつたが、ここに壠状の施設があった可能性が高い。14号溝・3号溝・4号溝ともに幅は約1.3m、深さは約60cmを測るV字溝である。遺構上面が削平されていることを考えると、かなりしっかりした溝である。出土遺物は7点を図示したが、おむね2時期の遺物が出土している。

5号溝はI-33区～J-33区にかけてみられる溝状遺構で、幅約40cm、深さ約20cmである。3号溝と切り合い関係にあり、3号溝が先行している。

6号溝は5号溝の西側のI-33区に南北に検出された溝で、幅約40cm、深さ約15cm、長さ約6mを測る。7号溝と切り合い関係にあり、7号溝が先行している。

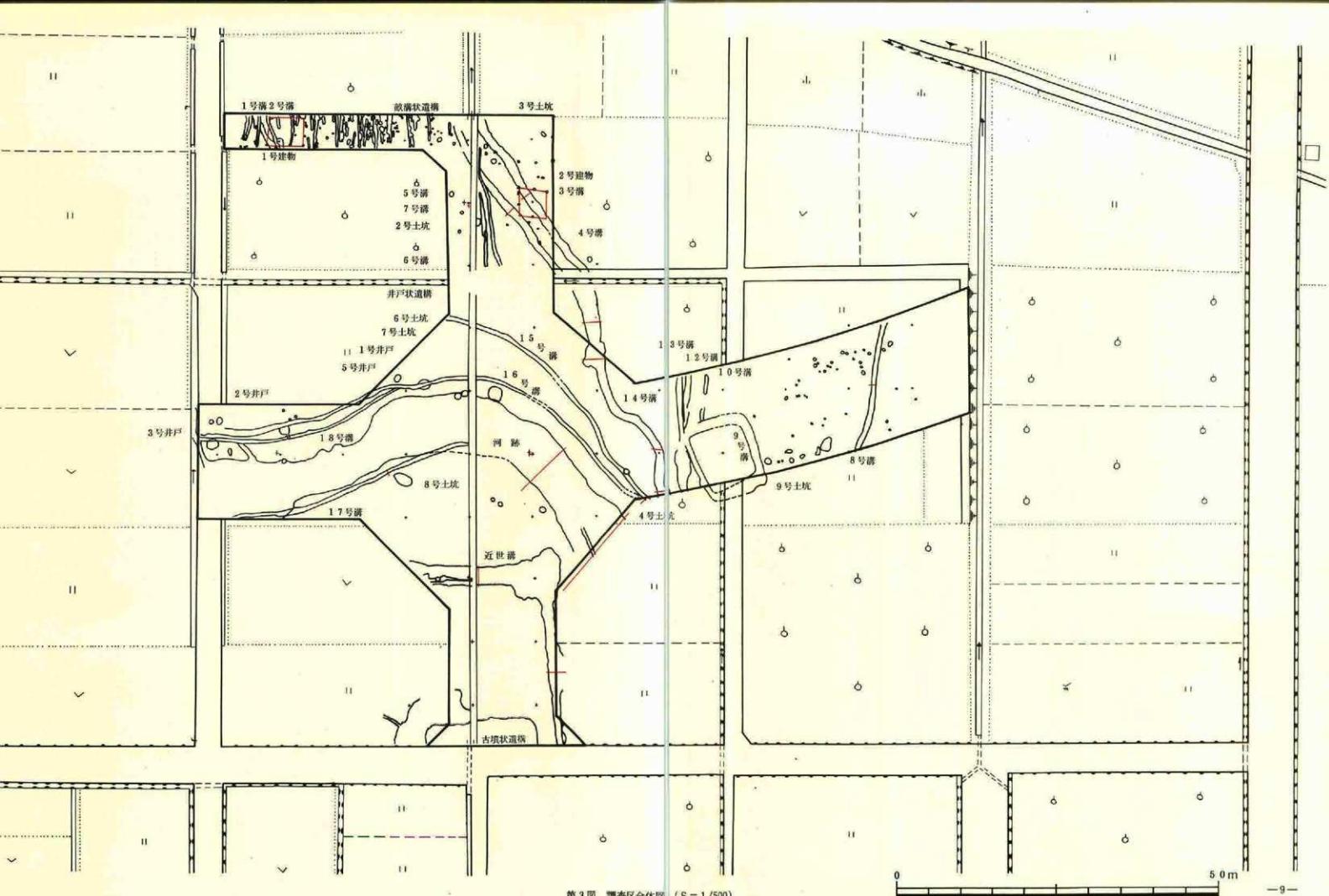
その7号溝は、同じくI-33区で6号溝を北に延長するような位置に検出されている。幅は約60cm、深さ約40cm、長さ約7mを測る。

8号溝は調査区東部を南北に横切る幅約80cm、深さ約20cmを測る溝である。この溝をもって藤江C遺跡の東端と考えたい。

9号溝は古墳の周溝である。古墳は墳丘が削平され、この周溝を残すのみとなっていた。周溝の幅は約1～1.5mで、現状での深さは約10～15cmであった。かろうじて出土遺物1点を図示したが、古墳に付くものかどうかは判らない。推定される古墳は方墳で、墳丘の平面規模は約9.6m×8.4mである。

この9号溝を切って10号溝と11号溝が調査区を南北に横切る。幅は10号溝が約40cm、11号溝が約50cmであるが、どちらの溝も非常に浅く深さは5cm前後であった。11号溝出土の須恵器の坏を図示した。この須恵器をもって溝の時期決定が可能ならば、古代の段階ですでに古墳の墳丘はほとんど削平されていたものと推定できる。

12号溝と13号溝は、9号溝の西側をかすめて調査区を南北に横切る溝である。両溝は切り合い関係



第3図 調査区全体図 (S = 1/500)

にあり、東側の12号溝が先行する。12号溝・13号溝ともに幅約1m、深さ約10cmを測る。

15号溝は14号溝の西側に検出されている。E-35区で北西に延びる溝は次第に西に向きを変え、H-32区で調査区外へ抜ける。幅は60~70cmで深さは約30cmである。16号溝と切り合い関係にあり、15号溝が先行している。

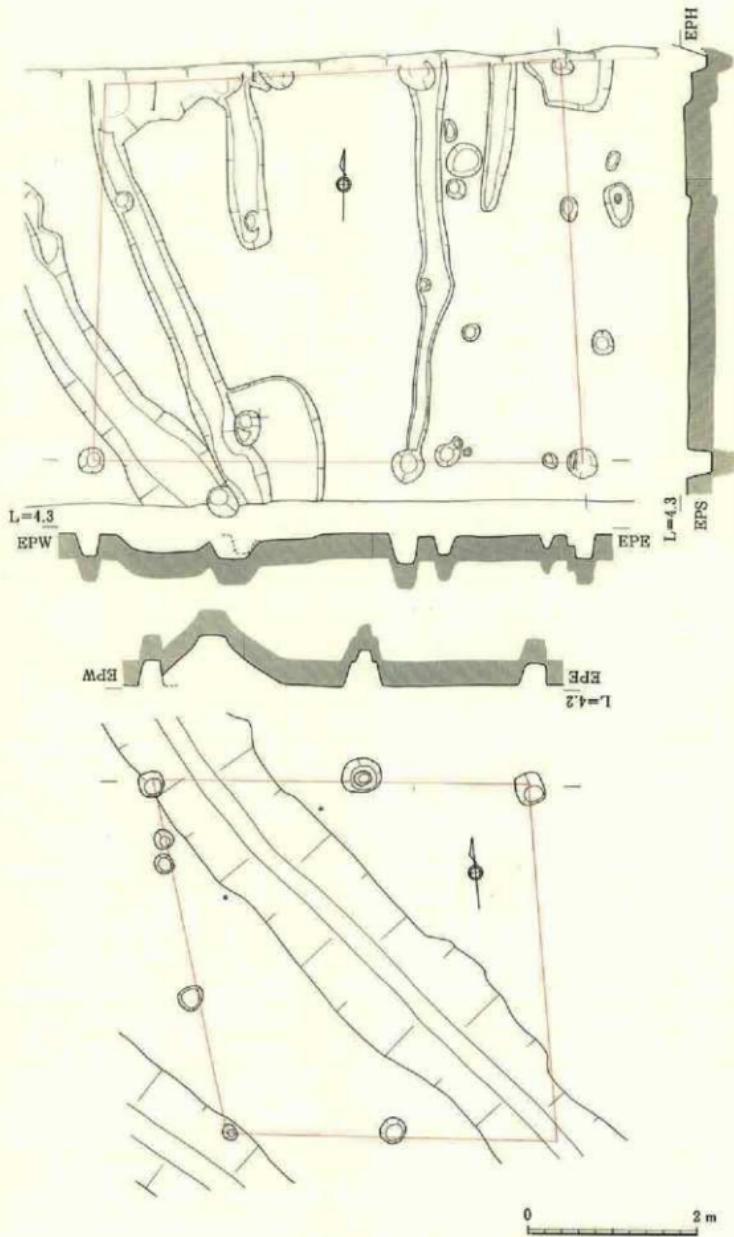
16号溝はE-35区で15号溝とはほぼ同じところから調査区に現れる。河跡の北岸に沿うように掘られており、幅約50cm、深さ約10cmを測る。18号溝と切り合い関係にあり、18号溝が先行している。

17号溝は16号溝の南側約10mに、ほぼ16号溝と平行して掘られている溝である。河跡の検出面から掘り込まれており、河跡がほとんど埋まつた段階以降の溝である。幅約50cm、深さ約10cmとほぼ16号溝と同じ規模であり、同一時期の遺構であることも考えられる。

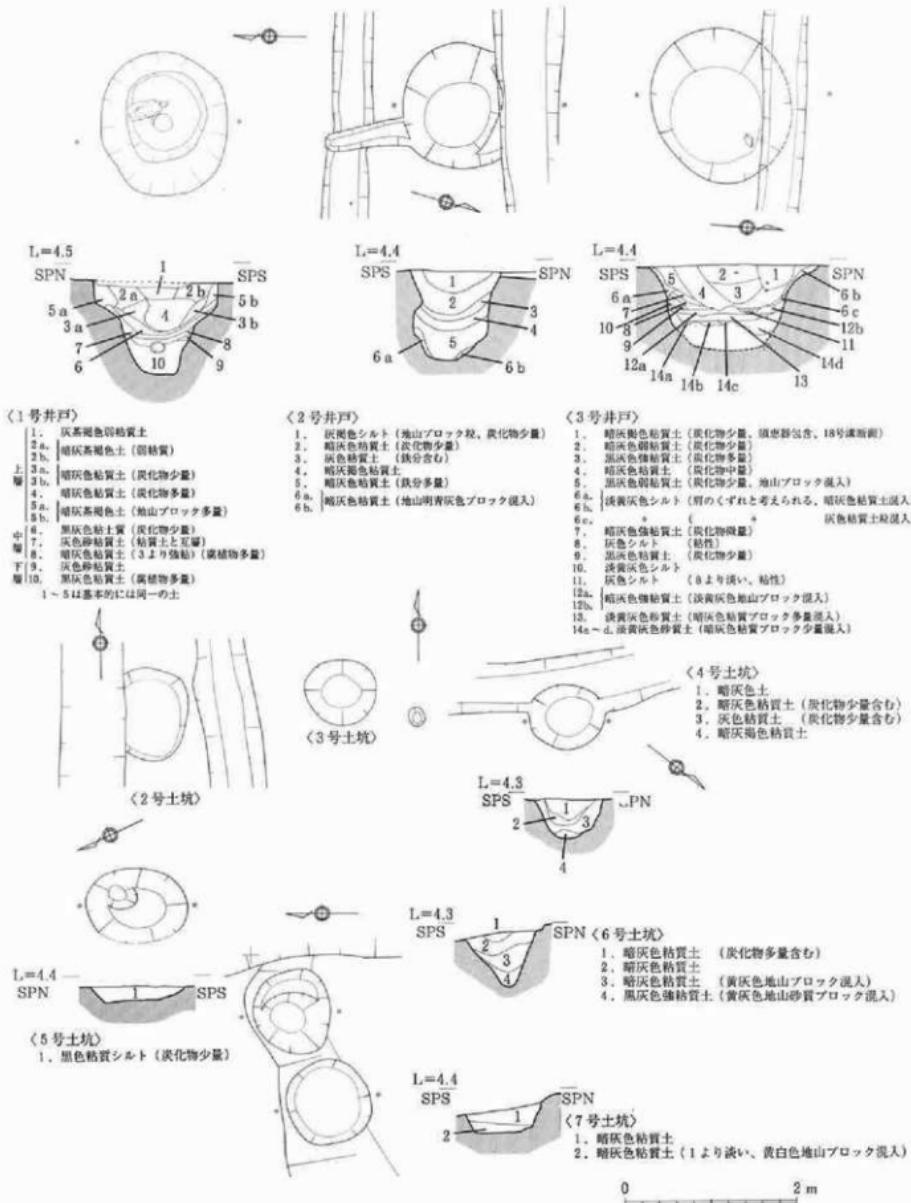
18号溝はF-28区から東へ延び、やや北へ方向を変えてG-32杭西で16号溝に切られて消えている。幅は30~50cmで、深さは5~10cmと浅い溝である。須恵器の坏を1点のみ図示できた。

近世溝はA-34区から北へ延び、D-34杭付近で西に向きを変えてDライン上を調査区外へ続いている。おそらく明治期の耕地整理によって廃棄したものであろう。D-34区付近が大きく搅乱されている以外は緩やかな立ち上がりの溝で、幅約1~2m、深さ約40cmを測る。

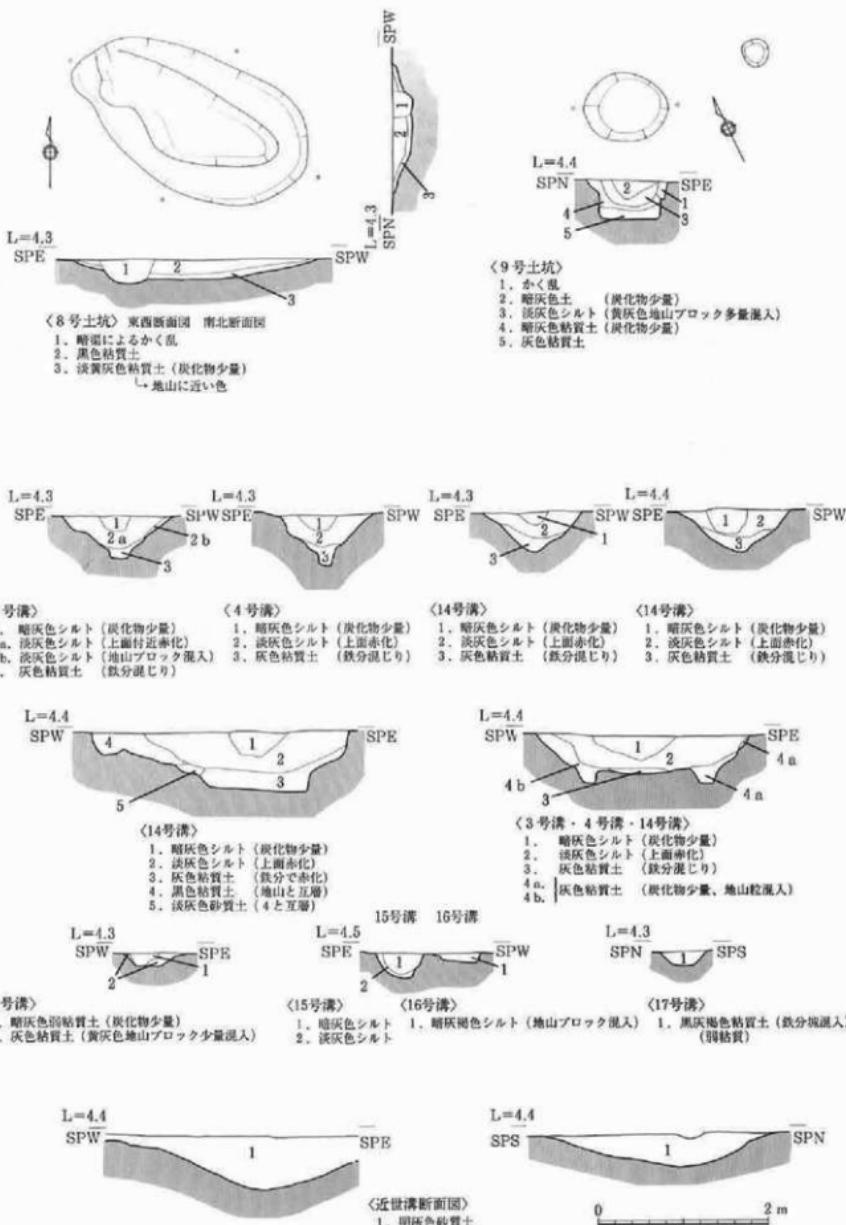
河跡は第1次調査の調査区につながるもので、幅は約7mを測る。基本的には灰色の粘質土と腐植土層が互層となっており、主に粘質土中から遺物の出土がある。あん部に堆積した包含層を取り除き、そこから20~30cmほど掘り下げたあたりで、遺物が多く出土する面を認める。特に調査区の西側で顕著である。出土する遺物は主に古墳時代前期に所属するもので、その出土状況はある程度の単位を認定しうるものであった。完形品がその場でつぶされたと見られるものや、一括廃棄されたと見られるものなどが多くあり、この水辺で何らかの祭祀行為が行われていた可能性を考えられる。遺物は河跡の北岸に沿って出土しており、この河の北側からの廃棄と考えられる。この時期の集落域が河の北側に展開していたことを物語るものであろう。この段階までの河跡の形を記録するために、これらの遺物の出土状況図を作成した上で、「上層」として空中写真測量を実施した。出土状況図の作成においてはできるだけ土器のセット関係がつかまえられるように、最終的に出土地区を56ヶ所に分けて実測した。これらの遺物は、河跡内の第1層出土土器として取り上げている。中にはこれより下層の土器や、上面の包含層の取り残しなどが混じっているが、出土土器からはおおむね古墳時代前期の堆積層と捉えられる。この下約20cmの層は腐植物の多く混じる層で、滞った水の底に溜まったような状況である。この腐植土層を取り除くと、砂質の土層になる。この砂質土層からの出土遺物を第2層出土遺物として取り上げた。遺物出土量は第1層とは比較にならないほど少なくなるが、第1層に見られるような古墳時代の土器は見られず、そのほとんどが弥生時代中期後半の土器で占められる。第2層が取り除かれた段階で、遺構検出面からはすでに80~90cm下がったことになる。さらにその底から幅約3mで再び腐植土層の堆積が見られる。腐植土層の厚さは20~30cmである。この層の中には堅果類の実や、流木などが見られる。(実はこの層から写真図版にある木製の柄が出土したが、台風19号による被害で紛失してしまった。) 河跡は基本的にこの層であるが、F-31区の河跡内で、それまで地山とを考えていた黄褐色土の中から土器の出土があった。遺構のプランはつかまえられず、層序もはっきりしない状態のまま遺物の出土を追って河の岸を掘り広げた。結果的には河跡の底から薄く砂が潜り込んでいる部分を確認し、その上の層からの土器出土であることが判ったが。やはり担当者の未熟さでプランをはっきりと捉えることができなかつた。未だに心残りである。その層からの出土遺物は第3層出土遺物として取り上げている。出土した遺物の多くは、弥生時代前期に所属するものと見られる。遺構の記録は、ここまで完掘状況で再度空中写真測量を「下層」として実施している。



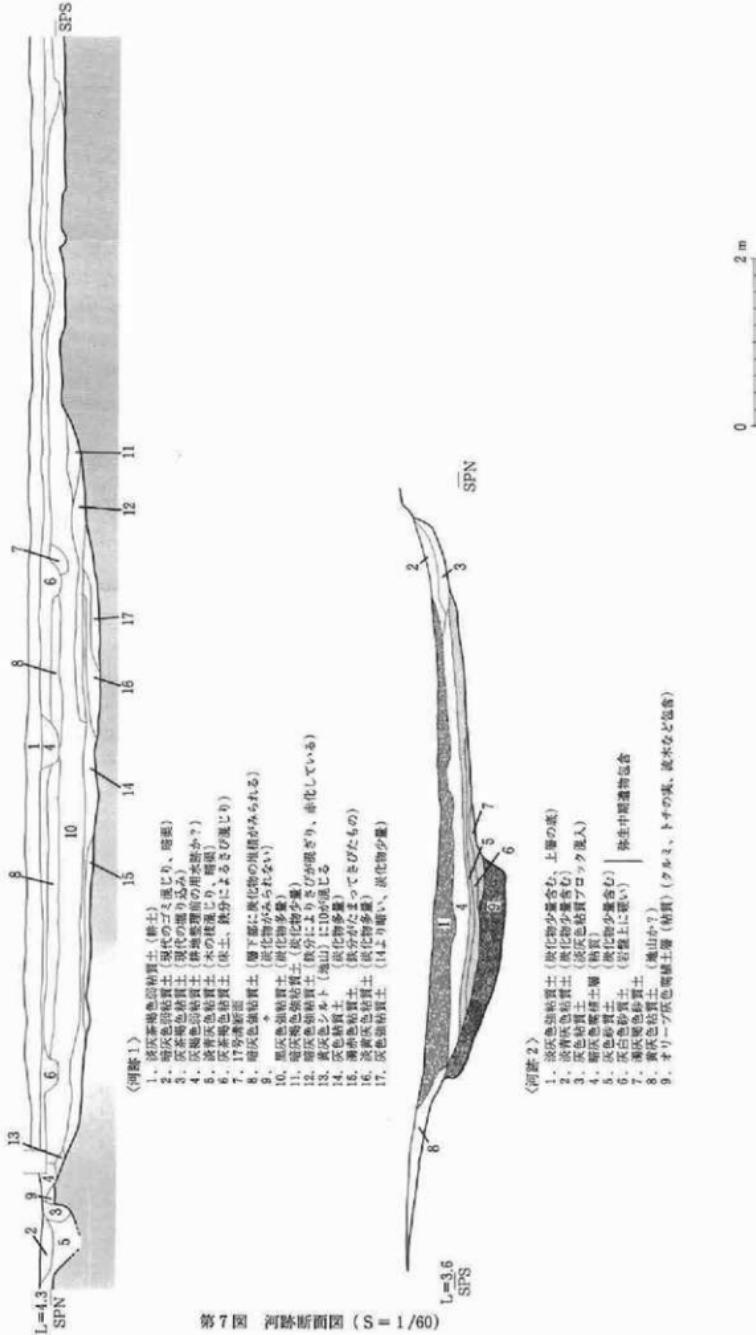
第4図 1号(上)・2号(下)掘立柱建物跡 ($S = 1/60$)



第5図 遺構平面図・断面図(1) (S = 1/60)



第6図 遺構平面図・断面図(2) (S = 1/60)



第7図 河跡断面図 ($S = 1/60$)

第3章 T区調査区

T区の調査区は街路交差点部分の調査区から北西方に約250mの位置になる。前述した藤江C遺跡のグリッド割りに従うと、T-5~13区の東西に細長い調査区である。この調査区でも遺構面は現耕土直下である。遺構面の高さは西端で海拔約3.5m、東の地形落ち際で約3.85mとなり緩やかに西から東への傾斜が見られる。検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、溝9条などで遺構密度は低い。出土する遺物も少なく、遺跡の縁辺部らしい状況がうかがえる。

掘立柱建物跡はT-8区で検出されている。梁間2間(3.8m)×桁行き3間(4.6m)の建物で、主軸をやや西に振っている。すぐ西にある37号溝とはほぼ平行に建っており、同時期の遺構である可能性が高い。

溝の遺構番号は、街路交差点部分の調査区との重複を防ぐために、30番台の数字を使い、西から順に数字を当てている。検出された溝は38号溝が南北方向である以外は、10~20°ほど西に振れて調査区を南北に横切っている。

30号溝はT-5区にあり、幅約40cm、深さ約10cmを測る。

31号溝もT-5区にあり、幅約40cm、深さ約15cmで、ほぼ30号溝と平行になっている。その間隔は約1.8mである。

32号溝はT-6区にあり、幅約80cm、深さ約40cmを測る。

33号溝はT-6~7区にかけて通り、幅80約cm、深さは北側で5cm南側で10cmを測る。調査区北側でやや向きを西に変える。

34号溝はT-7区にあり、幅約60cm、深さ約25cmを測る。調査区中央付近でやや北に向きを変え、調査区外へと続いている。おそらく調査区外で東隣の35号溝と切り合いを持つと見られるが、調査区内ではその先後関係は判らない。

35号溝もT-7区にあり、幅約80cm、深さ約25cmを測る。

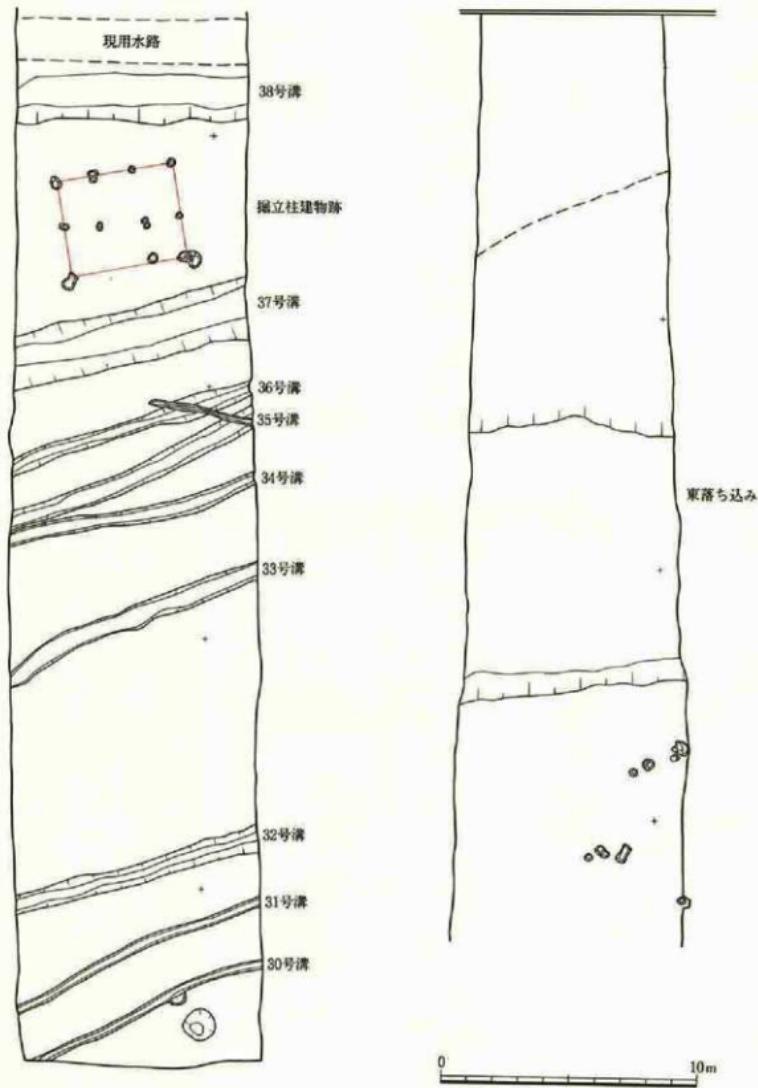
36号溝もT-7区にあり、幅約50~100cm、深さ約30cmを測る。

37号溝はT-8区にあり、幅約2.5m、深さ約60cmを測る。

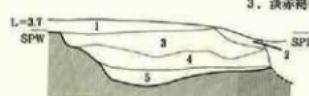
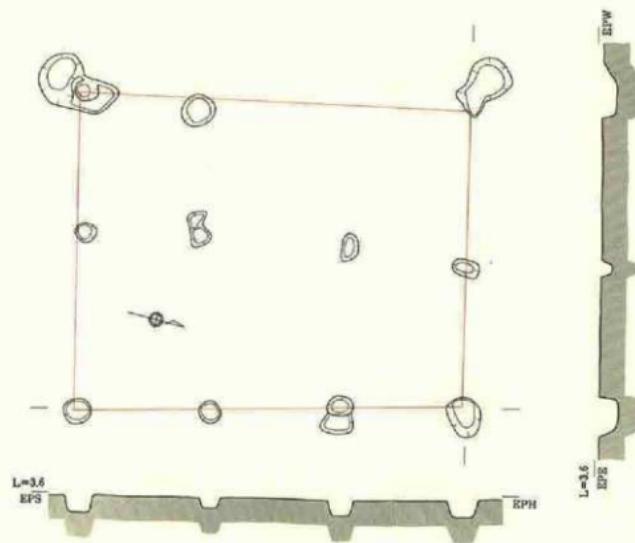
38号溝はT-9区にあり、東側の肩を農業用水に切られているが、推定される幅は約2.5m、深さは約60cmである。出土遺物を2点図示できた。

調査区東端は、現大野庄用水に向かって次第に地形が落ち込んでいく。T-10区にその落ち際にあるが、いったん約60cm下がった後は比較的平坦な面(東落ち込み)があり、T-12区の中央付近でさらに落ち込んでいく。この東落ち込みから出土した遺物2点を図示した。

T区調査区からの出土土器は少なく、図示できたものは7点にとどまった。しかもその中の一点は排土からの採集品である。200番の小型の壺は38号溝からの出土品で、底部に台が付いていた痕跡が残っており、東海系のS字口縁台付壺の影響がみられるものである。205は排土からの採集品であるが、北陸では類例の少ない鳥形把手付硯である。



第8図 T区調査区平面図 ($S = 1/200$)



第9図 T区調査区遺構平面図・断面図 ($S = 1/60$)

第4章 遺物

第1節 出土土器

本調査で出土した遺物は、整理箱（60×38×14cm）で約90箱に達する。この中から土器228点、石製品・金属製品79点について実測した。当然この全てについての報告をもって1冊の報告書とすべきところであるが、今回の報告では、主に時間的な制約から土器のみの報告とし、石製品・金属製品については、続いて刊行する予定の第1次調査の報告書の中で取り扱うこととする。

出土品整理事業は主に山形県埋蔵文化財保存協会に委託して実施したが、実測作業の際に土器の観察結果を、右図の「藤江C遺跡出土土器観察表」に記入してもらうようにした。用語・記入方法などについては、ある程度の統一を図り、記入された観察表とその実物を見比べて中屋がひとりおりチェックはしたが、若干表現などに個人差がでている。また、弥生土器から古代・中世の上器まで同一の観察項目であったことにも無理があったと見られ、今後の観察における課題としておきたい。以上のような問題点はあるものの、この土器観察表をまとめて一覧表にしたのが後掲の表である。版面の関係上いくつかの項目については省略することになったが、一応ほとんどの内容を盛り込むことができた。各観察項目の記載方法と、その意図したことは以下のとおりである。

【番号】 国版掲載順に通し番号をふってある。国版の掲載順は、おむね（溝以外の遺構）→（溝）→（河跡）→（包含層）→（T区調査区）となっており、遺構の所属時期を基準とした並べ替えは行っていない。また、それぞれの遺構内で

も、出土位置の特定できるものを先に掲載してある。個別の観察表右上の「掲載No」がこれにあたる。

【出土地】 出土遺構名を記入。遺構内でも取り上げ番号のあるものは、その番号を（P-）で表示してある。また【グリッド】はその出土位置の所属グリッドが記入されている。複数の遺構・グリッドから出土した破片が接合したものには、出土遺構・グリッド全てを記し、その土器が主体的にどの遺構に付いたものであったかを推定した上で掲載位置を決定した。

【器種】 今回は形式分類にまで考察が及んでいないため、単に器種のみを記入。

【法量】 基本的に、口径・胴部径・底径・器高などの計測値を記入。基本的にcm単位で表記している。一部に、図上復元で求めた値と、図化後の復元作業で復元されたものの測定値が併記しているものがある。また、小片のため、数値の信頼性が低いものについては（ ）を付けてある。

【調整】 内面と外面に分けて観察している。観察された調整の部位を書き切れず、あやふやになっ

藤江C 遺跡出土土器観察表		調査年度 _____年		発掘No. _____	
実測No.	グリッド	遺物名	基準		
口径	内面	内面			
腹径					
底径					
厚さ	外面	外面	色調	地	上
				底	腹

遺存状況		特記
文	形	口縁
研究用	標印	底面
1/2		
1/4		
小片	底	腹

第10図 個別の土器観察表

てしまったが、おおむね土器の上部の調整から先に記入してある。つまり「ヨコナデ、ハケ」とある場合、ヨコナデの方が土器上部の調整ということになる。また、甕・鉢などのヨコナデは、そのほとんどが口縁部の調整である。これとは別に、同一部位でハケ調整の後にナデ調整がされている場合は、「ハケのちナデ」と表現している。

【すすとこげ】 基本的に「すす」は外面、「こげ」は内面の観察であり、それぞれ付着している部位を記入してある。

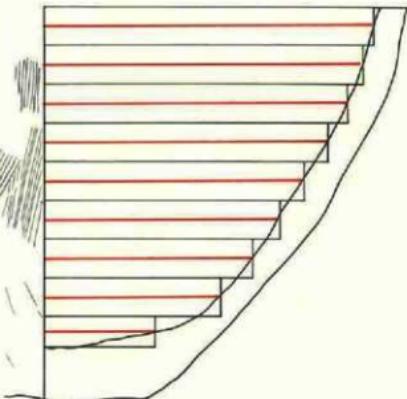
【色調】 土器本来の色の観察を行った。今回はできなかったが、将来的にこの色調や、胎土に含まれる混和材の種類・比率などで、本遺跡で作られたものと他地域からの持ち込みとが区別できるようになるかもしれない。

【遺存度】 基本的にその土器全体の遺存度を記している。遺存度の後に記入してある「口縁・底面」は、その破片がどの部位を含んだ破片であるかを記したものである。当然実測図を見ればどの部位の破片かがわかるのであるが、その破片が土器全体に占める割合がわかることによって、どの程度の大きさの破片であるかを推定できるようにした。これは例えば、図上復元可能な程度の口縁部分と底部部分さえ含んでいれば、それが土器全体から見ればほんの小破片であっても、完形土器とほぼ同じ実測図ができあがってしまうことに対する疑問から考え出した苦肉の策である。結果的にあまり良い表現とならなかつたようだ。

【容量】 実測図ではば完形に復元された甕もしくは壺について容量を算出した。実際の使用状況を考え、内面の頸部以下で算出している。算出方法は、土器内部を高さ1cmの円柱を重ねたものと考え、その総和を求める方式を探った。円柱の直径は高さの中間である5mmの位置とした。誤差を生じることは間違いないが、計測する土器がそこまで厳密な数値を当てはめられるほどの精度では製作されていないことを考えれば、それほど大きな問題ではなかろう。

【備考】 上記項目で書き込めない内容を少しでも拾い出して記入しようとした項目である。このため、内容は多岐にわたり、装飾・土器の所属時期・型式・系譜などが記されている。

【実測No】 整理作業途上で、付いていた番号。収蔵庫で保管されている土器には、この番号が記されている。



第11図 土器の容量算出

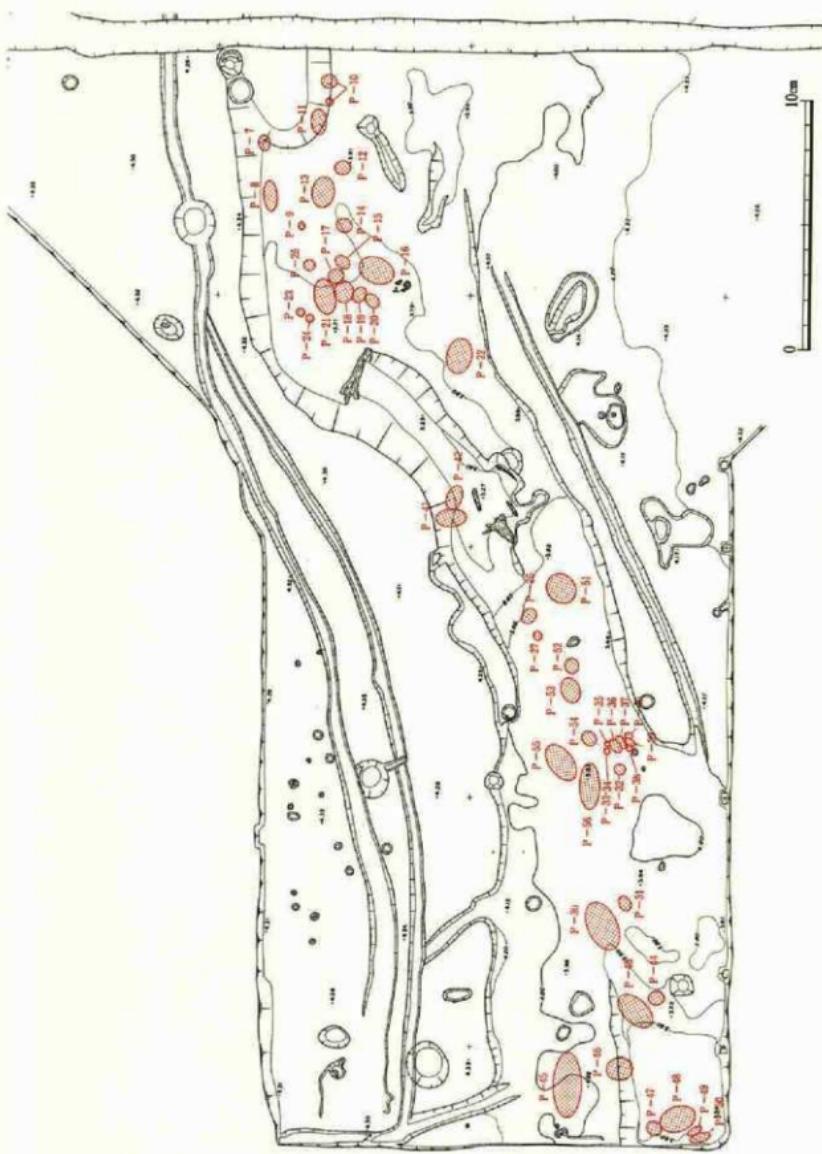
参考文献

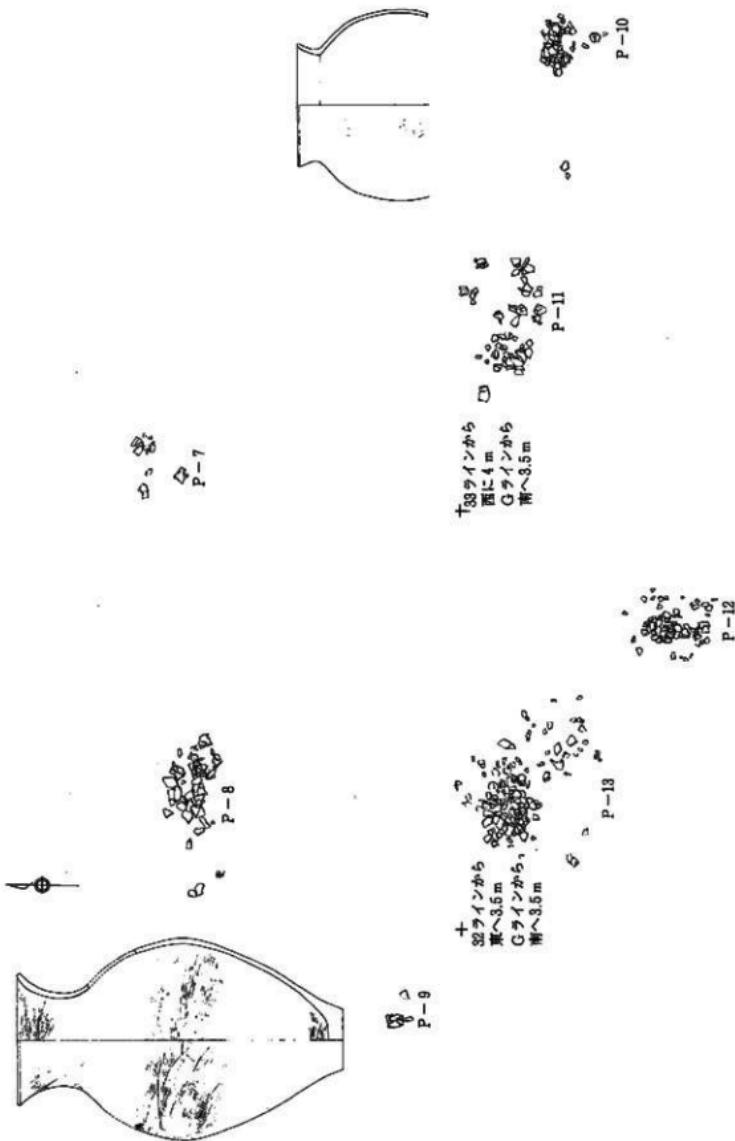
北野博司 「第5節 弥生・古墳時代の土器」(『宿東山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1987)

藤井明夫 「第5章 考察」(『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』金沢市教育委員会 1989)

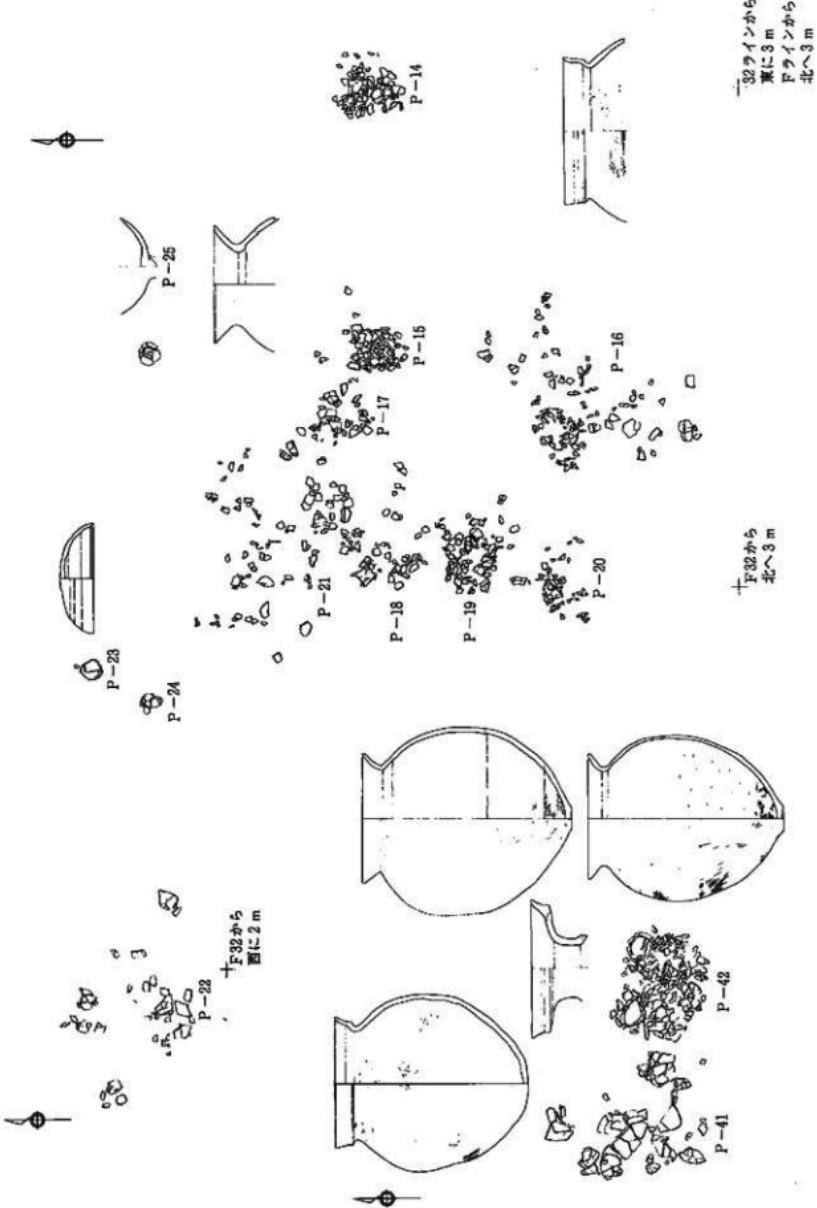
この他、北陸学院短期大学の小林正史助教授に、容量の計算などについて多くの御教示を受けた。

第12図 河跡西部土器取り上げ地区図 ($S = 1/200$)

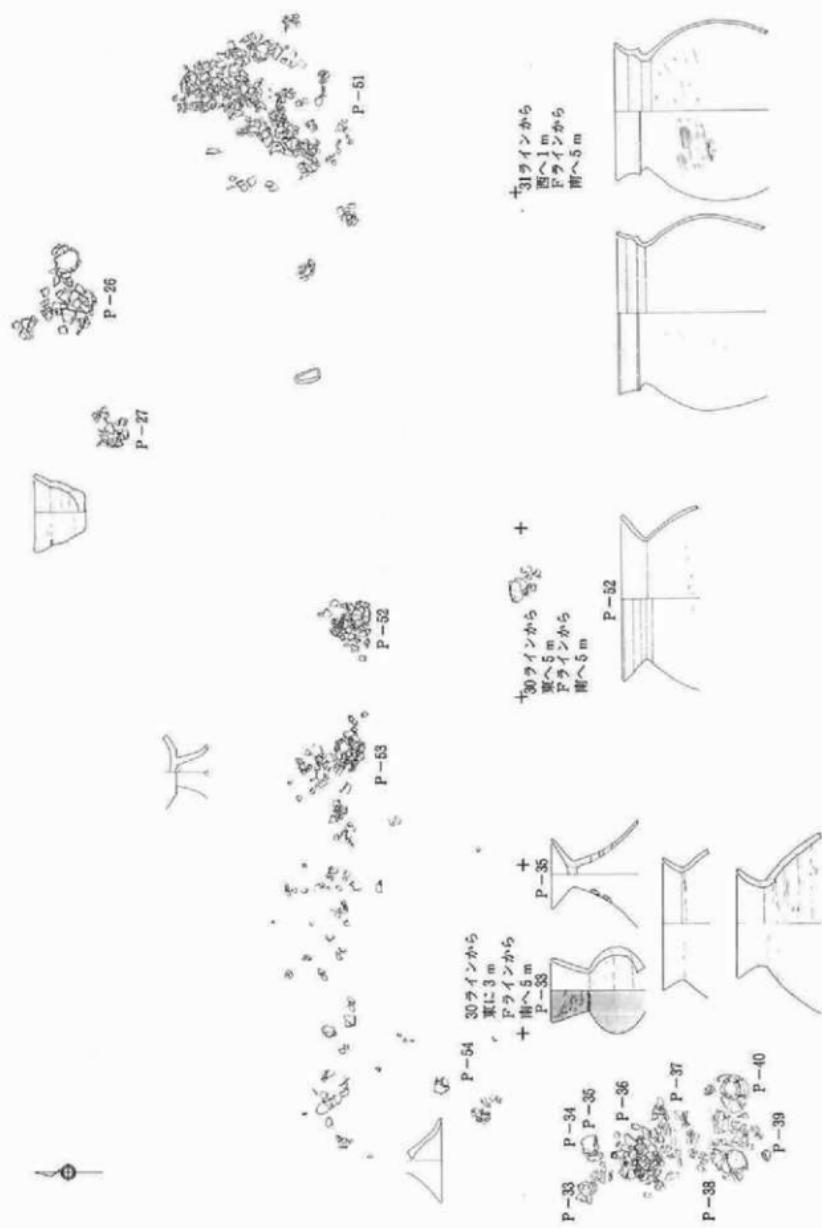




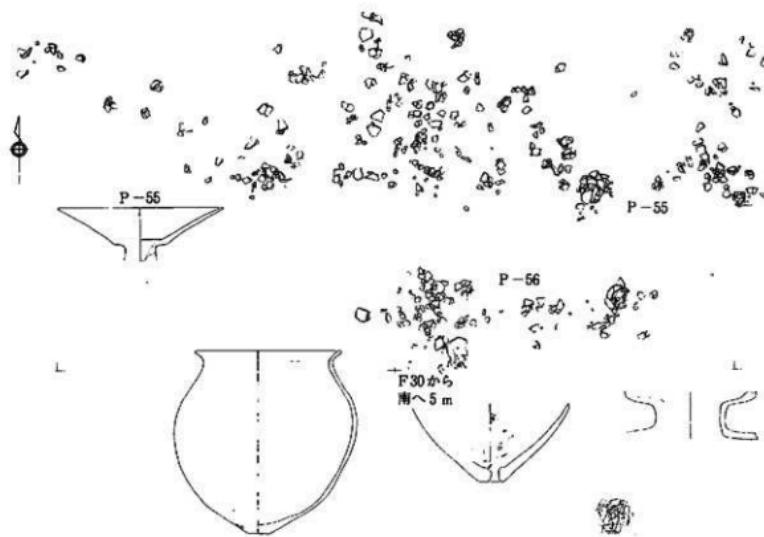
第13図 河跡土器出土状況図 (P-7~13) (S = 1/30、土器は1/6)



第14図 河跡土器出土状況図2 (P-14~25・41・42) (S = 1/30、土器は1/6)



第15図 河跡土器出土状況図3 (P-26・27・33~40・51~54) (S = 1/30、土器は1/6)



第16図 河跡土器出土状況図4 (P-32・55・56) (S=1/30)

第2節 河跡出土の土器

今回の調査で出土し、本報告書に図示できた土器は205点を数える。この中の実に75%を超える156点が河跡からの出土品である。この大量の土器をおおむね3つの層位に分けて取り上げたことは前述したが、ここではその各土器群について少し詳しく見てみたい。

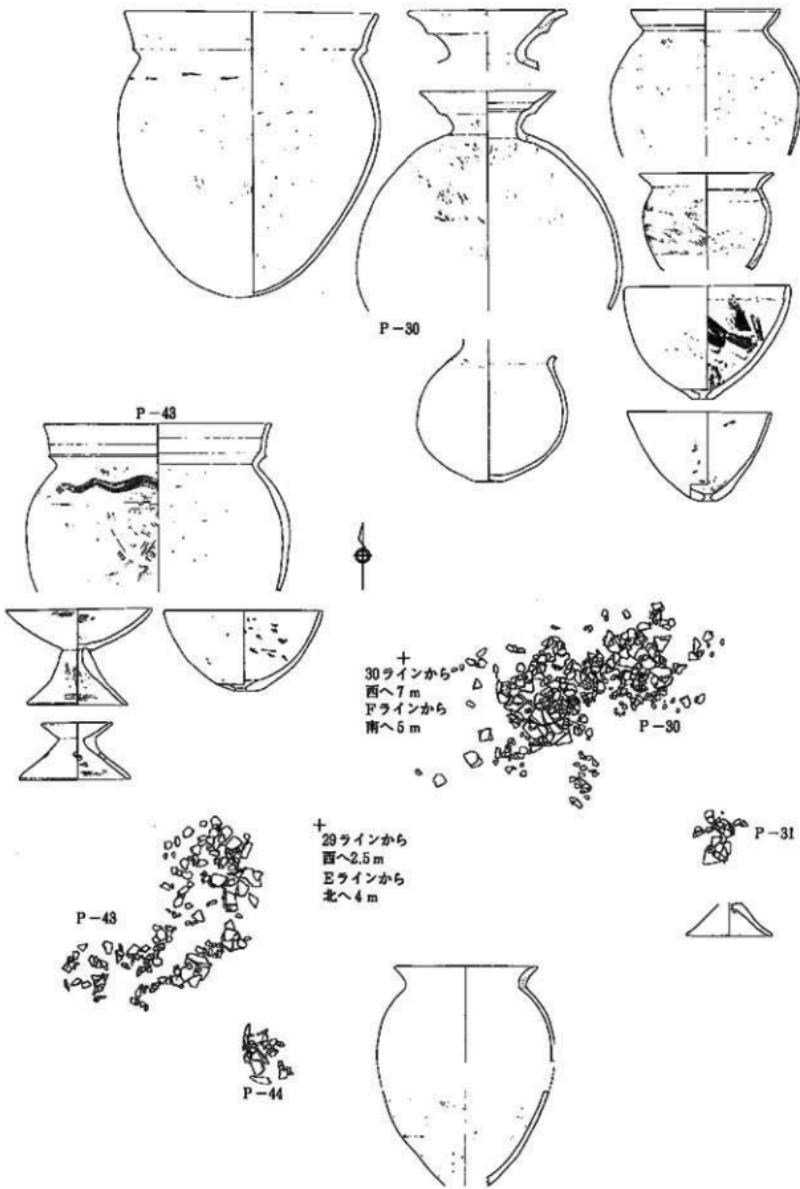
1 第1層土器群（第21～31図）

この層位の土器群には、明らかに上面に堆積していた包含層に含まれていたと見られる土器が含まれてしまった。包含層の取り残しがあったのかもしれない。また、第2層土器群の時期のものも含まれており、より第1層土器群の様相が複雑になっているように見えるが、比較的の時期幅は少なく、時期の特定が可能である。

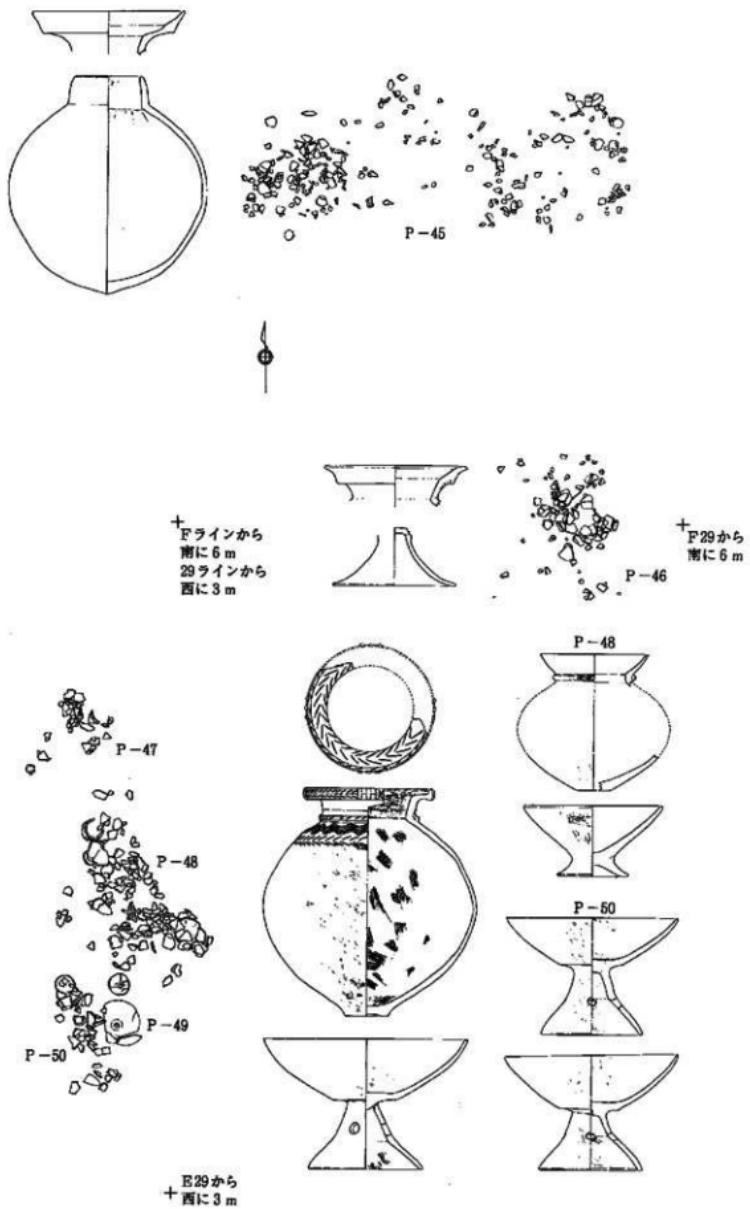
壺では在来の「く」の字口縁壺に加え、山陰系の大型・中型壺や布留系の壺が多く見られる。壺は有段口縁の広口壺が主体を占めるが、65など東海系のものなども見られる。高壺では東海系の高壺が主体を占め、ほかの形式のものはほとんど見られない。鉢形土器では底部に小孔を持つ有孔鉢形土器の出土が目立つ。在来の土器がほぼ払拭され、畿内・東海・山陰などの多地域の土器が混在している状況である。ほぼ田嶋明人氏の漆町編年7・8群に並行する時期の土器群と考えているが、布留系の壺では口縁の肥厚があまり顕著ではないのに対し、器台形土器の大半が小型器台で占められるなどの時期幅が感じられる。河跡という遺構の性格上からも、ある程度の時期幅を持ってこの土器群を捉えておきたい。

2 第2層土器群（第32～34図）

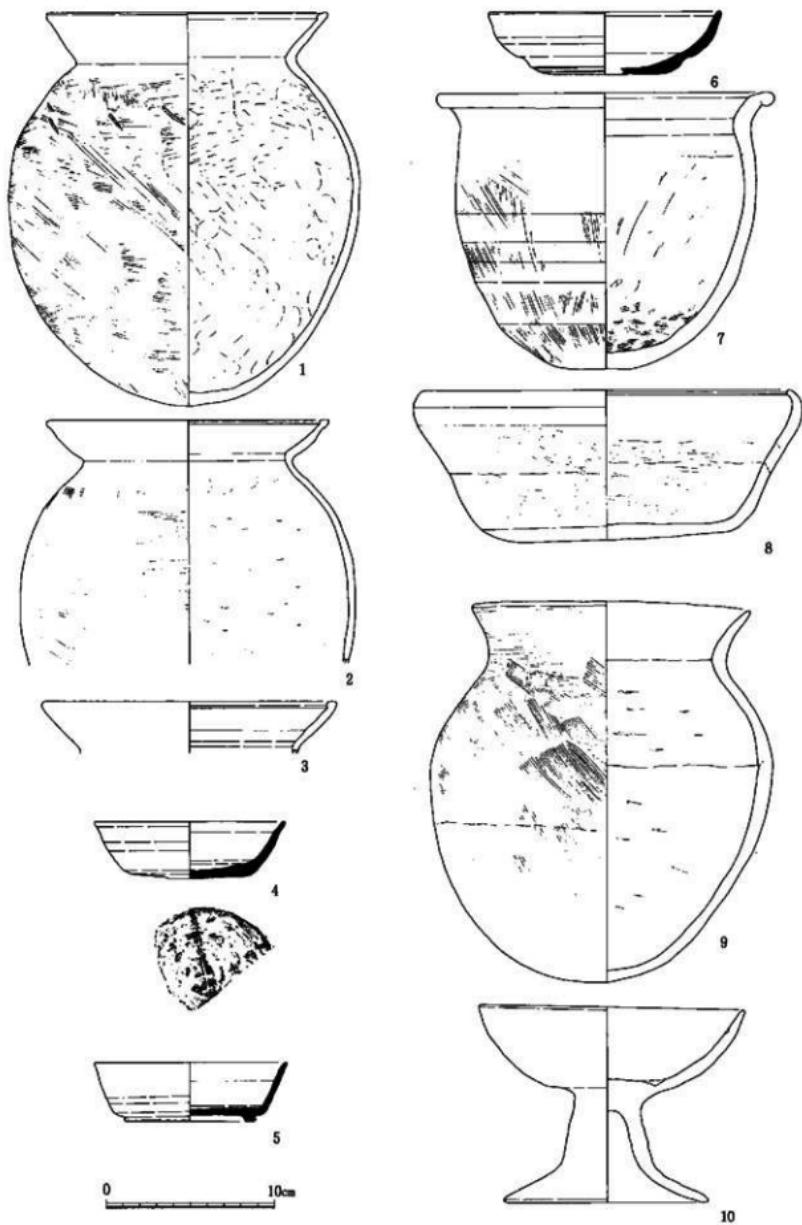
わずかに第3層の土器が混じってしまっているが、おおむね凹線文系の土器群と捉えられる。本遺跡の北約500mに位置する戸水B遺跡は、凹線文系土器群の定着期の遺跡として、北陸における畿内第IV様式並行期の標識遺跡となっている。今回の第2層出土土器がこの戸水B式期のものであることから、戸水B遺跡と藤江C遺跡の関係が注目される。



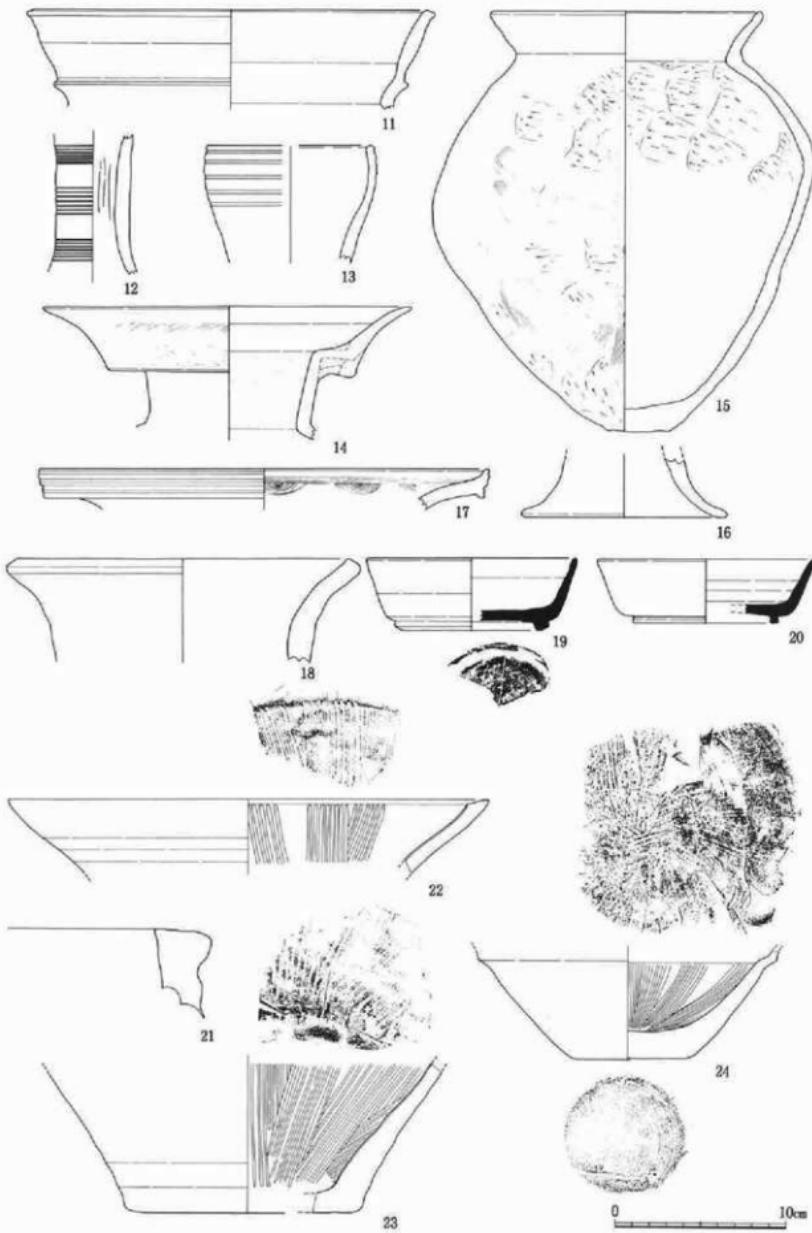
第17図 河跡土器出土状況図5 (P-30・31・43・44) (S = 1/30、土器は1/6)



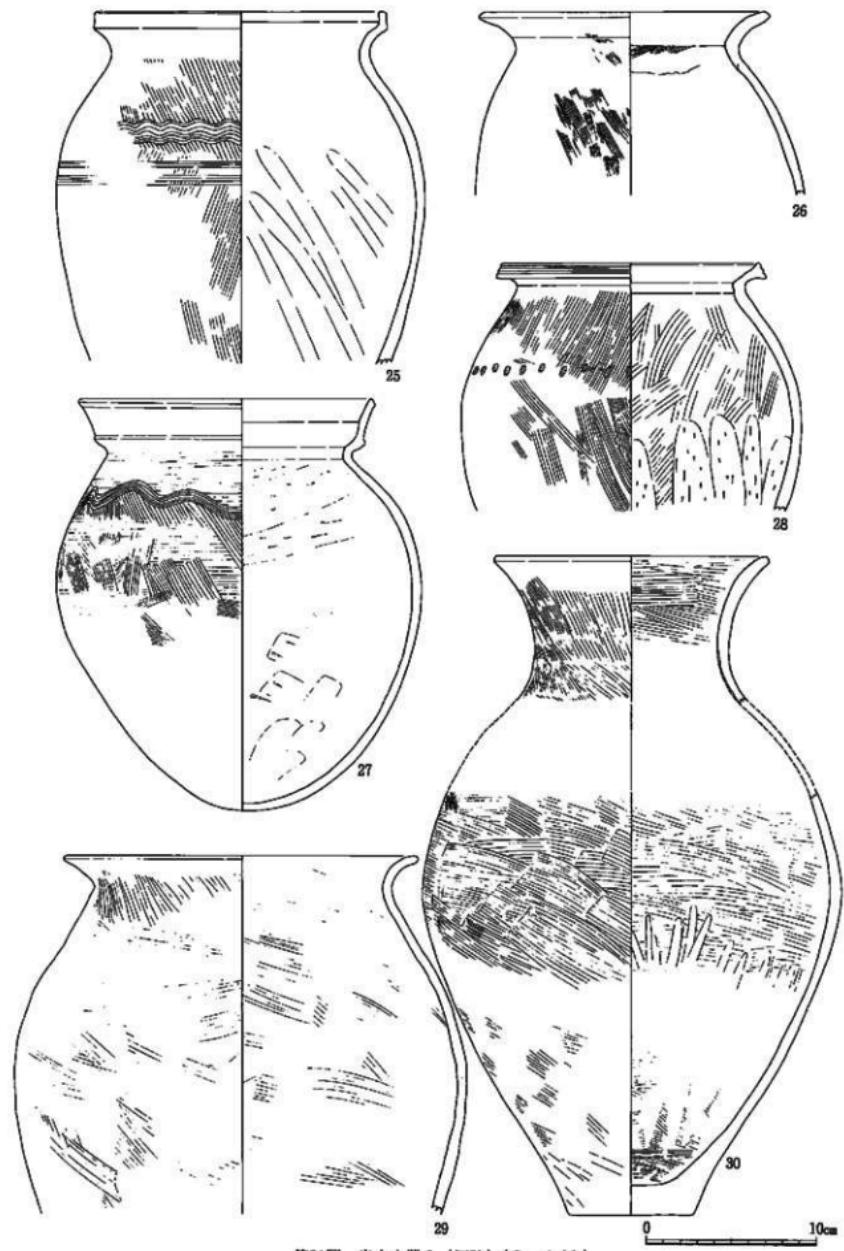
第18図 河跡土器出土状況図6 (P-45-50) (S = 1/30、土器は1/6)



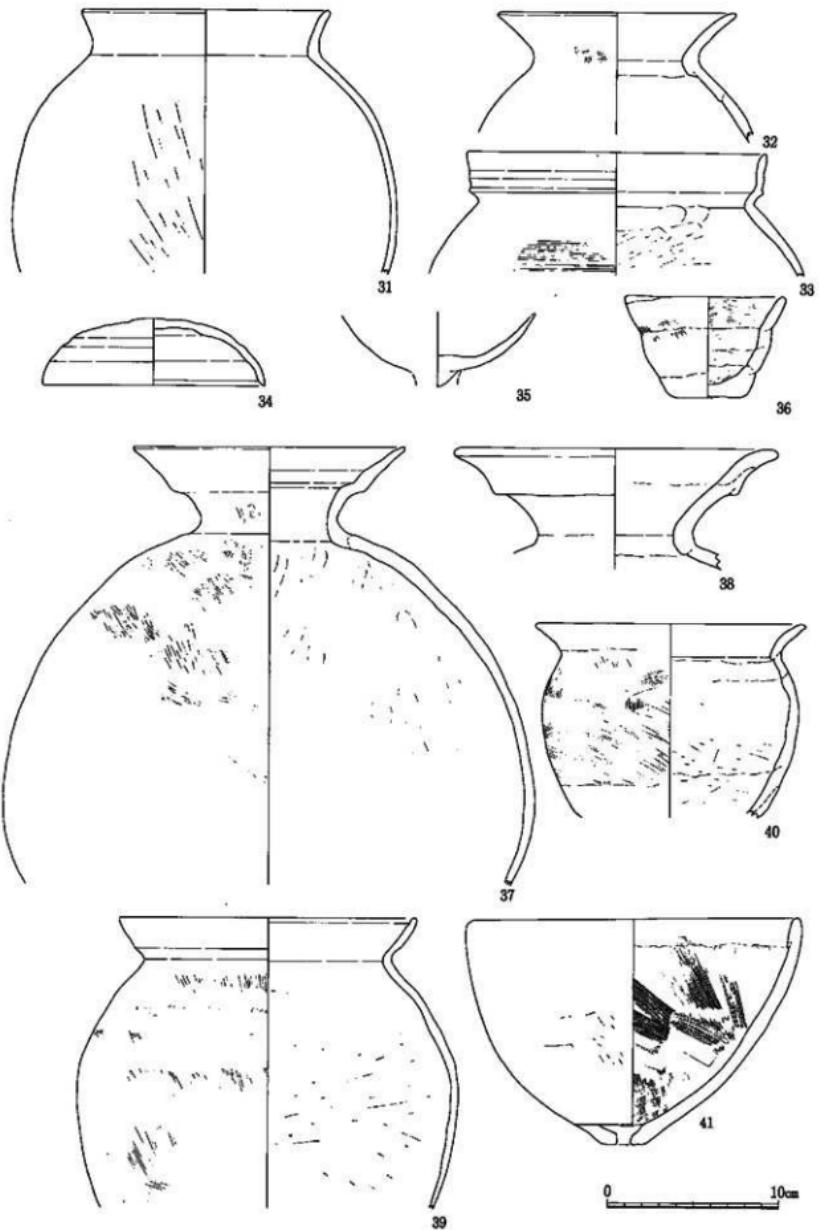
第19図 出土土器1（井戸）(S = 1/3)



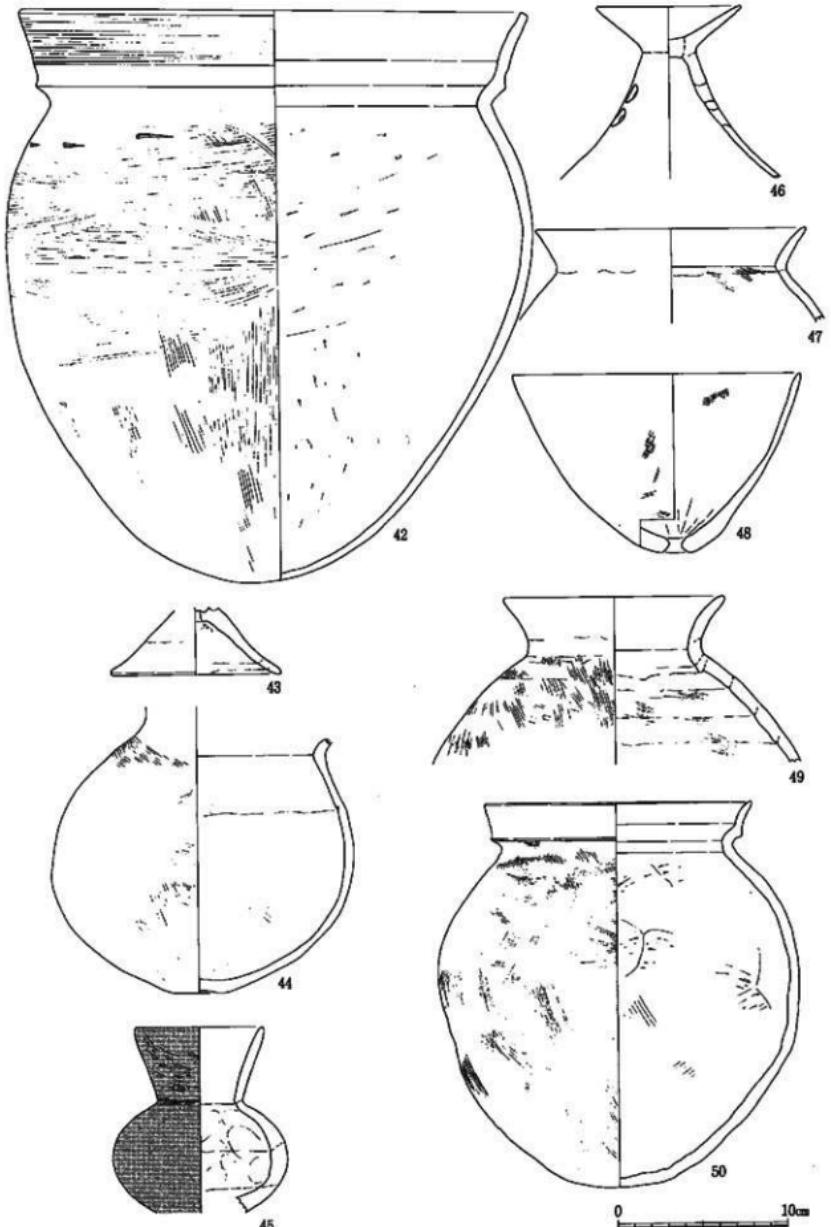
第20図 出土土器2 (溝) (S = 1 / 3)



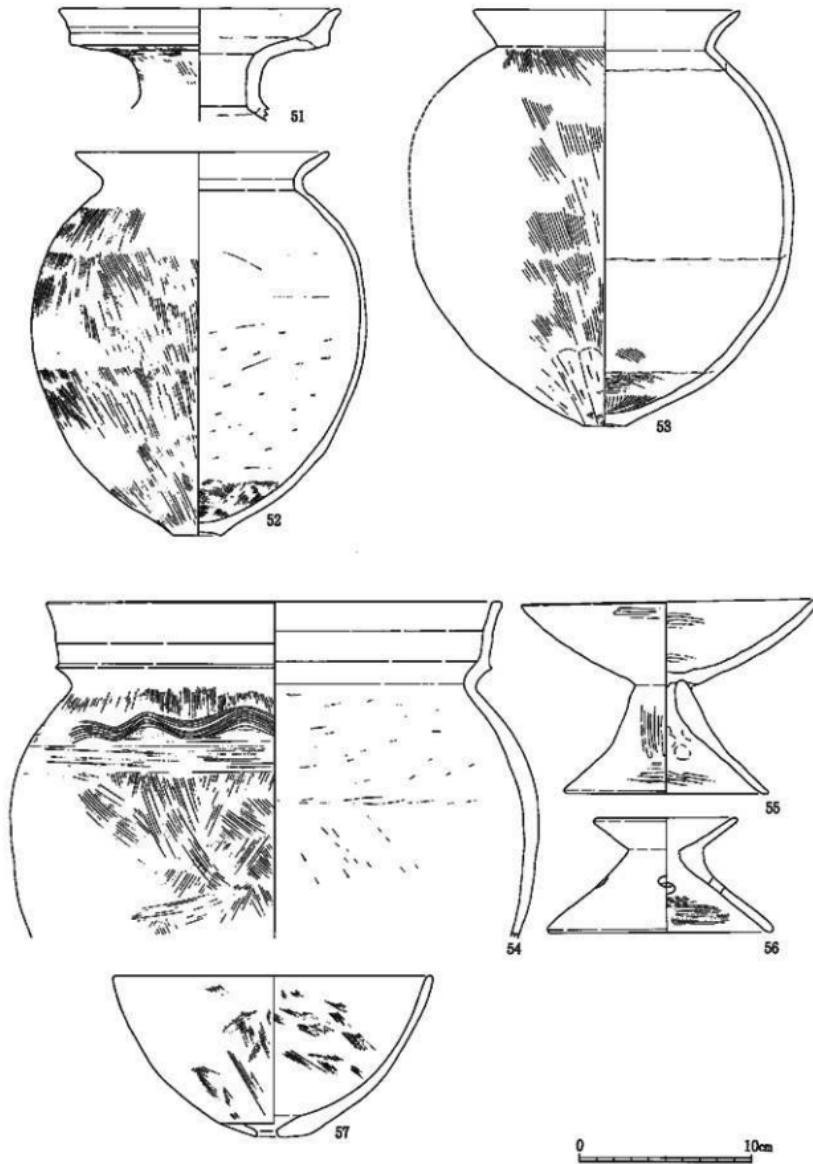
第21図 出土土器3(河跡)(S=1/3)



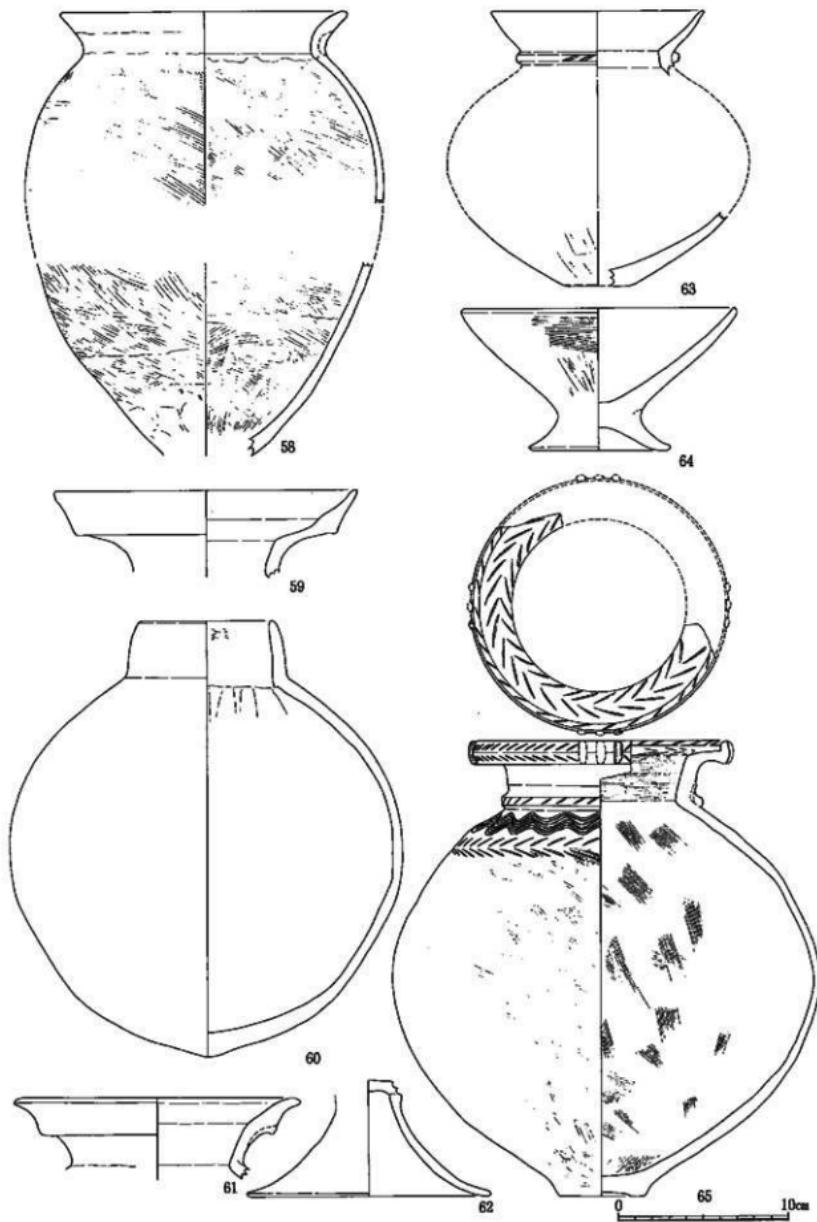
第22圖 出土土器4 (河跡) ($S = 1/3$)



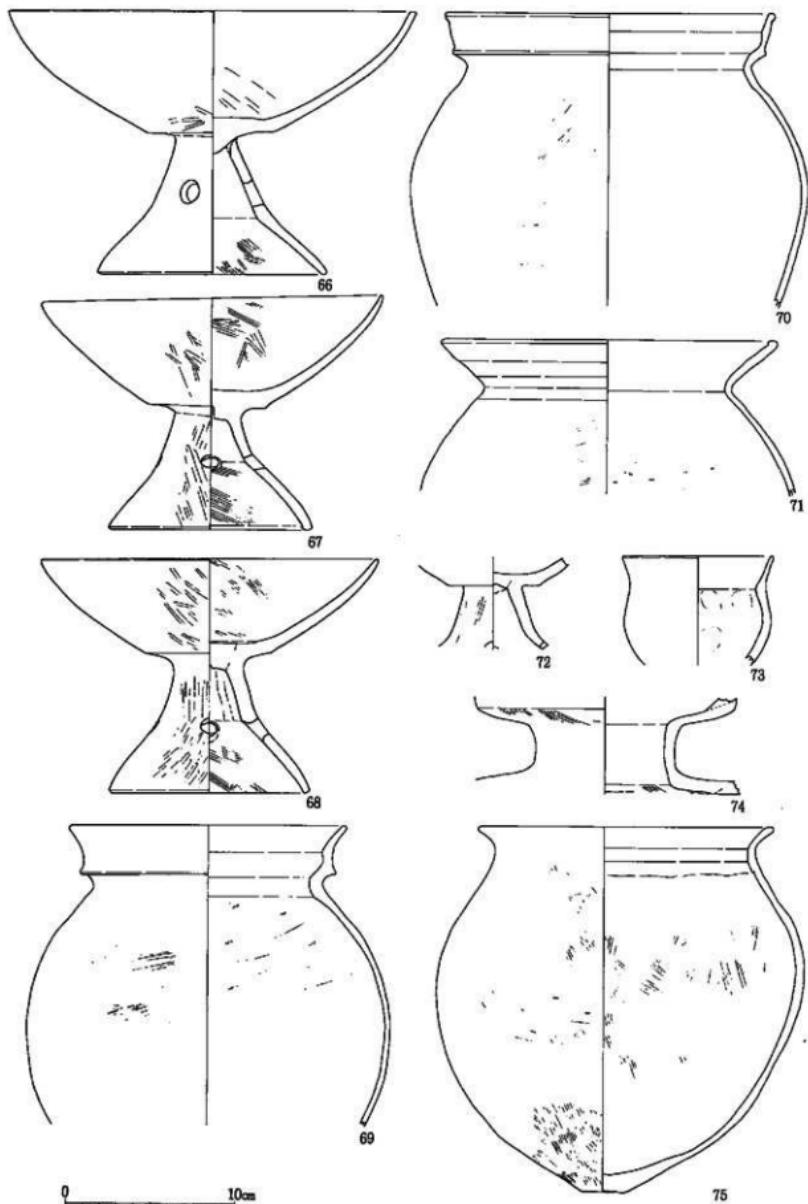
第23圖 出土土器 5 (河跡) ($S = 1/3$)



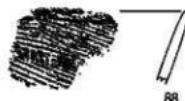
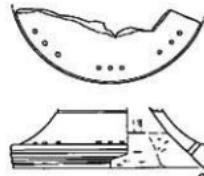
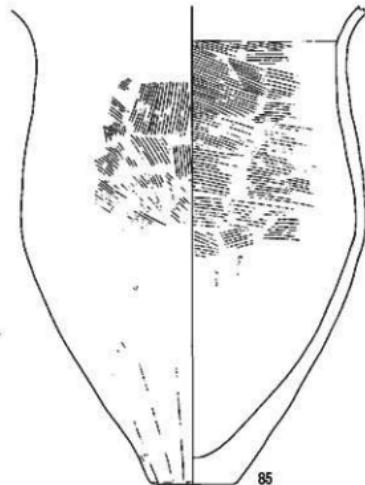
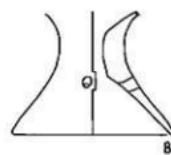
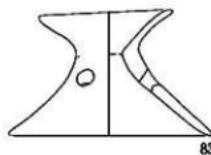
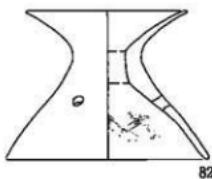
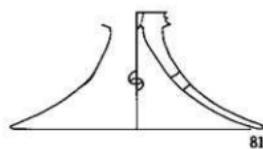
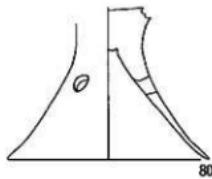
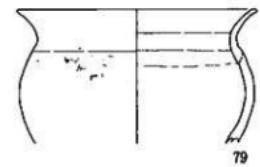
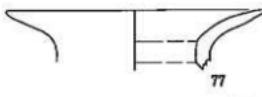
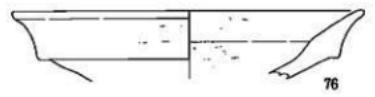
第24圖 出土土器 6 (河跡) ($S = 1/3$)



第25図 出土土器7 (河跡) ($S = 1/3$)

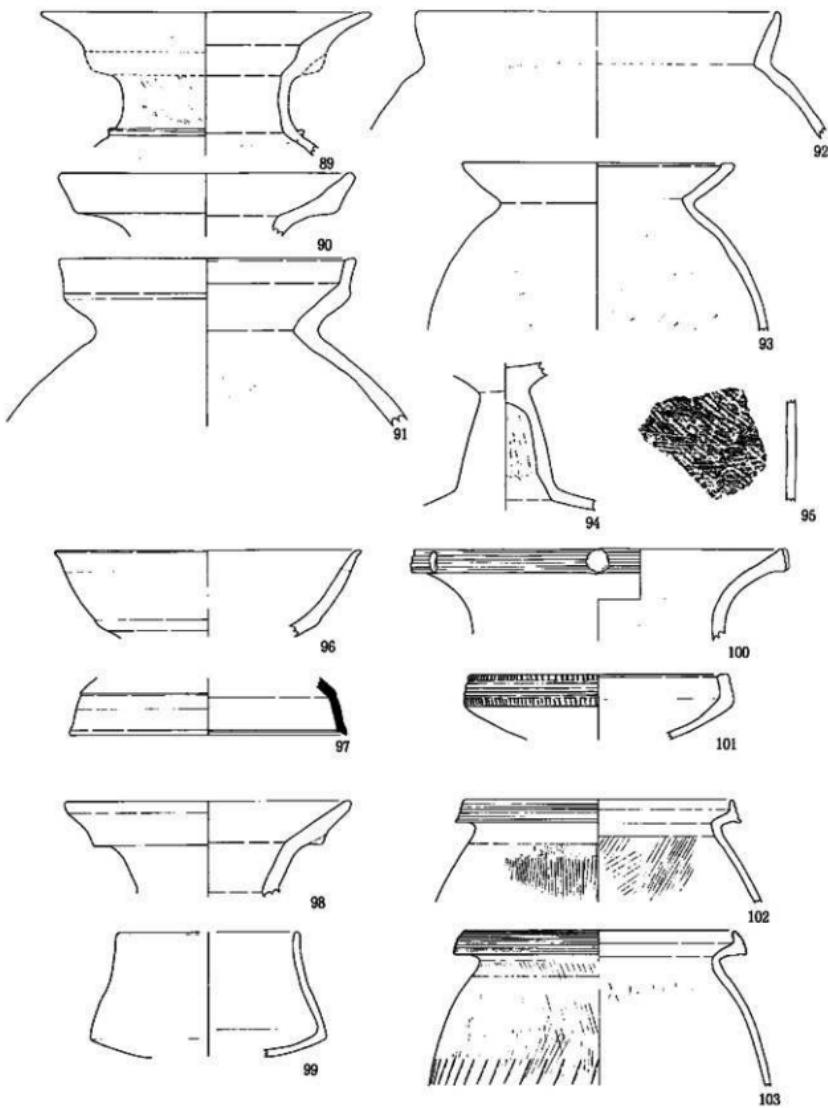


第26図 出土土器 8 (河跡) (S = 1 / 3)



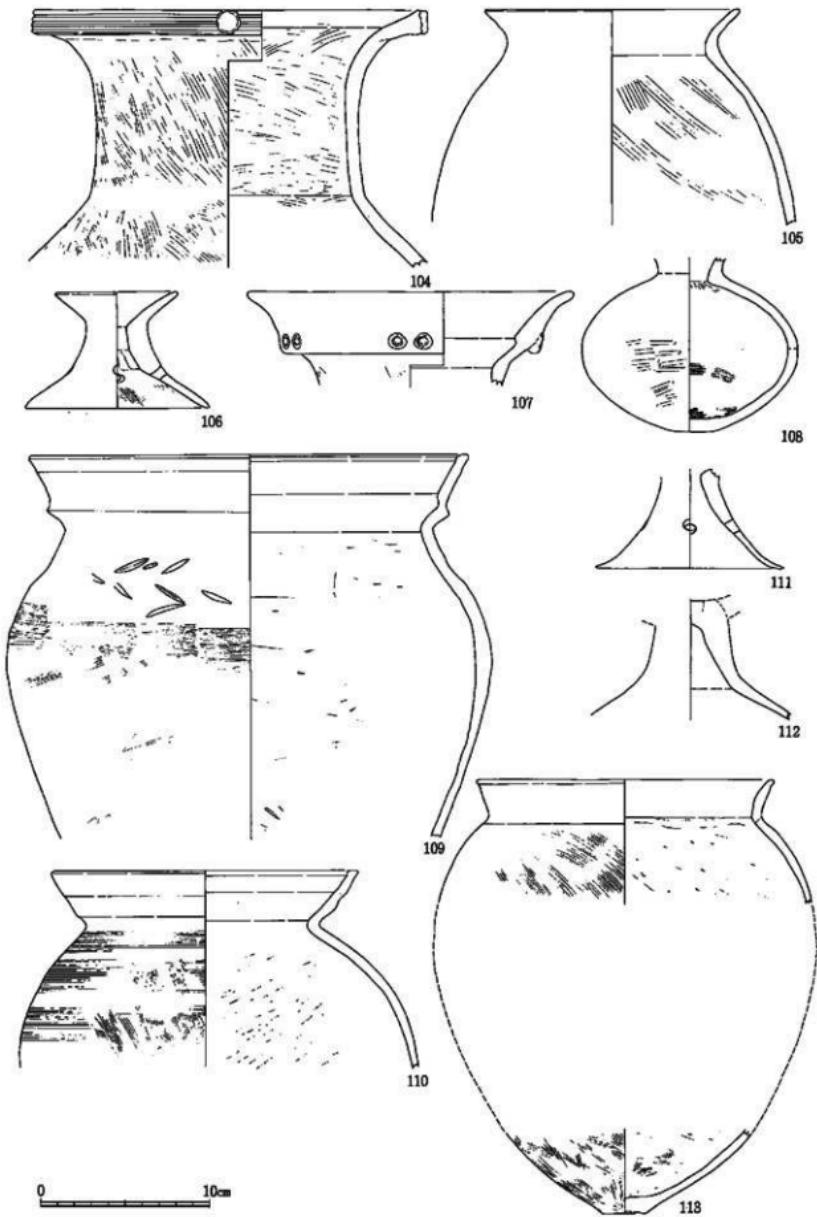
0 10cm

第27図 出土土器9(河跡) (S = 1/3)

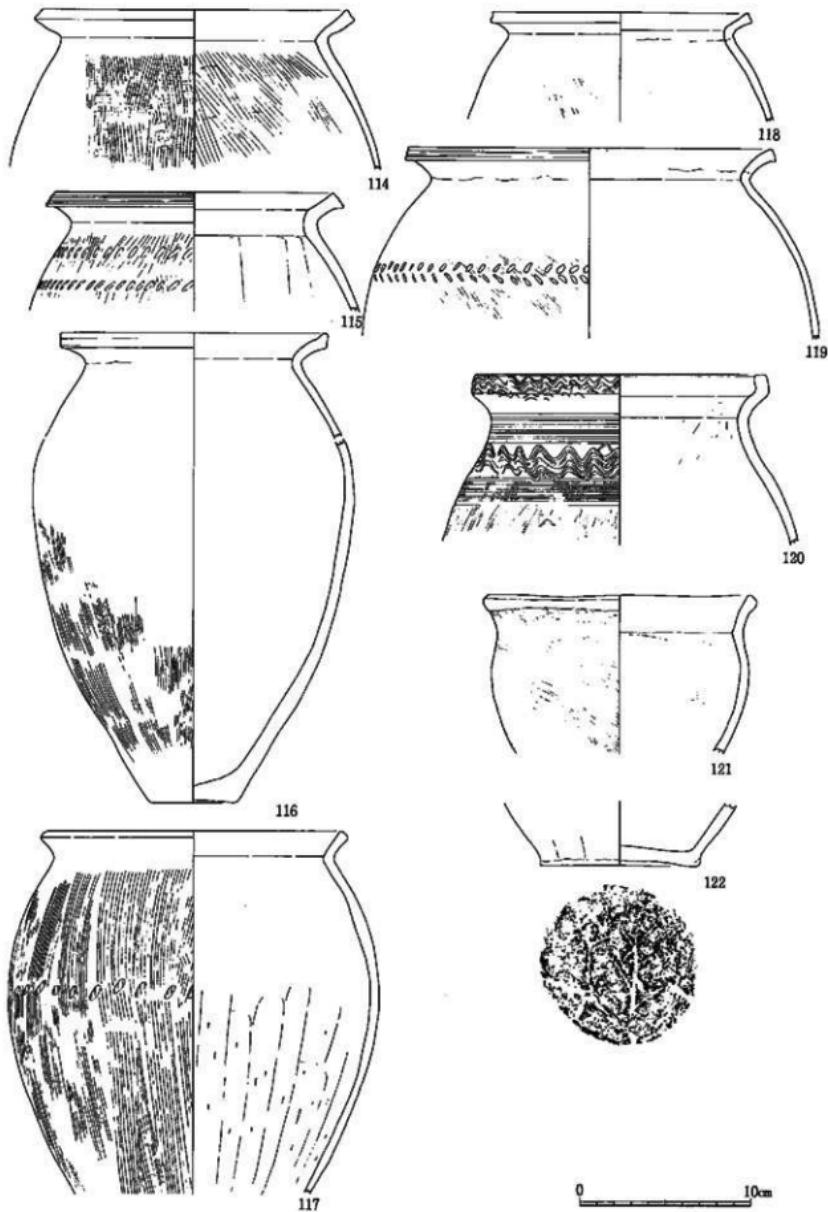


0 10cm

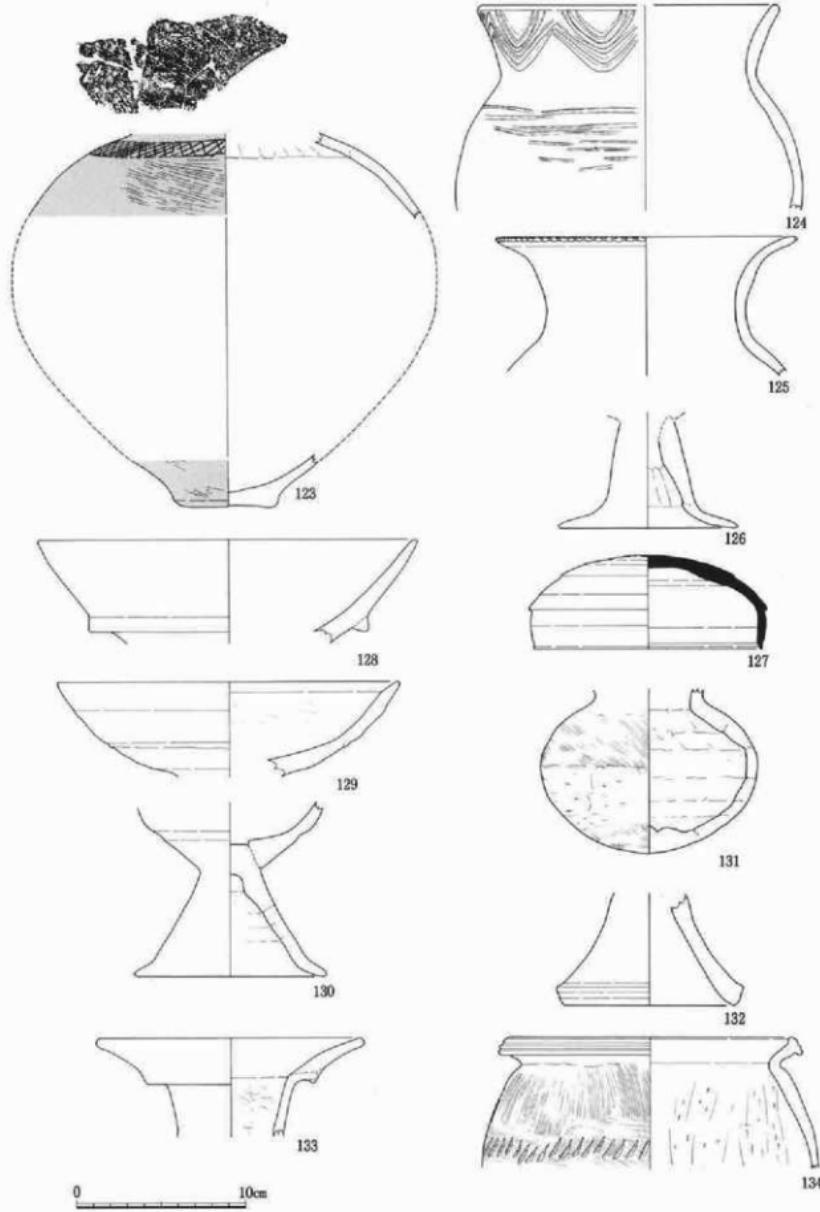
第28図 出土土器10(河跡) (S = 1 / 3)



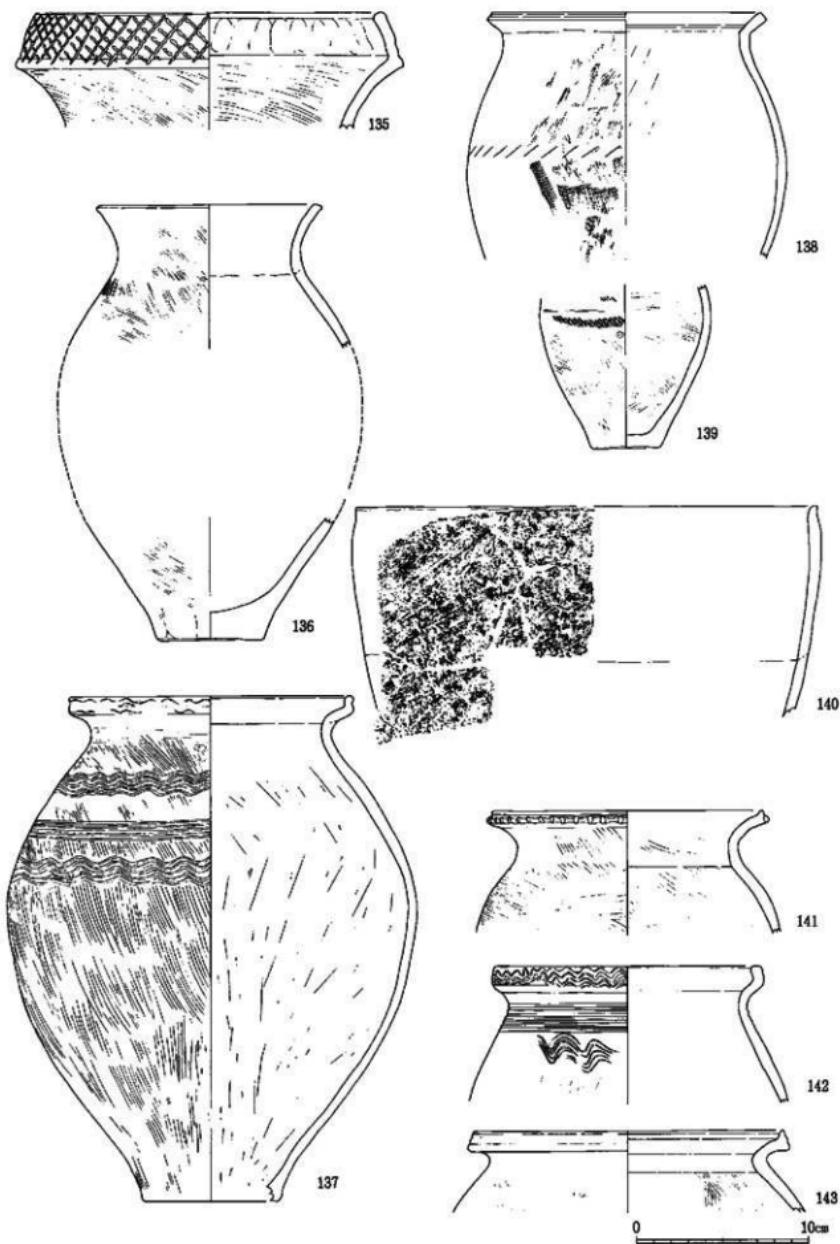
第29圖 出土土器11（河跡）（S = 1/3）



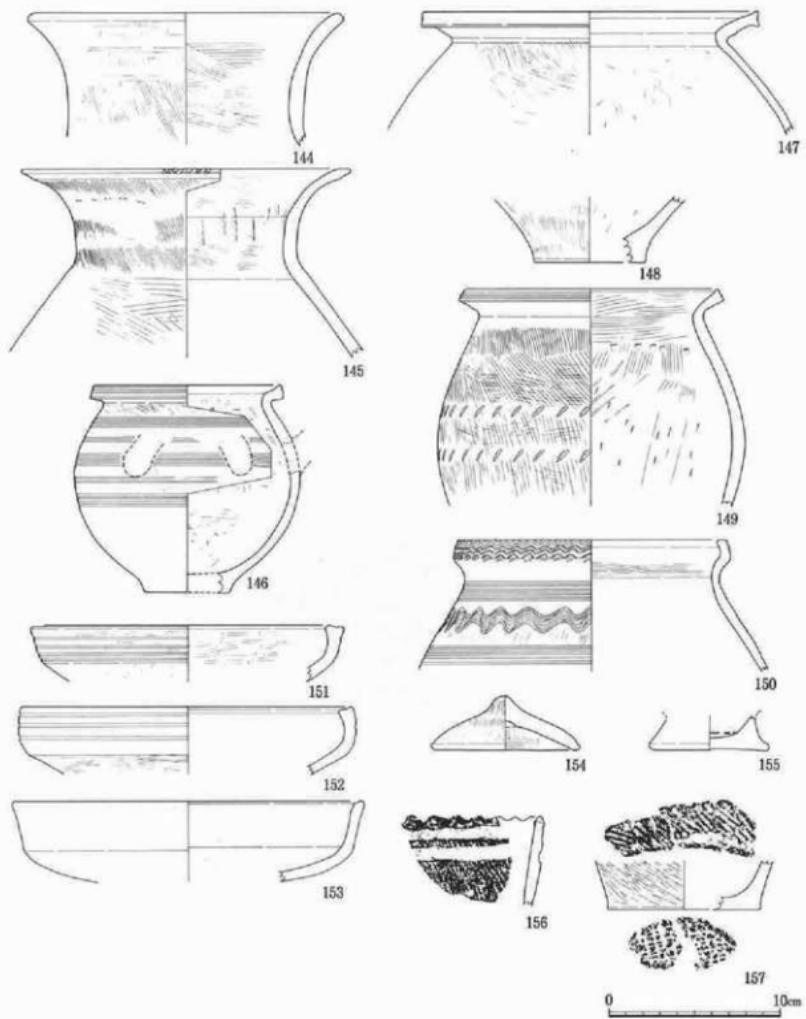
第30図 出土土器12(河跡)(S=1/3)



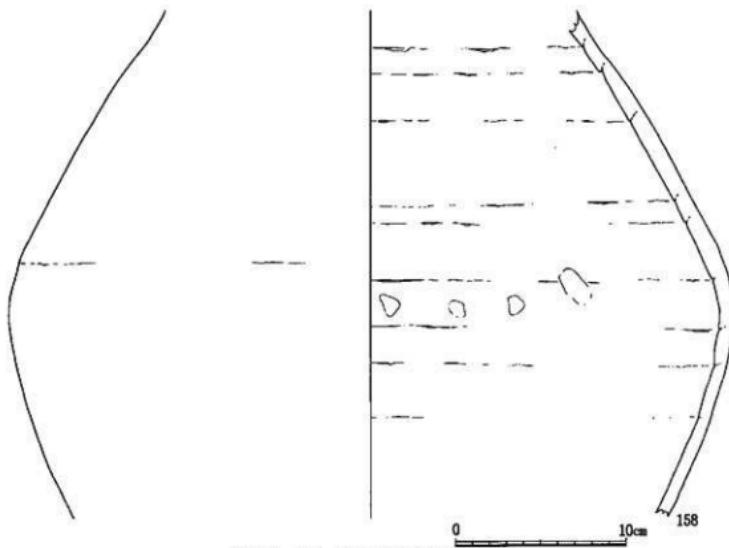
第31図 出土器13(河跡) (S = 1 / 3)



第32図 出土土器14(河跡)(S=1/3)



第33図 出土土器15(河跡) (S = 1 / 3)

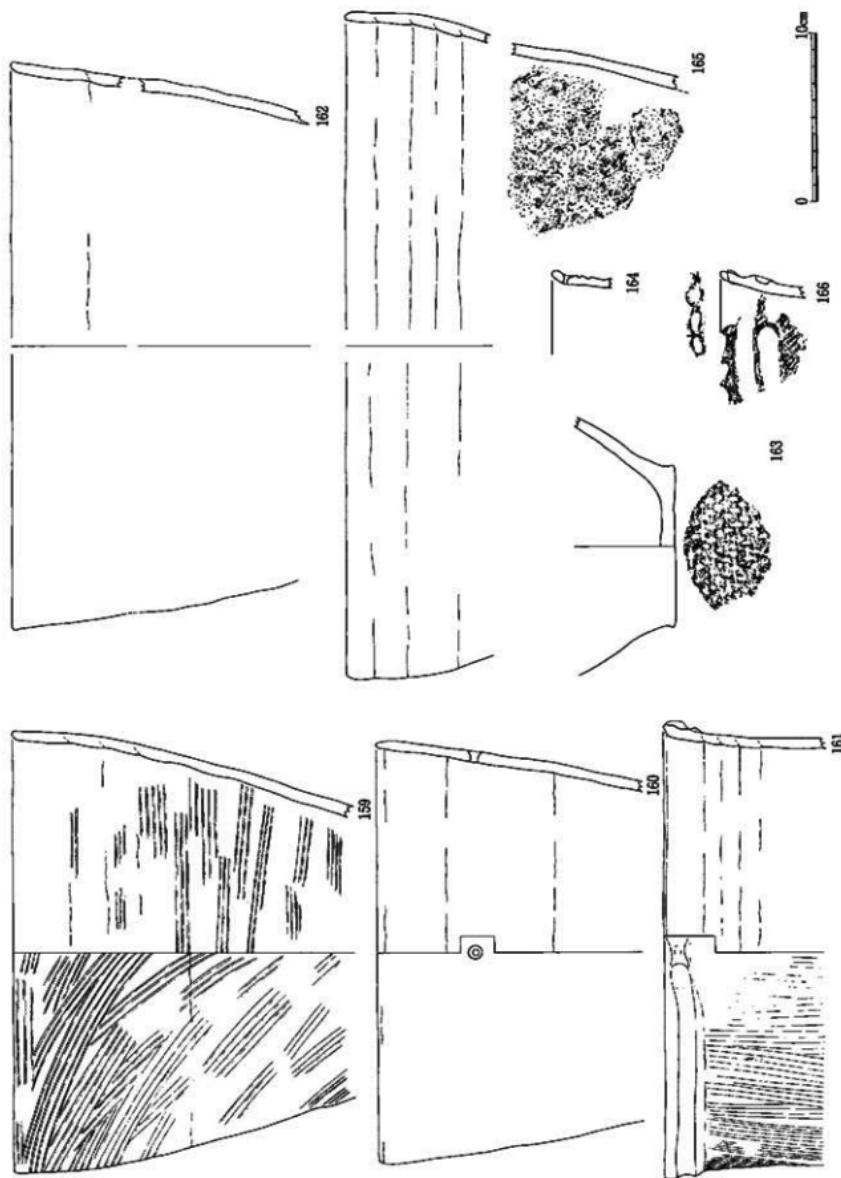


第34図 出土土器16（河跡）(S=1/3)

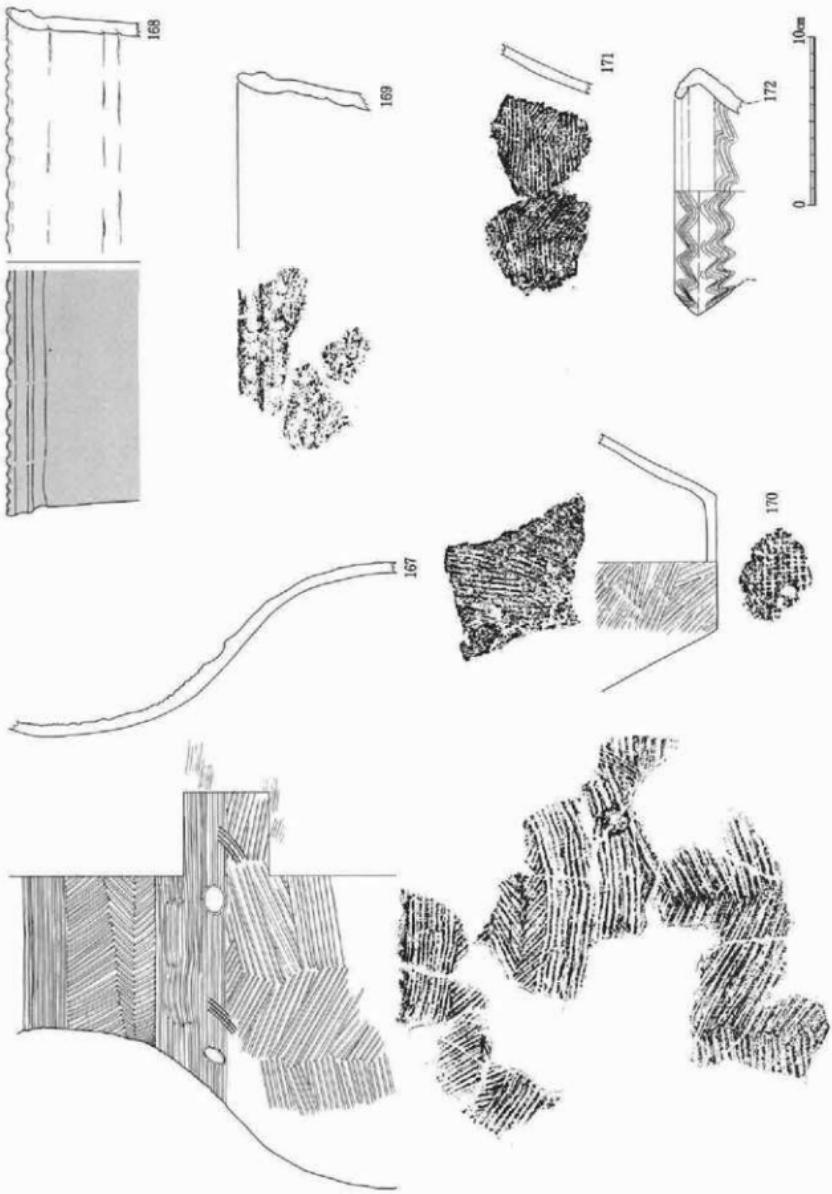
3 第3層土器群（第35・36図）

条痕文系の土器が大半を占める。整理箱で約5箱分が出土しているが、図化できたものは14点にとどまる。この他に同様の土器がいくつか出土している（177～179など）が、河跡の中で出土層位などが異なるものである。粗製の壺が多く、口縁外面に指頭沈線文が1条ないし2条巡るもののが見られる。164は口縁外面に2条の沈線が巡るもので、遠賀川式土器の中段階頃に並行するものと見られる。167は東海地方の水神平式土器の影響を強く受けた壺である。体部には羽状条痕が施されているが、頸部に横方向の羽状条痕が巡るほか、肩部に円形の指押さえ文様が5ないし6ヶ所に付けられ、文様の割付が見られるようになっている。172は口縁端部が内屈する壺の口縁である。内外面に波状文が見られ、梅描き文系土器の影響が見られることから、Ⅱ様式並行期のものと見られる。こうしたことから第3層の土器群は、条痕文系土器群の最末段階を中心とした時期の土器群といえるのではないだろうか。ただし、出土層位は違うが、178のような繩文晩期末の長竹式の土器と見られる破片も見られ、周辺にさらに古い段階の人々の営みがあった可能性も考えられる。

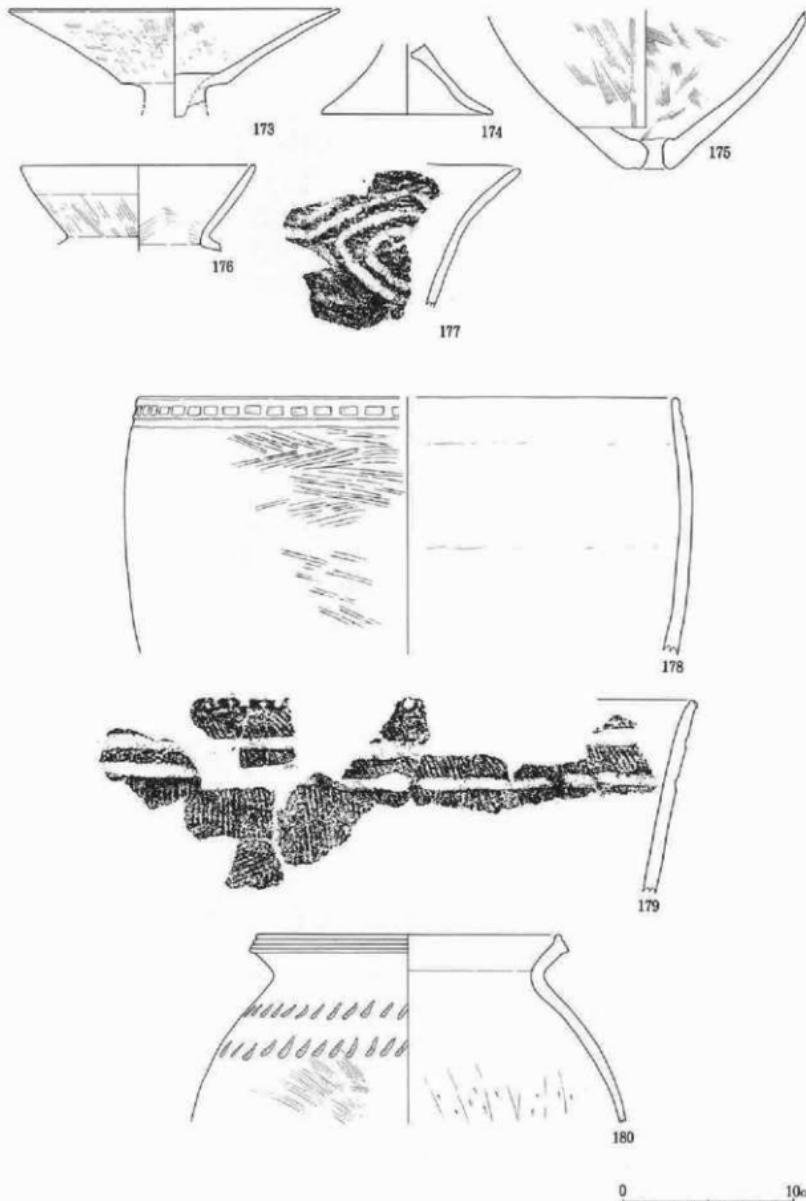
今回の第2次調査の報告では、この河跡の出土遺物が中心であるため、ある程度の幅を持って当該資料の所属時期を考えざるを得ない。また、石器の報告も引き続いて刊行される予定の第1次調査の報告に譲っているために、ここで第2次調査自体の報告も完了しているわけではない。今少し検討を重ね、その成果を第1次調査の報告書に生かしたいと考えている。



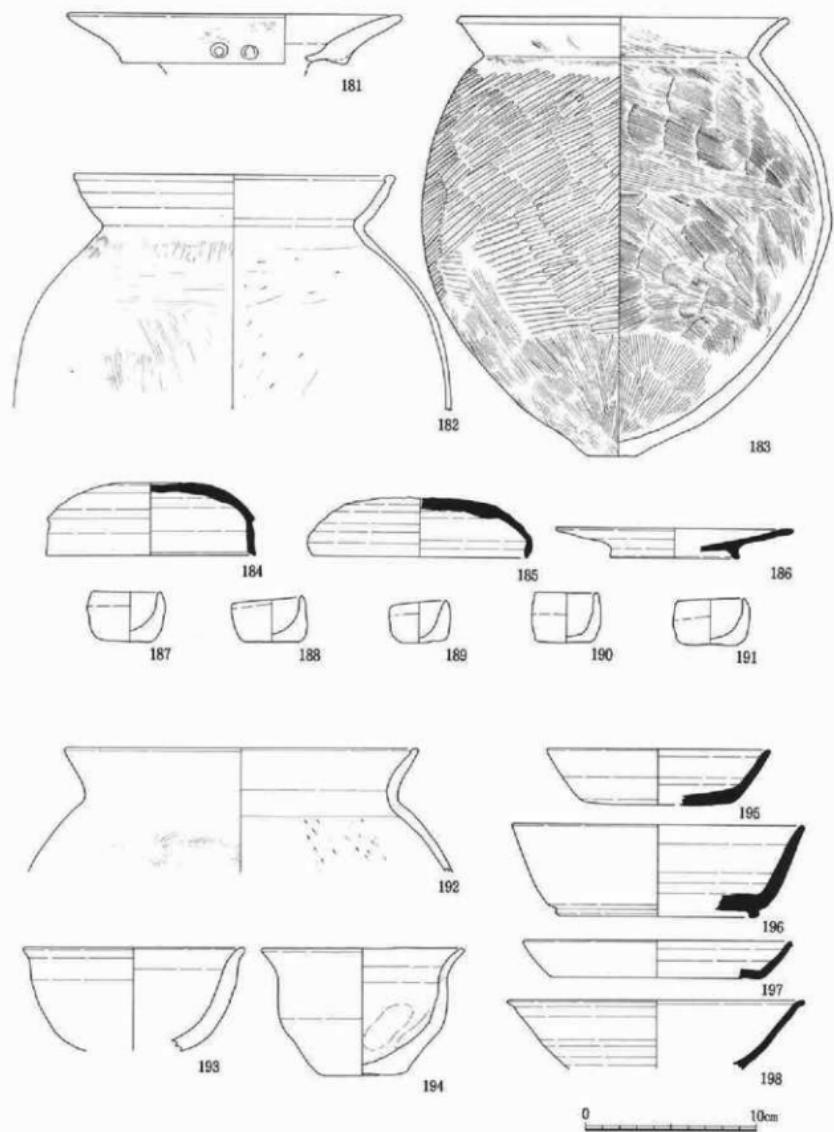
第35圖 出土器17（河跡）(S = 1 / 3)



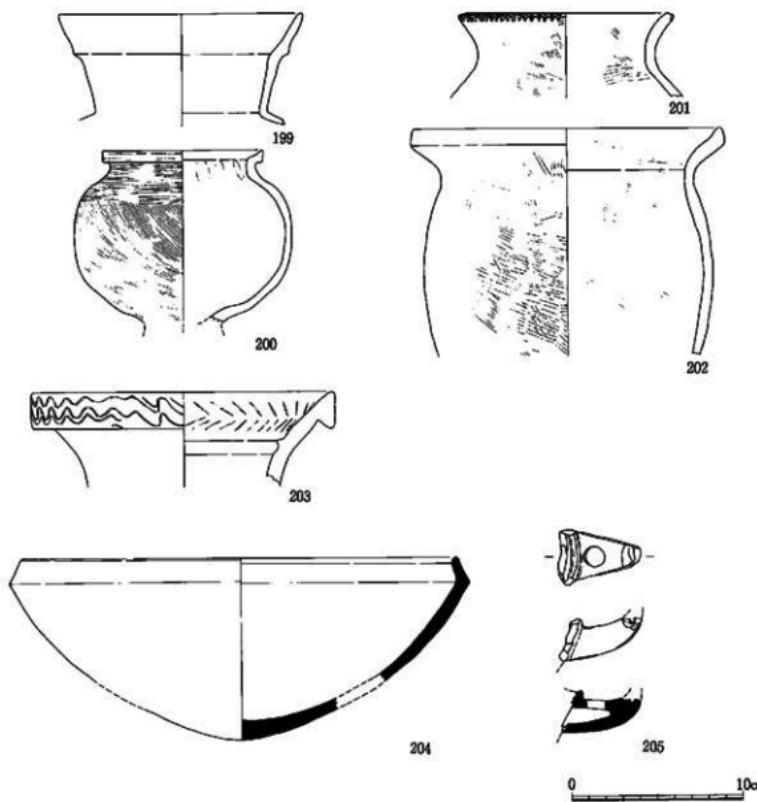
第36図 出土土器18（河跡）(S = 1/3)



第37図 出土土器19(河跡) (S = 1/3)



第38図 出土土器20（包含層）（S = 1/3）



第39圖 出土土器21（T區調查區）（S = 1 / 3）

土器観察表

No	出土地	グリッド	器種	法量 cm	調 整	すとこげ	色 滴	保存度	容量	備 考	実測 No
1	1号井戸	G-32	壺	口径: 16.6 肩部: 20.9 器高: 23.5	内: ヨコナデ ケズリ 指おさえ 外: ヨコナデ ハケ	内: ところど ころ付着 外: 全面に付 着	浅黄橙色 灰白色	完形 口縁 底面	4.16l		460
2	1号井戸	G-32	壺	口径: 16.8 肩部: 20.0	内: ヨコナデ ケズリ 外: ヨコナデ ケズリ	外: 口縁~体 部	灰褐色	1/2 口縁		布留式	437
3	1号井戸	G-32	壺	口径: 17.4	内: ヨコナデ 体部ナデ 指頸圧痕 外: ヨコナデ 体部ヨコ ナデ ナデ	内: 体部 外: 口縁 体部	黄灰色	1/4 口縁 底面付近		布留式	438
4	2号井戸	F-30	壺	口径: 11.4 底部: 7.2 器高: 3.4	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ		灰色	1/4			190
5	2号井戸	F-30	有台壺	口径: 11.5 底部: 7.8 器高: 3.5	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ		灰色	完形 口縁 底面			191
6	3号井戸		壺	口径: 13.4 器高: 3.7	内: ヨコナデ 外: ロクロナデ		灰白色	1/4 口縁 底面		串状工具 によるナ デ	223
7	3号井戸	F-28	壺	口径: 19.5 (復元後) 18.5 肩部: 17.75 器高: 16.5	内: ヨコナデ ケズリ ハケ 外: ヨコナデ ハケ	内: 体部一部 底部黒斑 外: 体部黒斑	浅黄橙~ 橙色	ほぼ完 底面小片 口縁			189
8	3号井戸		鉢	口径: 21.5 器高: 9.1	内: ヨコナデ ミガキ 外: ヨコナデ ミガキ		淡黄色				222
9	井戸状遺構 15号構	F-33 G-33	壺	口径: (16.3) 肩部: 17.3 器高: 22.8	内: ヨコナデ 肩部 ケズリ 外: ハケによる ヨコナデ 肩部 ハケ	外: 口縁から 底部にかけ て片側	にぶい黄 橙色	ほぼ完 口縁 底面	3.1l		436
10	井戸状遺構	F-33	高 壱	口径: (15.55) 底部: (11.8) 器高: (11.9)	内: ナデ? 外: ナデ?		灰色っぽ い浅黄橙 色	ほぼ完 口縁 底面			435

No	出土地	グリッド	器種	法量 cm	調 整	すすとこげ	色 調	遺存度	容量	備 考	実測 No
11	3号溝	J-33	壺	口径: 23.4	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ	外: 黒斑あり	内: 黄灰色 外: 魚灰色	1/4 口縁			439
12	3号溝	J-33	高 坯		内: しまり目 あり 摩耗の為 不明 外: 摩耗の為 不明		にぶい黄 白色	1/4 脚部	沈錆		173
13	4号溝	J-33	壺	口径: (9.8)	内: ミガキ? 摩耗の為 不明 外: ミガキ? 摩耗の為 不明		浅黄橙色	1/4 口縁	凹線		174
14	14号溝	G-34・35	壺	口径: 21.8	内: ミガキ ハケ目 ケズリ後 ミガキ 外: ミガキ ハケ目		浅黄橙色	ほぼ完 口縁			441
15	14号溝	A-3	壺	口径: (15.7) 肩部: (22.0) 底部: 3.7 器高: 25.2	内: ヨコナデ 肩部-ケ ズリナナ デ 外: ヨコナデ 肩部-ケ ズリのち ハケナデ	内: 下部にコ グあり 外: 肩部にス ス付着	橙色	ほぼ完 口縁 底面	4.461		440
16	14号溝 分岐附近	H-34	高 坯	口径: 11.8	内: ナデ 外: ミガキ		浅黄橙色	1/2 口縁			442
17	14号溝	F-35	高 坯	口径: 26.6	内: ヨコナデ		浅黄橙色	小片 口縁			149
18	9号溝	E-37	壺	口径: 19.9	内: ヨコナデ 外: 摩耗		灰白色	1/4 口縁			148
19	11号溝		有台坯	口径: 12.3 底部: 14.2 器高: 4.3	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ						192
20	18号溝	F-29 G-32	有台坯	口径: (12.6) 底部: (8.4) 器高: (3.85)	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ		灰白+明 青灰色	1/3 口縁 底面			193
21	近世ミゾ	D-33	壺		内: ロクロナデ 外: ロクロナデ		浅黄橙色	小片 口縁			199
22	近世ミゾ	D-33	すり鉢	口径: 28.6	内: おろし目 外: ロクロナデ		にぶい橙 色	小片 口縁			198
23	近世ミゾ	D-33	すり鉢	口径: 13.0	内: おろし目 外: ロクロナデ		にぶい橙 色	小片 底面			197
24	近代カク乱	D-34	すり鉢	底部: 7.0	内: ヨコナデ おろし目 外: ロクロナデ	内: 炭化	橙色	1/2 底面 口縁			200

No	出土地	グリット	器種	法量 cm	調 整	すすこげ	色 調	遺存度	容量	備 考	実測 No
25	河跡 P-1		甕	口径：(16.6) 腹径： (21.8)	内：ヨコナデ ナデ 外：ヨコナデ ナデ	外：腹部下一部 スス付着	浅黄橙色	1/4 口縁			150
26	河跡 P-3	F-33	甕	口径：16.5 器高：(10.9)	内：摩耗の為 不明 外：ハケ ナデ	外：スス付着 口縁部 腹部の一 部	浅黄橙色	1/4 口縁			378
27	河跡 P-4	F-33	甕	口径：17.2 腹径：21.7 器高：24.7	内：ケズリ 外：ハケ	外：全面うすくスス付 着	浅黄橙色	ほぼ完 口縁 底面	4.661		381
28	河跡 P-5	E-35	甕	口径：(15.0) 腹部：(20.0)	内：ヨコナデ ハケ ケズリ 外：ヨコナデ ハケ	外：口縁部 腹部の一 部にスス 付着	にぶい黄 橙色	1/2 口縁 2/3			106
29	河跡 P-6	D-35	甕	口径：(20.7) 腹部：(26.8)	内：ハケ、ナデ 外：ナデ、ハケ		にぶい黄橙 +灰白色	1/4 口縁			370
30	河跡 P-8	F-32	壺	口径：16.0 腹部：24.8 底部：7.2 器高：(39.6)	内：ハケ 腹部の下はハ ケのちナデ 外：ハケ 腹部の下はハ ケのちナデ	外：下1/3ス ス付着	淡黄色	ほぼ完 口縁 底面			385
31	河跡 P-10	F-32	甕	口径：14.5 器高：(15.8)	内：摩耗、風化の 為不明 外：僅かにミガキ 底部付近ハケ	外：腹部の一 部	浅黄橙色	口縁 小片			383
32	河跡 P-17	F-32	壺	口径：13.8 器高：(7.3)	内：摩耗、風 化の為不 明		橙色	1/4 口縁			380
33	河跡 P-18	F-32	甕	口径：17.4 器高：(7.4)	内：ケズリ 指ナデ ヨコナデ 外：ヨコナデ カキ目		浅黄橙色	小片 口縁			382
34	河跡 P-23	F-37	壺	口径：13.2 器高：4.0	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ		浅黄橙色	ほぼ完 口縁 底面			180
35	河跡 P-26	F-32	高 壺	口径：(11.6)	内外：摩耗		内：浅黄橙 色 外：淡黄色	1/4 口縁			360
36	河跡 P-27	F-31	手握ね	口径：9.1 底部：4.5 器高：6.1	内：ハケ、ケズリ 外：ナデ、ハケ		浅黄橙色	ほぼ完 底面 口縁			359
37	河跡 P-30	E-29	壺	口径：(15.95) 腹部：(31.55)	内：ヨコナデ ナデ 外：ヨコナデ 腹部のハケナ デのちミガキ	外：腹部下部 に黒斑あ り	内：黒っぽ い黄灰色 外：灰白 灰黄色	1/4 口縁			373

No.	出土地	グリッド	器種	法量 cm	調 整	すすとこげ	色 調	遺存度	容量	備 考	実測 No.
38	河跡第1層 P-30・31	E-29	壺	口径: 18.4	内: 摩耗、ナデ 外: 摩耗、ナデ		内: ぶい 赤褐色 外: 浅黄褐色	1/2 口縁			361
39	河跡 P-30	E-29	壺	口径: 17.5 肩部: 22.6	内: ナデ ケズリ 外: ヨコナデ ハケ	外: 体部	浅黄橙色	1/2 口縁		布留式	372
40	河跡 P-30・ 36付近	E-30	壺	口径: 15.6	内: 摩耗 ナデ ケズリ 外: 摩耗 ハケ		浅黄橙色	小片 口縁			368
41	河跡 P-30		有孔鉢	口径: 19.0 底部: 2.5 器高: 13.7	内: ハケ ナデ 外: ケズリ		浅黄橙色				459
42	河跡 P-30	E-29	壺	口径: 29.7 肩部: 31.3 器高: 34.4	内: ナデ ケズリ 外: ハケ		橙色	完形 口縁 底面	124		371
43	河跡 P-31	E-29	器 台	底部: 10.0	内: 摩耗 外: 摩耗		浅黄橙色	1/2 脚部			362
44	河跡 P-32	E-30	壺	肩部: 17.6 底部: 3.4	内外: ハケ		浅黄橙色	完形 底面	2.4L		364
45	河跡 P-33	E-30	壺	口径: (7.4) 肩部: (10.4)	内: 摩耗 指頭圧痕 外: ミガキ		浅黄橙色	ほぼ完 口縁			375
46	河跡 P-35		高 坯	口径: 8.4	内: 摩耗			1/4 口縁			376
47	河跡 P-36	E-30	壺	口径: 15.9	内: 摩耗著しい 頭部一部ハ ケ 外: ヨコナデ 摩耗著しい	外: 口縁部す す付着	内: 灰白 色 外: 浅黄 橙色	1/4 口縁			342
48	河跡 P-38	E-30	有孔鉢	口径: (16.8)	内: 摩耗の為 不明 外: ハケ		淡黄色	ほぼ完 口縁			389
49	河跡 P-40	E-30	壺	口径: 13.0	内: ヨコナデ ハケ 外: ヨコナデ ハケ		内: 浅黄橙 色 黄灰色 外: 浅黄橙 色	ほぼ完 口縁			377
50	河跡 P-41	E-31	壺	口径: (15.55) 肩部: 21.3 器高: 23.05	内: ヨコナデ その他ハケナ デのちナデ 外: ヨコナデ ハケナデのち ナデ		内: 黒灰色 外: 灰白 + 黒灰色	ほぼ完 口縁 底面	4.43L	山陰系	386
51	河跡 P-42	E-31	壺	口径: 16.6	内: ヨコナデ 摩耗 外: 頭部ハケ		浅黄橙色	1/2 口縁			341

No	出土地	グリッド	器種	法量 cm	調 整	すすとこげ	色 調	遺存度	容量	備 考	実測 No
52	河跡 P-42	E-31	甕	口径: 14.9 肩部: 19.8 底部: 2.8 器高: 22.9	内: ヨコナデ ハケ ケズリ 外: ヨコナデ ハケ		にぶい黄 橙色	完形 口縁 底面	4.0l		387
53	河跡 P-42	E-31	甕	口径: 15.5 底部: 2.4 器高: (24.9)	内: 肩部付近ハ ケあとナデ 外: ヨコナデ 肩部より下 ハケ	外: 下半分	明褐色	1/2 口縁 底面	5.2l		390
54	河跡第1層 P-43	E-29	甕	口径: (26.8) 肩部: (31.4)	内: ヨコナデ ハケ 外: ヨコナデ 肩部ケズ リ		浅黄橙色	1/2 口縁			366
55	河跡 P-43	E-29	高 坯	口径: (17.2) 底部: (11.7) 器高: (11.7)	内外: ミガキ	内: 肩部の黒 斑 外: 坯部に黒 斑	浅黄橙色 +にぶい 黄橙色	1/2 口縁 底面			367
56	河跡第1層 P-43	E-29	器 台	口径: 4.0 底部: 13.0 器高: 6.9	内: 摩耗 ハケ 外: ミガキ		にぶい橙 色	ほぼ完 成 口縁 底面			410
57	河跡第1層 P-43	E-29	有孔鉢	口径: 18.8 底部: 3.1 器高: 9.7	内: ハケナデ (上半) 外: ハケナデ		浅黄橙色	1/2 口縁 底面			363
58	河跡第2層 P-44	E-29	甕	口径: 16.9 器高: (27.5)	内: ヨコナデ ハケ 外: ヨコナデ ハケ ナデ	内: 底面スス 外: LI縁 肩部	浅黄橙色	ほぼ完 成 口縁			369
59	河跡 P-45	E-28	甕	口径: 17.9	内: ハケのち ナデ 外: 摩耗		浅黄橙色	1/4 口縁			405
60	河跡 P-45	E-28	甕	口径: 7.7 肩部: 23.4 器高: 26.0	内: 摩耗、風 化の為不 明 外: 摩耗、風 化の著し いが一部 ミガキ残		にぶい黄 橙色	1/4 口縁 底面	5.23l		354
61	河跡 P-46	E-28	甕	口径: 17.0	内外: 摩耗		淡黄色	1/4 口縁			351
62	河跡 P-46	E-28	高 坯	底部: 14.6	内外: 摩耗		橙色	1/4 脚			350
63	河跡 P-48		甕	口径: 12.4 底部: 4.1 器高: (16.4)	内: 摩耗の為 不明瞭		橙色	1/4 口縁 底面			355
64	河跡 P-48		台付鉢	口径: 16.0 底部: 7.8 器高: 8.5	内: ミガキ 外: ハケナデ ミガキ		橙色	1/2 口縁 底面			353

No.	出土地	グリッド	器種	法量 cm	調整	すすとこげ	色調	遺存度	容量	備考	実測 No.
65	河跡 P-48		壺	口径: 14.8 肩部: 24.8 底部: 4.9 器高: 27.3	内: ハケナデ 外: ハケのち ミガキ		にぶい黄 橙色	1/2 口縁 底面	6.56l		352
66	河跡第2層 P-49	E-28	高 壱	口径: 23.5 脚部: 12.9 器高: 15.7	内外: ミガキ		明赤褐色	ほぼ完 壊部 脚部			458
67	河跡第2層 P-50		高 壱	口径: 20.1 脚部: 11.6 器高: 14.1	内: ハケナデの ちミガキ 外: ミガキ		浅黄橙色	ほぼ完 壊部 脚部			457
68	河跡第2層 P-50		高 壱	壊部: 19.8 脚部: 11.3 器高: 14.0	内: ハケナデの ちミガキ 外: ミガキ			ほぼ完 壊部 脚部			456
69	河跡 P-51	E-30	壺	口径: 16.1 肩部: 21.6	内: ケズリの ちナデ 外: ハケ		橙色	1/2 口縁		山陰系	347
70	河跡 P-51		壺	口径: 19.3 肩部: 23.4	内: 摩耗 ヨコナデ 外: 摩耗 ヨコナデ ハケ		浅黄橙色	1/2 口縁			348
71	河跡 P-52	E-30	壺	口径: 18.8	内: ケズリ ナデ 外: ヨコナデ ハケ		浅黄色	1/4 口縁		布留式	349
72	河跡 P-53		高 壱		内: 摩耗 脚部はナデ 通かし穴 外: ミガキが少 なく残る		橙色	小片			358
73	河跡 P-52		小型壺	口径: (8.7) 肩部: (8.6)	内: 指頭圧痕 摩耗 外: 摩耗		淡黄色	1/4 口縁			395
74	河跡 P-56	E-8	壺		内: 摩耗、ハケ 外: ヨコナデ ハケ、摩耗		浅黄橙色	1/4 口縁			344
75	河跡 P-56	E-30	壺	口径: 16.9 肩部: 21.5 底部: 2.6 器高: 21.85	内: ハケのち ナデ 摩耗 外: ヨコナデ ハケ		灰白色	完形 底面 口縁	4.83l		346
76	河跡第1層 E-29	E-29	壺	口径: 20.9	内: ミガキ 外: ミガキ		灰白色	1/4 口縁			406
77	河跡第1層 E-29	E-29	壺	口径: 15.2	内外: 摩耗	内: 黒斑	淡橙色	1/2 口縁			393
78	河跡第1層 E-29	E-29	壺	口径: 14.8	内: ケズリ ハケ 外: ヨコナデ ハケ	外: 体部スス	浅黄橙色	1/4 口縁			416

No	出土地	グリッド	器種	法量 cm	調整	すすとこげ	色調	遺存度	容量	備考	実測 No
79	河跡第1層	E-29	甕	口径：14.5 肩部：13.8	内：ヨコナデ ナデ 外：ヨコナデ ハケ		橙色	小片 口縁			417
80	河跡第1層	E-29	高 坏	脚部：11.8 器高：(9.1)	内：摩耗の為不明 外：摩耗の為不明		橙色	1/4			411
81	河跡第1層	E-29	高 坏	脚部：14.5 器高：(7.0)	内：ハケのち ナデ 外：ミガキ		内：にぶい 橙色 外：にぶい 赤褐色	1/2			412
82	河跡第1層	E-29	器 台	坏部： 9.4 脚部：12.8 器高： 8.9	内：ハケ、ナデ 外：摩耗の為不明		にぶい橙 色	ほぼ完 口縁 底面			391
83	河跡第1層	E-29	器 台	坏部： 7.8 脚部：11.8 器高： 7.6	内：摩耗の為不明 外：摩耗の為不明		浅黄橙色	ほぼ完 口縁 底面			394
84	河跡第1層	E-29	器 台	脚部： 9.2 器高：(7.4)	内：摩耗の為不明 外：摩耗の為不明		浅黄橙色	1/4			413
85	河跡第1層	E-29	甕	底部： 5.0	内：ハケ下ナデ 外：ハケ下ナデ			1/4 底面	5.05L		114
86	河跡第1層 + 包	E-29 E-30	脚	底部：10.2	内：ケズリ 外：ミガキ 摩耗の為 単位不明			小片 底面			126
87	河跡第1層	E-29	手捏ね	口径： 5.4 肩部： 6.4 底部： 3.5 器高： 6.5	内：ナデ 外：ナデ		灰白色	完形 口縁 底面			392
88	河跡第1層	E-29	深 鉢		内：ナデ 外：条痕		灰褐色	小片			111
89	農道下 河跡第1層		甕	口径：19.4	内：摩耗 外：ハケのち ミガキ		浅黄橙色	1/4 口縁			407
90	農道下 河跡第1層		甕	口径：17.3	内：ミガキ 外：摩耗		浅黄橙色	1/2 口縁			403
91	農道下 河跡第1層		甕	口径：17.3	内：ヨコナデ ハケ 外：ハケ		浅黄橙色	1/4 口縁			451
92	農道下 河跡第1層		甕	口径：21.1	内：ヨコナデ ナデ 外：ヨコナデ ハケ		浅黄橙色	小片 口縁			409
93	農道下 河跡第1層		甕	口径：15.9	内：ケズリ、ナデ 外：ハケ、ナデ		淡黄色	1/2 口縁		布留式	408
94	河跡第1層	E- 28 - 29	高 坏	器高：(8.8)	内：ケズリの ちナデ 外：ミガキ？ ナデ		浅黄橙色	1/4			414

No	出土地	グリッド	器種	法量 cm	調 整	すすとこげ	色 調	遺存度	容量	備 考	実測 No
89	農道下 河跡第1層	E - 28・29	深 茹		内:ナデ 外:条痕のあと ヨコナデ		灰黄色	小片			110
96	農道下 河跡第1層		高 壊	口径: 18.0 器高: (5.3)	内:ミガキ 外:風化の為 不明		浅黄橙色	小片 壊部			415
97	農道下 河跡第1層		蓋	口径: 16.4	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ		灰白色	1/4 口縁			182
98	農道下 河跡第1層	F - 28・29	蓋	口径: 16.8	内:ミガキ ハケ 外:ヨコナデ? 摩耗		明褐色灰色	1/2 口縁			404
99	農道下 河跡第1層	F - 28・29	台付蓋	口径: (10.4)	内:ミガキ? 摩耗の為不明 アバ状に剥 離している 外:ミガキ? 摩耗の為不明		にぶい黃 橙色	小片 口縁			113
100	河跡第1層 第2層 第3層	E - 28 29 30	蓋	口径: 23.6	内:ヨコナデ ハケ 外:ヨコナデ		にぶい黃 橙色	1/2 口縁			144
101	河跡第1層 第2層	E - 28・29	高 壊	口径: 15.2	内:摩耗		浅黄色	(ほぼ)完 口縁			143
102	農道下 河跡第1層	F - 28・29	蓋	口径: 15.8	内:ハケ ナデ 外:ハケ	内:薄片2枚の 内1片の内面 全面スス 外:残破片の外面 全面スス	にぶい黃 橙色	小片 口縁			112
103	農道下 河跡第1層 河跡第1層	F - 28・29 E - 29	蓋	口径: 15.8 器高: (9.3)	内:ナデ下半ケ ズリ? 外:ハケ、ナデ	内:頭部まで 外:列点紋よ り下部	淡黄色	小片 口縁			167
104	河跡第1層 第2層	E - 30	蓋	口径: 22.8	内:ヨコナデ ハケ、ナデ 外:ヨコナデ ハケ、ナデ	内:頭部スス 外:頭部から 肩にスス					139
105	河跡第1層	E - 30	蓋	口径: (14.7)	内:ヨコナデ ハケナデ 外:ヨコナデ 摩耗の為不明		口縁部浅 黄橙色 胴部褐灰色	1/2 口縁			420
106	河跡第1層	E - 30	器 台	壊部: 6.9 脚部: 10.5 器高: 6.9	内:脚部 ハケナデ 外:ミガキ		浅黄橙色	1/2 脚部 壊部			398
107	河跡第1層 河跡上 包	F - 31	蓋	口径: 19.2	内:ミガキ 外:ミガキ ハケ		浅黄橙色	1/2 口縁			421
108	河跡第1層	F - 31	直口蓋	脚部: (12.6) 底部: (2.5)	内:ヨコナデ ナデ、ハケ 外:ヨコナデ ヘラミガキ		淡橙色	1/2 底面	0.567		119

No	出土地	グリッド	器種	法量 cm	調 整	すすとこげ	色 調	遺存度	容量	備 考	実測 No
109	河跡第1層	F-31	壺	口径：(26.0) 肩部：(28.9)	内：ヨコナデ 底部、ケズリ 外：つよいヨコナ デ、ハケ		黄橙色	1/2 口縁			422
110	河跡第1層	F-31	壺	口径：17.9 器高：(11.7)	内：ヨコナデ ケズリ 外：ヨコナデ ハケナデ		浅黃橙色	ほぼ完 口縁		布留式	423
111	河跡第1層	F-31	器 台	脚部：(10.6) 器高：(5.9)	内外：摩耗風化 の為不明		橙色	1/2 脚部			397
112	河跡第1層	F-31	高 坏	器高：(7.2)			浅黃橙色	1/4 脚部			396
113	河跡第1層	F-31	壺	口径：17.4 底部： 2.4 器高：(26.0)	内：ヨコナデ ハケ、ケズリ ナデ 外：ヨコナデ ハケ	内：底面こげ 外：肩部口縁 部スス	浅黃橙色	完形 底面 口縁			424
114	河跡第1層 第2層	F-31	壺	口径：17.8	内：タクキの ちハケ 外：タクキの ちハケ	外：口唇部よ り下部	淡黄色	小片 口縁			115
115	河跡第1層	F-31	壺	口径：16.4	内：ケズリ？摩耗 外：ハケ			小片 口縁			116
116	河跡第1層	F-31	壺	口径：15.6 肩部：19.1 底部： 5.0 器高：(28.0)	内：摩耗ハケ のちナデ 外：ハケ		浅黃橙色	1/2 底面 口縁	4.05l		122
117	河跡第1層	F-31	壺	口径：(17.5) 肩部：(22.0)	内：ヨコナデ ナデ ケズリ 外：ヨコナデ ハケ	外：肩下部ス ス	浅黃橙色	1/4 口縁			123
118	河跡第1層	F-31	壺	口径：15.0	内：摩耗 外：ハケ		内：浅黄色 外：浅黃橙 色	1/2 口縁			125
119	河跡第1層	F-31	壺	口径：21.4	内：摩耗 外：ハケ		内：灰白色 外：にぶい 黃橙色	1/4 口縁			124
120	河跡第1層	F-31	壺	口径：17.0	内：ヨコナデ ハケ、ナデ 外：ハケ		浅黃橙色	1/2 口縁			121
121	河跡第1層	F-32	壺	口径：15.5	内：ヨコナデ ハケ 外：ヨコナデ ハケ	外：肩部スス	橙色	1/4 口縁			120
122	河跡第1層	F-32	深 鉢	底部： 9.2	内：ナデ 外：ナデ		淡黄色	小片 底面			107
123	河跡第1層	F-32	壺	底部： 5.5	内：ナデ 外：ハケのち ナデ	内：全焼に黒つ ぱい 外：部分的に 黒斑	内：黑灰色 外：にぶい 橙色	小片 底面			168
124	河跡第1層	E-33	壺	口径：(15.4) 肩部：(18.4)	外：朱痕	内：下半の一 部にこげ	褐灰色	小片 口縁			158

No	出土地	グリッド	器種	法量 cm	調 整	すすとこげ	色 調	遺存度	容量	備 考	実測 No.
125	河跡第1層	E-33	壺	口径: 17.8	内外: 摩耗の為不明		橙色	小片 口縁			117
126	河跡第1層	E-33	高 坏	器高: (6.3)	内外: 摩耗の為不明		橙色	1/4 脚部			399
127	河跡第1層	E-33	壺	口径: 13.4 器高: 5.6	内: ロクロナ デ 外: ロクロナ デ ケズリ		灰色	ほぼ完 口縁 底面			181
128	河跡第1層 包含層	F-32	高 坏	口径: 22.4 器高: (4.7)	内: ミガキ 外: ヨコナデ		浅黄橙色	小片 坏部			400
129	河跡第1層 中央水路 東西アゼ	F-34	高 坏	口径: 20.2	内: ミガキ 外: 摩耗	内: 黒斑	灰白色	1/4 口縁			419
130	河跡第1層	F-34	高 坏	脚部: 11.0 器高: (10.5)	内: 摩耗の為 不明		浅黄橙色	1/2 坏部 脚部			401
131	河跡第1層	F-35	壺	脚部: 12.8	内: ナデ 外: ハケ ケズリ		浅黄橙色	完形 底面			446
132	河跡第1層	F-35	高 坏	脚部: 10.0 器高: (6.7)	内外: 風化の 為不明		浅黄橙色	小片 脚部			402
133	河跡第1層 中央水路 東西アゼ		壺	口径: 15.7	内外: 摩耗 ハケ	内: スス	橙色	1/2 口縁			418
134	河跡第1層		壺	口径: 16.8	内: ヨコナデ ケズリ 外: ヨコナデ ケズリ	外: 脚部スス	浅黄橙色	1/4 口縁			118
135	河跡第2層	F-31	壺	口径: 20.4	内: ヨコナデ ハケ 外: ハケ		にぶい黄 橙色	1/4 口縁			142
136	河跡第2層	F-31	壺	口径: 12.8 底部: 6.3 器高: (26.0)	内: 摩耗 外: ハケ ナデ		浅黄橙色	1/2 口縁 底面			141
137	河跡第2層	F-31	壺	口径: 16.6 脚部: 24.4 底部: 7.8 器高: 30.3	内: ヨコナデ ケズリ 外: ヨコナデ ハケ	外: 脚部から 脚部にス ス	にぶい橙 色	ほぼ完 口縁	7.3L		137
138	河跡第2層 一基	F-31	壺	口径: 15.8 器高: (12.9)	内: ナデ?	外: 脚部一部 スス	浅黄橙色	1/2 口縁			136
139	河跡第2層	F-34	壺	底部: 4.0	内: ハケ ナデ 外: ハケ		内: 黒褐色 外: にぶい 黄橙色	完形 底面			138
140	河跡第2層 第3層	F-31	深 鉢	口径: (27.0)	内: 条痕 外: ハケ		にぶい黄 橙色	小片 口縁			162

No	出土地	グリッド	器種	法量 cm	調 整	すすこげ	色 調	遺存度	容量	備 考	実測 No.
141	河跡第2層		壺	口径：15.8	内：ヨコナデ ハケ 外：ヨコナデ ハケ	外：口縁から 肩部にかけてスス	灰黄褐色	1/4 口縁			140
142	河跡第2層		壺	口径：15.5	内：ヨコナデ ナデ 外：ハケ	外：肩部スス	浅黄橙色	1/4 口縁		波状文、 沈線	146
143	河跡第2層		壺	口径：18.0	内：ヨコナデ ハケ 外：ヨコナデ ハケ		内：にぶい 黄橙色 外：淡黄色	1/4 口縁			145
144	河跡砂層		壺	口径：18.0	内：ヨコハケ 外：ヨコナデ後 タテハケ		淡黄色	小片 口縁			130
145	河跡砂層		壺	口径：19.4	内：ハケ、ナデ 外：ハケ、ハケのちナデ	外：肩部にス ス	にぶい橙 色	小片 口縁			132
146	河跡砂層		注土器	口径：11.1 肩部：13.4 底部：5.0 器高：(12.4)	内：ケズリの ちナデ 外：ミガキ	外：全面にス ス、下半 特に多い	灰黄褐色	1/2 口縁		凹線文	134
147	河跡砂層		壺	口径：19.8	内：ヨコナデ ケズリ		白灰色	1/4 口縁			426
148				底部：6.5	外：ヨコナデ ハケ			底部			
149	河跡砂層		壺	口径：14.8 肩部：18.2 器高：(13.0)	内：ヨコナデ ハケ、ケズリ 外：タタキのちハ ケ	外：口縁以外 全面	にぶい黄 橙色	小片 口縁		列点文	133
150	河跡砂層		壺	口径：15.9	内：ヨコナデ ハケ、ナデ 外：ハケのちナデ			小片 口縁		波状文 直線文	131
151	河跡砂層		高 坯	口径：16.8	内：ミガキ 外：ミガキ	外：全面スス	灰黄褐色	1/4 口縁		凹線文	127
152	河跡砂層		高 坯	口径：19.6	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ ハケ		灰黄褐色	小片 口縁		凹線文	128
153	河跡砂層		高 坯	口径：20.7	内：ミガキ 外：ハケのち ミガキ	内：黒斑	浅黄橙色	小片 口縁			425
154	河跡砂層		蓋	口径：8.5 器高：3.2	内：ハケ 外：ハケ	内：口縁 1/3 黒斑 外：半分黒斑	にぶい黄 橙色	ほぼ完 口縁			129
155	河跡砂層		(台部)	底部：7.0	内：ハケ 外：ナデ面ハケ		灰黄褐色	小片 底面			135
156	河跡砂層		深 鉢		内：条痕 外：条痕	内：破片全体 スス 外：破片全体 スス	黑褐色	小片 口縁			153

No	出土地	グリッド	器種	法量 cm	調整	すすとこげ	色調	造存度	容量	備考	実測 No
157	河跡砂層		深鉢	底部: 8.9	内: 条痕 外: 条痕		褐色	小片 底面			154
158	河跡砂層		壺	副部: (43.0)	内: ナデ 外: 横方向の 条痕		にぶい黄 褐色	小片			151
159	河跡第2層 第3層	E-30	深鉢	口径: (26.0)	内: ナデ 条痕 外: ナデ 条痕	内: 口縁から 副部の一 部 外: 副部下の 一部	浅黄橙色 にぶい黄 褐色	1/4 口縁			166
160	河跡第3層	F-31	深鉢	口径: (25.0)	内: 条痕 外: 条痕	外: 副部の一 部にスス	にぶい黄 橙色	小片 口縁		補修痕あ り	157
161	河跡第3層	F-31	深鉢	口径: (27.0)	内: ナデ 外: ナデ 条痕	外: 副部にス ス	にぶい黄 橙色	小片 口縁		口縁に沈 線	164
162	河跡第3層	F-31	深鉢	口径: (34.0)	内: ナデ 外: 条痕		灰黄褐色	小片 口縁			161
163	河跡第3層	F-31	深鉢	底部: 9.6	内: ナデ 外: 条痕 底面: 福み物 底		淡黄色	小片 底面			156
164	河跡第3層	F-31	深鉢		内: ナデ 外: ナデ		にぶい褐色	小片 口縁		沈線	159
165	河跡第3層	F-31	深鉢	口径: (40.0)	内: ナデ 外: 条痕		浅黄橙色	小片 口縁			163
166	河跡第3層	F-31	深鉢		内: ナデ 外: ナデ		灰白色	小片 口縁			165
167	河跡第1層	F-31	大型壺		内: ハケ 摩耗 外: ナデ		にぶい黄 褐色	1/2		櫛描文	169
168	河跡第1層	F-31	深鉢	口径: (30.0)	内: ナデ 外: ナデ		浅黄橙色	小片 口縁			160
169	河跡第3層	F-31	深鉢	口径: (22.0)	内: ナデ 外: ナデ		浅黄橙色	小片 口縁			160
170	河跡第1層	F-31	深鉢	底部: 8.0	内: ナデ 外: 条痕		内: 灰黃 色 外: 浅黄 橙色	小片 底面			108
171	河跡第1層	F-31	深鉢		内: ナデ 外: 条痕		にぶい褐色	小片			109
172	河跡第1層		壺	口径: 11.4	内: ナデ 外: ナデ		黄灰色	小片 口縁		3~4条 の櫛描沈 線	152
173	河跡 P-55	E-30	高坏	口径: 19.4	内: ハケのち ミガキ 外: ハケのち ミガキ			1/4 口縁			345

No	出土地	グリッド	器種	法量 cm	測定	すとこげ	色調	遺存度	容積	備考	実測 No
174	河跡 P-54	E-30	器 台	底部：(10.0)	内外：摩耗		浅黄橙色	1/4 底面			356
175	河跡 P-56	E-29	有孔鉢	底部：2.6 器高：(9.5)	内：ハケ ナデ 外：ハケ ナデ		浅黄橙色	1/2 底面			343
176	河跡土器 ダマリ	E-30	壺	口径：13.6	内：ヨコナデ ハケ 外：ヨコナデ ハケ		浅黄橙色	口縁			357
177	河跡土器 ダマリ周辺	E-30	深 鉢		内：ナデ 外：ナデ	外：破片全体	灰黄褐色	小片 口縁		指引きの 文様	105
178	河跡上 包含層	E-29	深 鉢	口径：(33.0)	内：ナデ 外：条痕		浅黄橙色	1/4 口縁		口縁加飾	170
179	河跡砂層		深 鉢		内外：条痕		灰黄褐色	小片 口縁			155
180	河跡上 包含層	E-30	壺	口径：18.0	内：ヨコナデ ケズリ 外：ヨコナデ ハケ		浅黄橙色	1/4 口縁		凹線文 列点文	147
181	河跡上 包含層	E-30	壺	口径：19.4	内：ミガキ 外：ミガキ ハケのち ナデ		浅黄橙色	小片 口縁			427
182	河跡上 包含層	F-28	壺	口径：18.9 腹部：26.0	内：ヨコナデ ケズリ 外：ヨコナデ ケズリ	外：口縁	浅黄橙色	1/2 口縁		布留式	379
183	河跡周辺	E-30	壺	口径：19.15	内：ハケ、ナデ	内：底部	灰白+に ぶい橙色	ほぼ完 口縁 底面	6.55L		374
		F-30 ~32		腹部：24.15	外：口部ハケ	外：腹部下半					
				底部：2.9	腹部タキ						
				器高：26.3	下部ハケ						
184	河跡上 包含層	F-31	壺	口径：12.4 器高：4.38	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ ケズリ		灰色	1/4 口縁			183
185	河跡包含層	F-31	壺	口径：12.7 器高：4.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ		灰色	1/2 口縁			184
186	河跡P-1 包含層		有台壺	口径：13.9 底部：4.4 器高：1.8	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ		灰色	1/4 口縁 底面			194
187	河跡上 包含層		手捏ね	口径：4.0 器高：3.0	内：指頭圧痕 外：指頭圧痕		浅黄橙色	ほぼ完 口縁 底面			429
188	河跡上 包含層		手捏ね	口径：4.1 底部：3.2 器高：2.25	内：指頭圧痕 外：指頭圧痕	外：スヌ	浅黄橙色	ほぼ完			430
189	河跡上 包含層		手捏ね	口径：3.2 器高：2.6	内：指頭圧痕 外：指頭圧痕		浅黄橙色	完形			431

No	出土地	グリッド	器種	法量cm	調整	すすとこげ	色調	遺存度	容量	備考	実測No
190	河跡包含層		手捏ね		内：指頭圧痕		浅黄橙色	ほぼ完			432
191	河跡包含層	F-31	手捏ね	口径：3.8 器高：2.82	内：指頭圧痕		浅黄橙色	ほぼ完			433
192	包含層	F-28	甕	口径：20.8	内：ヨコナデ ケズリ 外：ヨコナデ ハケ目	外：口縁～肩	淡黄色	1/4 口縁			428
193	包含層	F-28	鉢	口径：13.0	内：摩耗の為 不明 外：摩耗の為 不明		橙色	1/4 口縁			188
194	包含層	F-32	手捏ね	口径：11.75 器高：7.65	内：指頭圧痕 ナデ 外：指頭圧痕		浅黄橙色	ほぼ完 口縁 底面			434
195	包含層	F-28	壺	口径：12.9 器高：3.3	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ		灰白色	小片 口縁			185
196	包含層 (あん部)		有台壺	口径：17.0 底部：10.9 器高：5.52	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ		灰色	1/4 口縁 底面			196
197	農道下 包含層	F-28	甕	口径：15.6 底部：12.4 器高：2.25	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ		灰色 灰白色	1/3 口縁			186
198	包含層	E-34	壺	口径：17.4	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ		灰白色	小片 口縁			187
199	38号溝	T-9	甕	口径：(14.4)	内：摩耗 外：摩耗		橙色	小片 口縁			443
200	38号溝	T-6 T-9	甕	口径：(9.4) 腹部：(12.8)	内：ヨコナデ ナデ 外：ハケ		淡橙色 褐灰色	1/2 口縁			444
201	東落ち込み	T-11	甕	口径：(11.8)	内：キザミ ハケ 外：ハケ		浅黄橙色	口縁 小片			172
202	東落ち込み	T-11	甕	口径：(18.0) 腹部：(17.0)	内：ハケが少 し残る 外：ハケ	外：胴部にや や濃くス ス	浅黄橙色	1/4 口縁			171
203	Pit 56	T-10	甕	口径：(17.8)	内：ヨコナデ 外：ナデ		灰白色	小片 口縁			445
204	東落ち込み 上層 包含層	T- 10~12	鉢	口径：(25.7) 器高：(10.8)	内：ヨコナデ ナデ 外：ナデ		明緑灰色	1/4 口縁 底面			201
205	西端掛土	T 区	硯				綠灰色	小片			221

図 版



藤江C遺跡第2次調査遠景（北から）



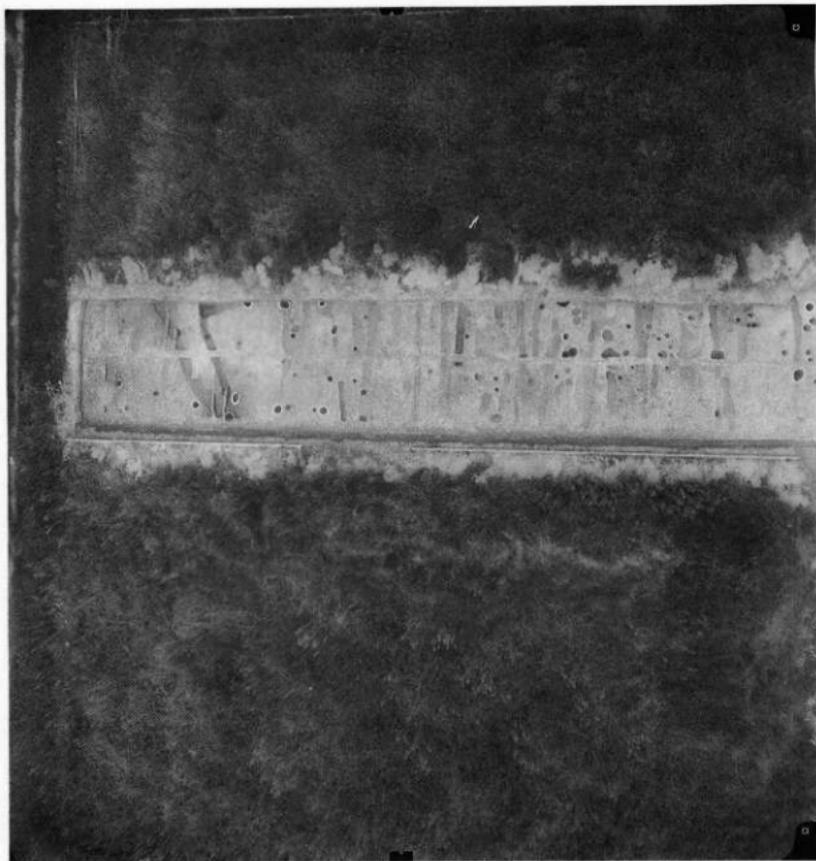
台風19号による被害



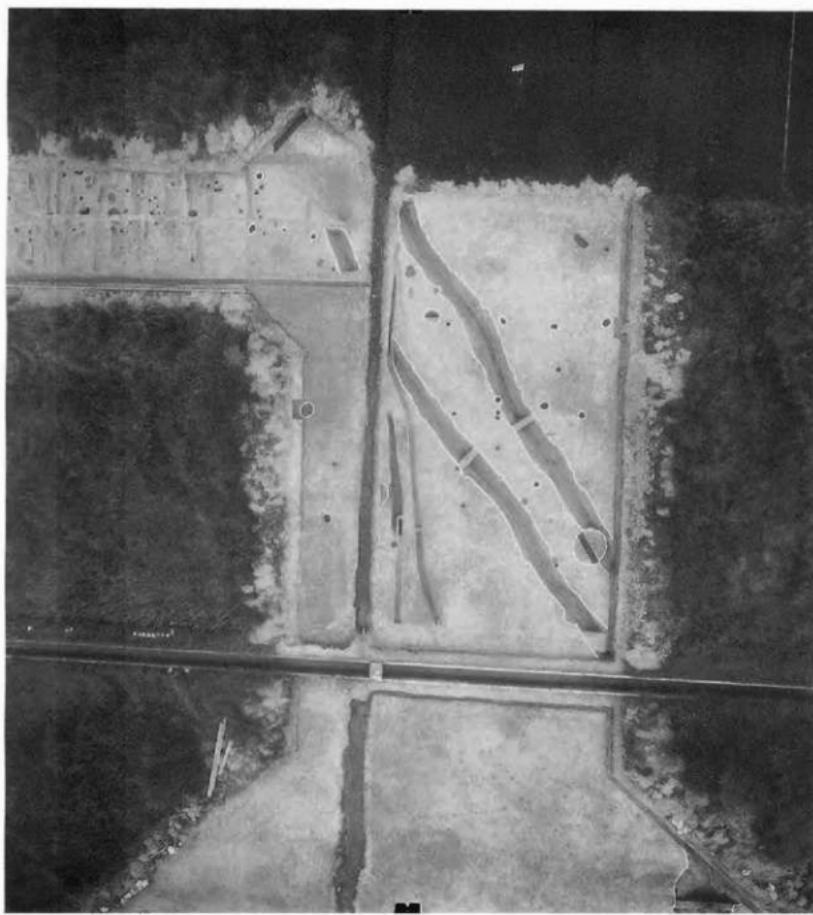
藤江C遺跡航空写真「上層」



藤江C道路航空写真「下層」



藤江C遺跡航空写真北西部



藤江C遺跡航空写真北部



藤江 C 遺跡航空写真西部



藤江C遺跡航空写真中央部



藤江C遺跡航空写真東部



藤江C遺跡航空写真南部

図版
10



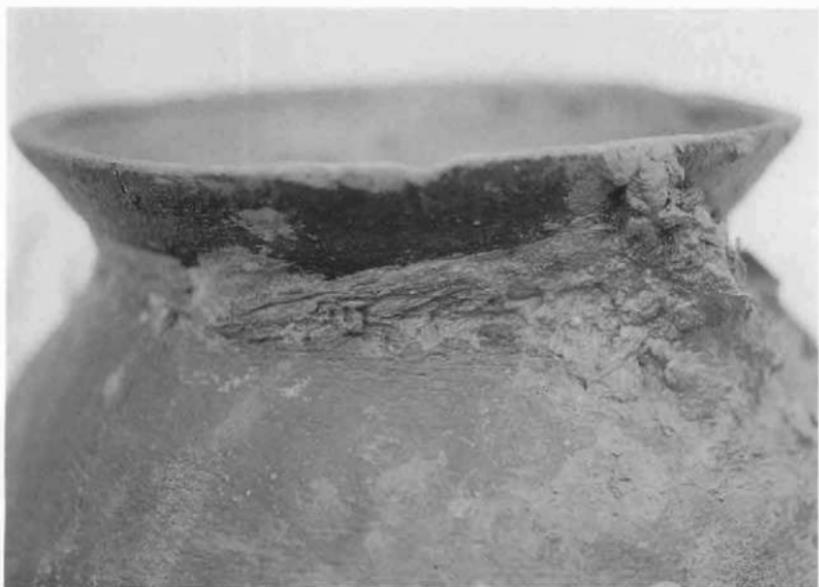
1号井戸断面



1号井戸完掘状況



1号井戸布留式甕出土状況



1号井戸出土甕頸部の有機質



3号井戸



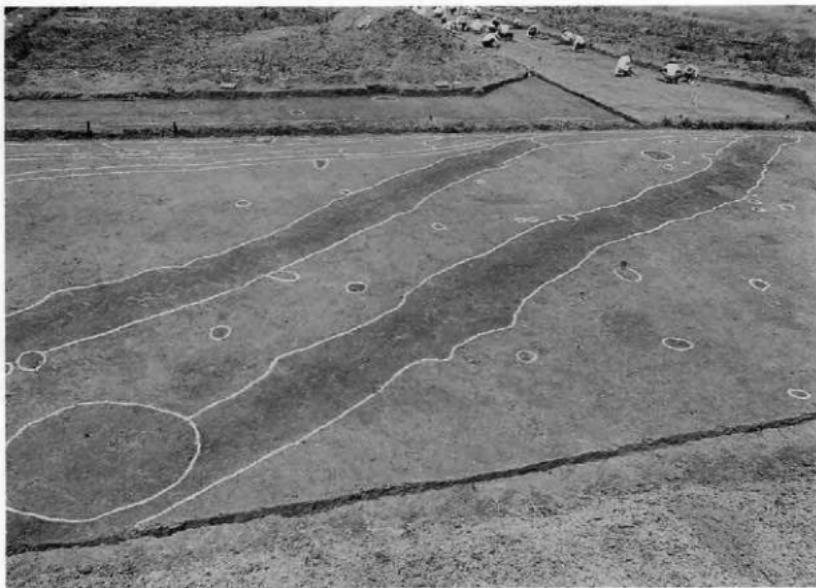
3号井戸土器出土状況



古墳周溝検出状況（北から）



古墳状造構検出状況（西から）



3号・4号溝検出状況（東から）



14号溝（北から）



14号・3号・4号溝完掘状況（南から）



14号溝分岐点付近検出状況（南から）



2号井戸・16号・18号溝検出状況（西から）



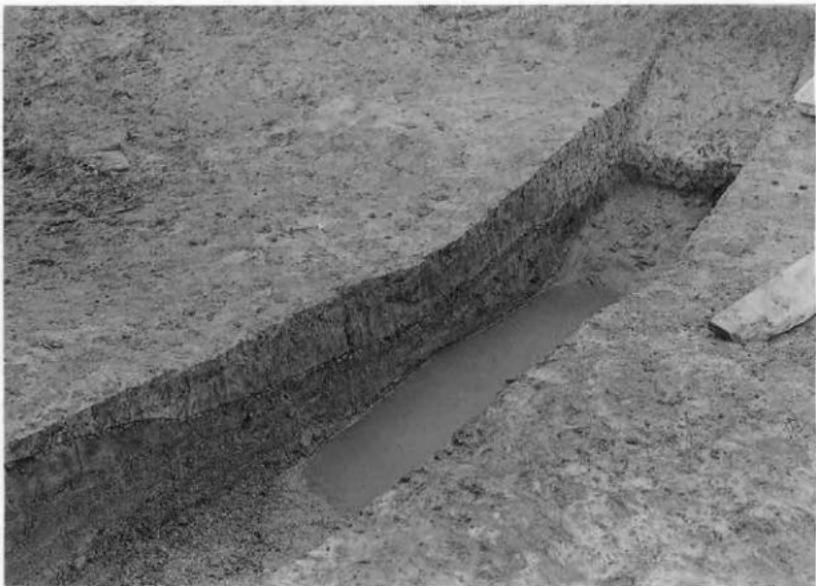
河跡検出状況（東から）



河跡作業風景（南東から）



河跡第1層の掘り下げ（F-31区付近）



河跡サブトレーンチ



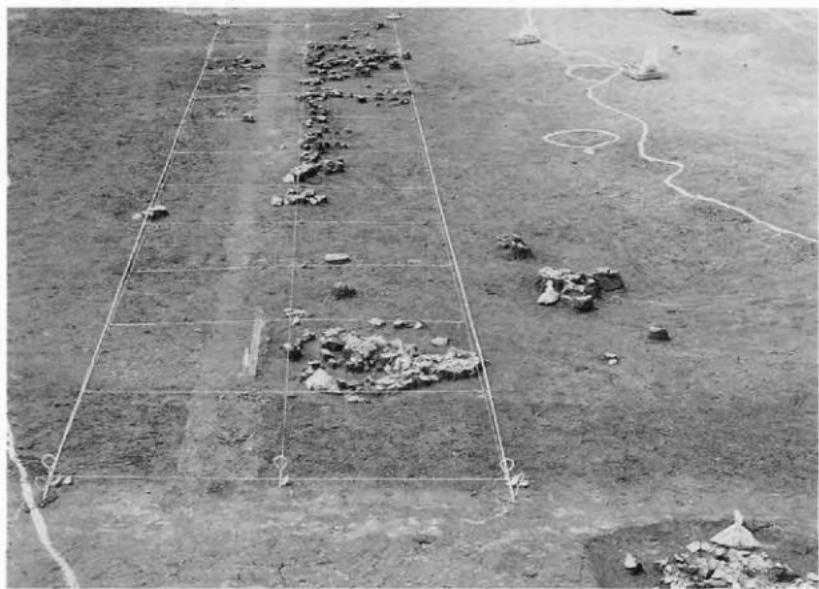
河跡土器出土状況（P-49・50）



河跡土器出土状況（P-33~40）



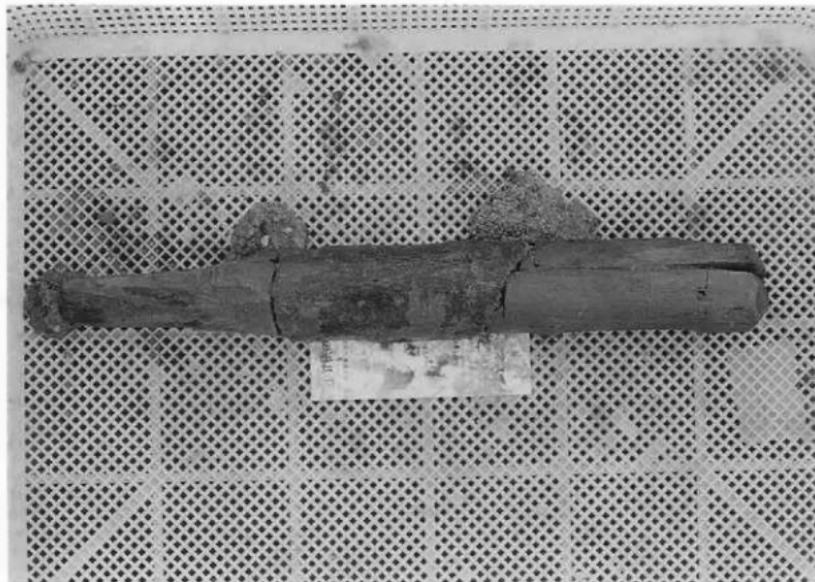
河跡土器出土状況（P-42）



河跡土器出土状況（P-26・27・51・52ほか）



河跡土器出土状況（F-32区付近）



河跡出土木製柄



T区調査区調査前（北東から）



T区調査区実査状況（東から）



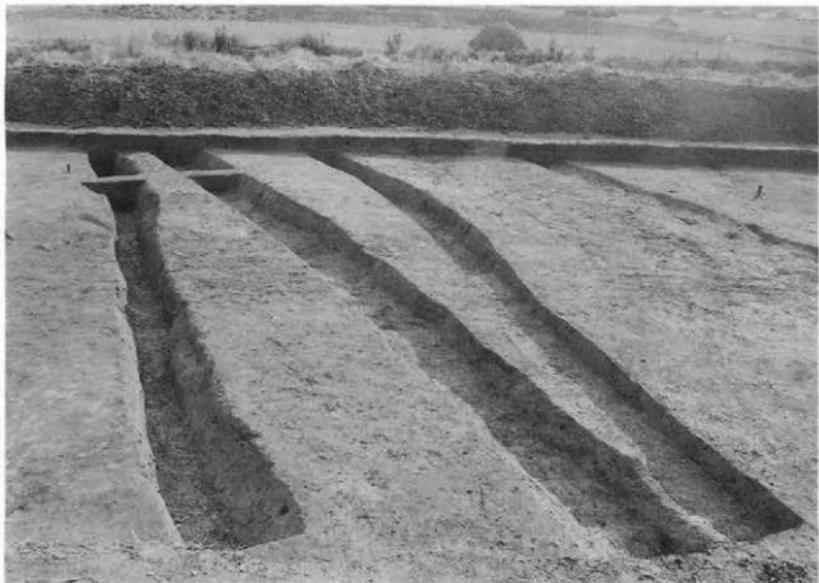
T-8調査区完掘状況（西から）



T-8付近完掘状況（北東から）



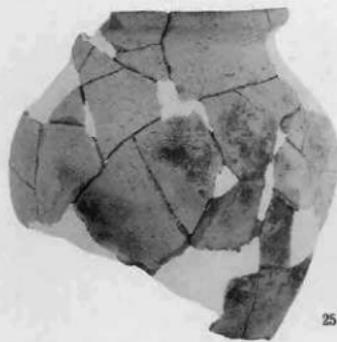
掘立柱建物跡（T-8区）（北から）



34号・35号・36号溝完掘状況（北から）



出土土器 1



25



28



26



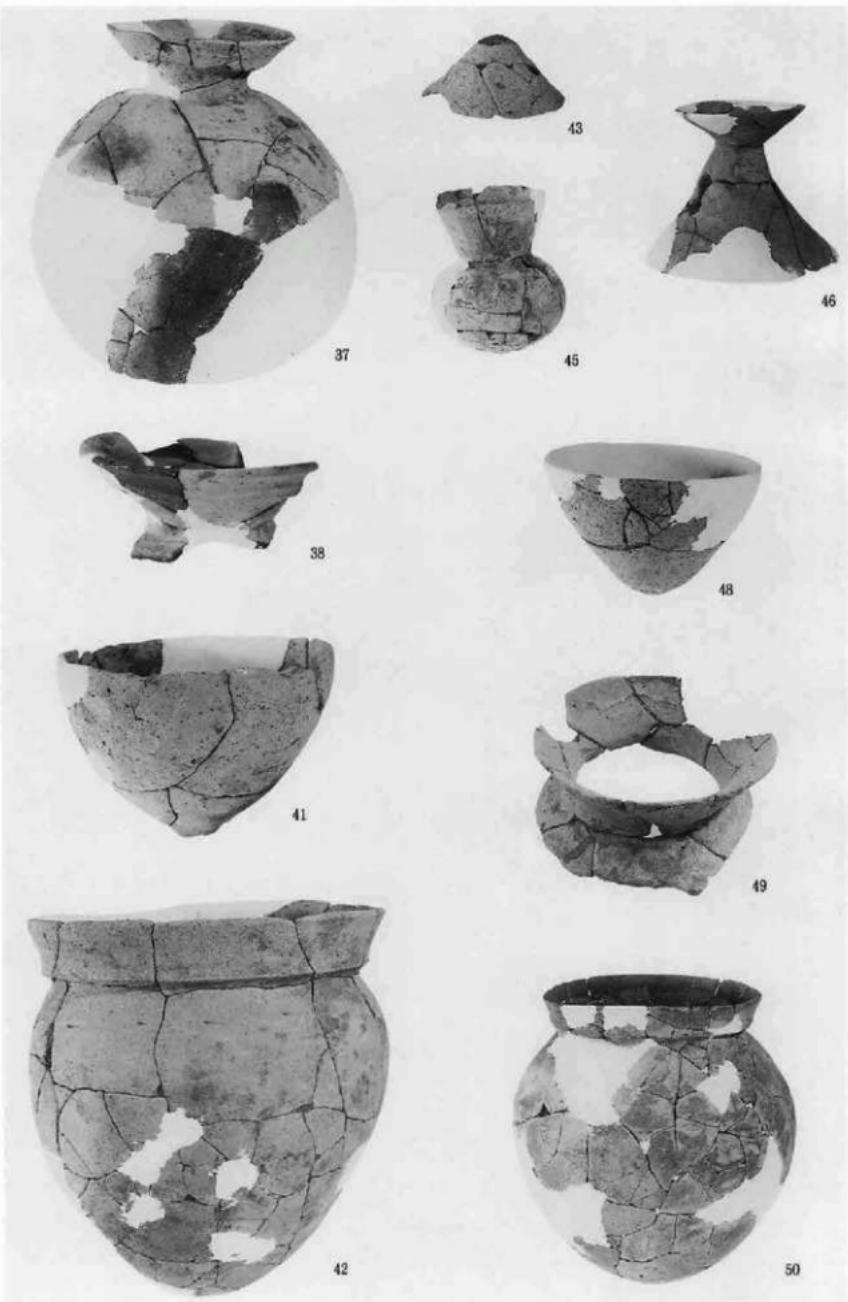
29



27



30



出土土器 3



51



55



56



52



57



53



64



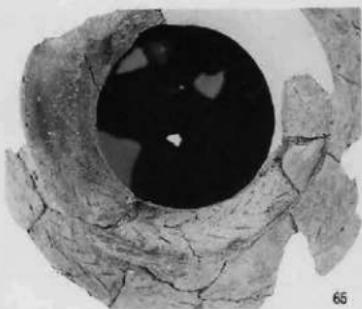
69



54



70



65



66



67



68



69



70



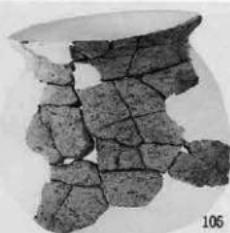
71



72



73



105



120



106



108



137



109



110



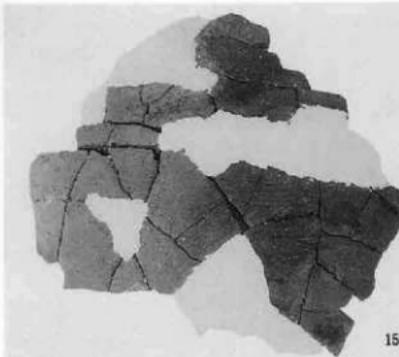
138



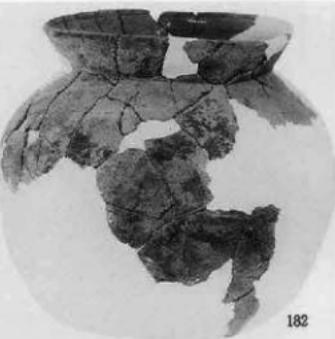
114



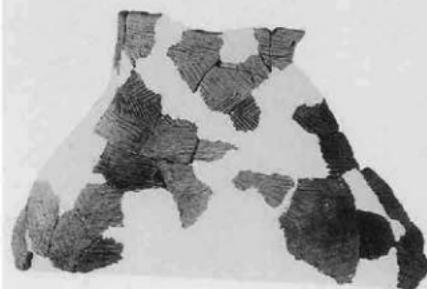
146



158



182



167



183



172



173



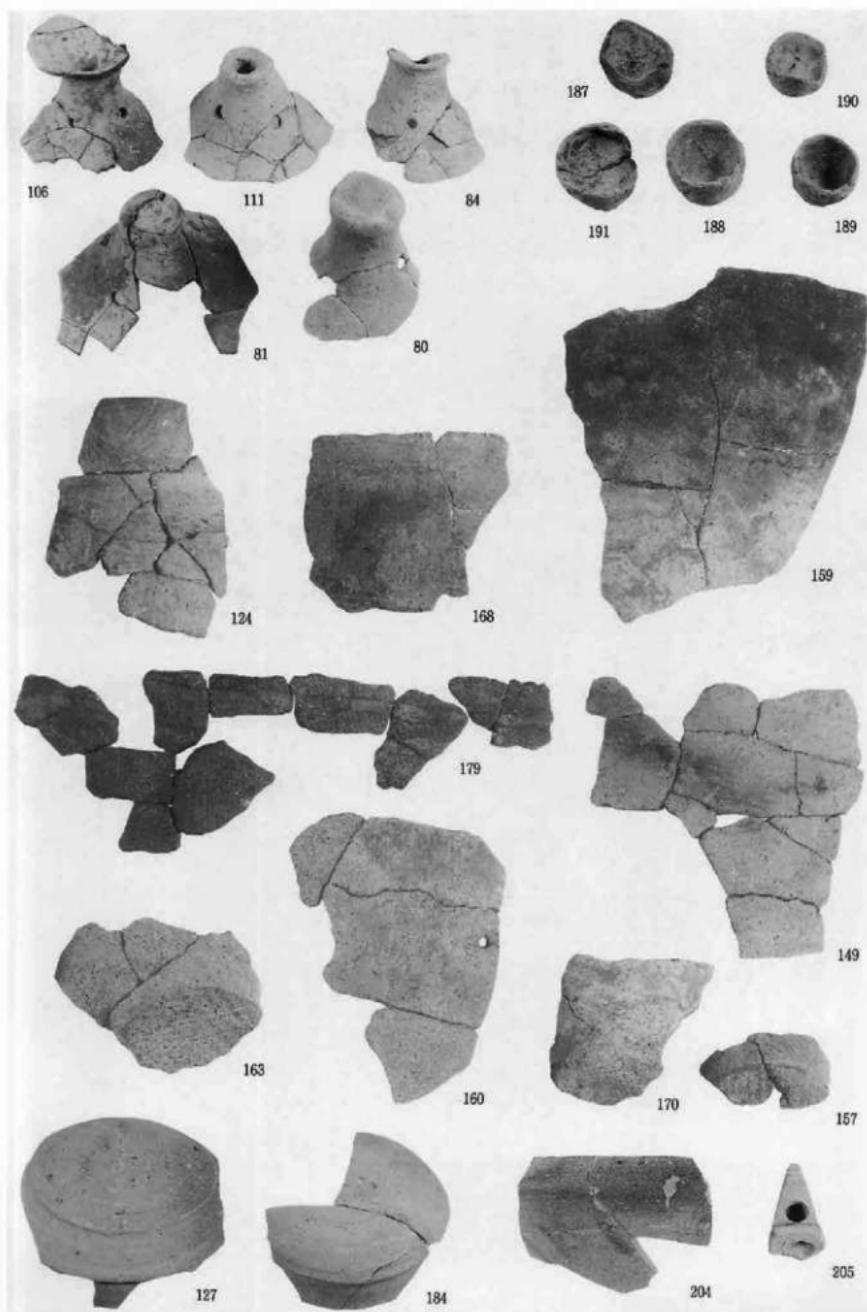
193



175



200



出土土器 8

報告書抄録

ふりがな	ふじえ							
書名	藤江遺跡Ⅱ							
副書名	金沢西部地区土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書3							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
収集者名	中屋克彦							
収集機関	石川県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒920 石川県金沢市米泉町4丁目133番地 TEL 0762-43-7692							
発行年月日	1997年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
藤江C遺跡 藤江C古墳群	いしかわけんかわさわし 石川県金沢市 こうじょうた 藤江北1~3丁目	17201 01272 01273	36° 35' 15"	136° 37' 30"	19910521 ~ 19911212	4,400	区画整理	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
藤江C遺跡	集落跡	弥生中期 古墳 奈良 平安	河跡 溝 鰕 井 土	弥生土器 土師器 須恵器 石器 木器 勾玉未製品	弥生時代中期頃の河跡検出。 古墳時代前期頃には、水辺で祭祀が行われたと見られる。			
藤江C古墳群	古墳	古墳前期	古墳					

金沢市藤江C遺跡Ⅱ

金沢西部地区土地区画整理事業にかかる

埋蔵文化財発掘調査報告書3

発行日 平成9年3月25日

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921 電話(0762)43-7692

印刷 前田印刷株式会社
石川県金沢市金市町ホ34番地1
